

『本當ですよ……だから、私、さつき大急ぎで、廊下を駈けて来たでせう？』

『何處に立つてゐたんだえ？』

『あの丘のところに……』

かう言つた小萬の目は、ぢつと一ところを見詰めた。いかにも恐怖に慄えてゐるかのやうに――。

『神経だよ。そんなことはありやしないよ。』

『でも……』

『ぢや、何かさういふ心當りでもあるのかえ？ こゝに、かうして二人でゐることが知れて、あの人も來てゐるつて言ふのかえ。』

『いゝえ、さうぢやないけども……。今日はあの人は町にはゐない筈だから、そんなことはないと思ふけども……』

『氣の故だよ。何うかしてゐるんだよ。お前は？ 今夜は？』

『……………』

小萬は黙つて耳を欹てるやうにしてゐるが、

『そら……そら？』

かれも今度ははつきりと人の歩く足音を聞いたやうな氣がした。そしてその足音らしい音は、さなが

ら運命の歩みか何ぞのやうに、靜かに且恐ろしく此方から向うに横ぎつて行くやうに思はれた。かれはかの女の留めるのなどには拘つてはゐられないといふやうに、急いで立つて、戸を一枚がらりと引きあけて見た。しかしそこには、その小さな庭には、落葉がさびしく遅く上つた月に照らされてゐるばかりで、何の影らしい影も見當らなかつた。

百五

『今日も一日此處に隠れて、泊つて行つて好いでせう？』

かう言つて小萬はかれの顔を凝と見詰めた。何うしたためか、何うした理由があるのか、此頃はかの女は町に歸つて行くのが何となく厭だといふやうに見えた。

『何うかしたのかね？』

『いゝえ、別に……』

『でも、黙つて、そんなに長く此處にゐては、町の方で騒ぎ出しやしないかね？』

『騒いだつて、構はない……。もう町に歸るのは、つくづく厭になつちやつた……』

『でも、あんまり長くなると、しまひには此處にゐるといふことも段々わかるやうになるよ。』

『わかつたつて構はない……』



かう言つて、小萬はわるく落附いたやうな風をその態度に見せた。

秋はもはや過ぎ去つて了つた。林の黄葉は既に全く散つて飛んだ。ある夜は風が凄しく起つて、終夜、木の葉が家の周圍をガサコソと音を立て、廻つた。朝起きた時には、沼の色が錆鐵納戸のやうに寒く戦へて、岸を縁取つた黄い蘆荻は、全く打倒したやうになつて見えた。

『寒くなつたわねえ、もう。』

ぢつとその沼の水の色を見るやうにして小萬は言つた。

別に、詳しいことはかの女は言はなかつたけれども、町の方は益々悪くなつて行きつゝあるらしかつた。もう一月とかの女は町に留つてゐることは出来ないやうな口振であつた。世話になつてゐる人のことに就いても、以前のやうに打明けてかれに話さなくなつたが、それでも強ひて問へば『何うも、しやうがないのねえ。あの人も……』かう丸で自分に關係してゐるものではないやうな調子で話した。

ある時は、眞面目に、

『で、何うなるの……？ 私達は？』

『さアね……』

『いづれ東京に行くには行くんでせう？』

『行つても好いのかね、もう？ 行くなら、いつでも行くよ。お前の方の話さへよくきまれば——？』

『私の方の話なんか、いつきまるかわかりやしない……』

『ぢや、世話になつてゐる人は、その儘放つたらかして、いつでも東京へ行つて了はうと言ふのかね？』

『……』

さう突詰めて言へば、さてさうでもないらしかつた。その世話になつてゐる人から小萬の心はをりをりは離れて來ても、それでも、此まゝ全く捨て去つて了ふといふことも出来ないらしかつた。(何うしてかう思ひ切がわるくなつたらう？ 何うしてかうはつきりした態度に出ることが出来なくなつたらう？) かう常に思つてゐるらしかつた。『本當に、私は意氣地がなくなつた！』時には染々何か思ひ當ることがあるやうにして小萬は言つた。

沼が初冬の暖かい日影に照されてゐる午後などもあつた。さうした時には、水鳥があちこちから多く集つて來て、その羽音やら啼聲やらで夥しくあたりは賑つた。鴨や鴈なども下りて來た。岸に添つて行くと、ふと、その前に、誰かが長い鎌でサクサクと蘆荻を刈つてゐる氣勢などがした。かれ等は黙つて竝んで歩いた。

## 百六

初冬の頃によく見るやうな冷たい透徹した空氣と、何處となく微かに影を持つてゐるやうな物象と、



やがてやつて来る自然のさびしさを豫想したやうな寂寞とを前にして、靜かに晴れた午後の日は傾いて行つた。沼は思ひ切つて碧く、水鳥の喧噪も一時途絶えて、蘆荻の伏した岸の入江には、さやかなさむさうな波が微かに皺を疊んでゐた。かれ等の舟は、靜かにいつもの隠れた船着の方へと近寄つて行つた。

かれ等は美しく澄んだ水を見た。斜めに靡いた丘の竹藪の上に大きく赤い日の落ちて行きつゝあるのを見た。そこからさして来た餘照が沼の半ばを赤く染めてゐるのを見た。水草の枯れたのが澄んだ水の中に沈んでゐるのを見た。小さな魚が一つ二つ靜かに泳いでゐるのを見た。

『今日は少し早かつたね。』

『さうね!……』

『少し、此處で遊んで行く方が好い。』

こんなことを言つて、かれ等は舟を蘆荻の深い中に入れた。そこからは、城址の土手も、土手に添つた路も、何も彼も見えなかつた。従つて此處にかうして舟がかくれて繋がれてあるのを岸から發見される恐れもなかつた。

かれ等は暫くの間其處にゐた。繰返しても繰返しても盡きない戀心が再びそこにあつた。靜かな樂しさうな笑聲がそこから洩れて来た。

丘の竹藪の上の夕日が靜かに落ちて行くと同時に、沼の半面を染めた餘照は、次第に色が褪めて、段々暗く暗くなつて行つた。かれ等の近くに映つてゐる夕暮の空の赤い雲も、見てゐるる中に、次第に消えてなくなつて行つて了つた。薄暮に近い空氣はいつかかれ等の果てしない戀心を微かに包むやうに見えた。

『もう、大丈夫だ。人の眼に附くやうなこともあるまい。』

かう言つてその深い蘆荻の中から彼等が出て来たのは、それから猶ほ暫らく経つた後であつた。薄暮は既に来た。城址の向うの林は既に刷毛で塗られたやうに夕闇の中に沈んでゐた。沼には既に霧が被衣のやうに懸つて來てゐるのをかれ等は目にした。

『ぢや、明後日……』

『ことに由ると、明後日はむづかしいかも知れない。しかし成るだけ來るやうにします。何うしても來られないやうだつたら、午前中に、何うかして知らせるやうにしますから。』

『成るだけは來るやうに——』

『え、それはもう來るつもりだけでも……』

『あの話もその時しなければならぬからね。』

『え、さうですとも……』



かう答へて小萬は笑ひながら手を出した。こんなことはつひぞこれまでないことであつた。かれはそれを堅く握つた。

『ぢや、左様なら。』

『左様なら……』

かう言つて、小萬は舟から岸へと軽く飛んだ。白足袋を穿いた吾妻下駄がくつきりと薄暮の空氣の中に動いて見えた。かの女はもう一度此方を振返つて見たが、そのまゝ靜かに土手の方へと歩いて行つた。かれは舟の中から、その白足袋の夕闇の中に小さく動いて行くのを凝と見送つた。

## 百七

始めは白足袋の動くのと、何方かと言へば背の低いかの女の姿とが、昔の城址の土手を前にした夕闇の路の奥に次第に消えて行くやうに見えてゐるが、暫くして再び見た時には、その動いて行つた白足袋がぱつたりそこに留つたやうにかれには思はれた。そしてその白いものがいつまでもいつまでもそこに残つて留つてゐるやうにも――。

かれはそれは錯覺だと思つた。幻視だと思つた。そんなわけではないと思つた。そしてもう一度ぢつと其方を見た。夕闇は次第に深くなつて行きつゝあつたけれども、それでも猶そこに、その白い小さな足

袋と背の低いかの女の姿がほんやり微かに浮び出してゐるやうな氣がした。『馬鹿な！ そんな筈があるものか。もう、とうに向うに行つた！ もうとうにあの廣い路のところへ行つた！』かう心の中でかれは自分自身を罵つて見た。

薄暮は次第に夜になりつゝあつた。地上には、沼には、いくらか霧がかかつてゐるたけれども、空はよく晴れて、星が美しく煌々と輝き始めた。ふとかれはある物音を耳にした。

それは蘆荻の夕風に戦ぐ音でもなければ、漁師の遠いところで櫂をあやつる音でもなかつた。何か囁く聲、何か求める聲――もしひよつとすると、廢墟の中に埋れたあるものの蘇つて來た聲、運命の大きな力に由つて、ある扉のくるゝのひそかに明けらるる音！

猶そこに、白い足袋とかの女の姿とがほんやりと――。

突然、かれはその白いものゝ此方に急いで動いて來るのを見た。つゞいて、その後には何か形があつて、その姿の此方に來るのを頻りに一生懸命に扯き留めやうとしつつかあるのを見た。その白いものは行つたり來たりした。

『貴方、來て下さい！』

かういふ聲を聞いた時には、かれは既にその舟から、跣足のまゝで岸へとあがつて一生懸命にそつちに向つて走つて行つてゐた。たしかに何事か起つたに相違なかつた。たしかに、かの女はそこである奇



變に遭遇したに相違なかつた。

續いて『あッ』と叫んだかの女の聲を聞いた。

その夕闇の中の姿と白足袋とは瞳と後に倒れたらしかつた。

しかしそれは唯瞬間であつた。かれはすぐそのかの女の後にある形の何であるか、急に起つた事變の何事であるかを知ることが出来た。

かれにはその身が何も持つてゐないことをも、またはその急に發見せられたる敵に對して、それと戦ふべき何物をも持つてゐないことを問うてゐる暇がなかつた。かれはすぐその中に飛び込んで行つた。

それは果してその小萬の世話になつてゐる男であつた。晝間から小萬の此處に戻つて來るのを待ちに待ち構へてゐた男であつた。舟から上つて土手について曲らうとするところの路の前にあらはれて、そこで女に決心を促した男であつた。男は遂に思ひ餘つて、舟の方へ逃れやうとした女を後から滅多突きに突いた。そのあらゆる怨み、家産を蕩盡せしめ、妻子を路傍に餓ゑしめ、その魂をさへ最後まで弄んで止まなかつた怨みを今こそは思ひ知れと言はぬばかりに――。

## 百八

女の倒れて俯伏しになつてゐる上に、馬乗に男が乗つて、滅多斬に斬つたり突いたりしてゐるのを一

番先にかれは目にした。かれは何とも言はれない氣がした。自分の體が蹴殺しにでも逢つてゐるやうな氣がした。かれはその身の危険を顧みてゐる暇はなかつた。赤手のまゝで、かれは攫み懸つて行つた。

男はそれを豫想してゐたらしく見えた。夕闇の中にそれを發見すると、男は慌て、そのまゝ女の體の上から飛び上つた。そして短刀を振り翳して此方に向つて來た。

長い間、潜かに戦はれてゐた心、怨み、または互に一人の女を所有しやうとした欲望、さうしたものが遂に二人をかうした争闘に伴れて來たのである。かれ等は今や否應なしに互に死に面して立たなければならなかつた。

夕闇は深くこの凄まじい争闘を包んだ。をりをりは短刀が星の光に煌めき、をりをりは、互につかみ合ひむしり合ふ姿の彼方に行つたり此方に行つたりするのが微かに見えてゐた。暫く經つた。と急に何方だかわからないが、倒れてゐる女の體に躓いてそのまま撞と倒れたもののある氣勢がした。つゞいて苦しげに唸く聲がした。微かに叫ぶ聲がした。

最初に傷けられたのは、疑ひもなくかれであつた。赤手であつたかれは、忽ちその短刀で肩を突かれた。横腹を突かれた。顔を突かれた。しかしかれはそれに弱らせられてはゐなかつた。またそのために勇氣を失つてはゐなかつた。かれは振翳された短刀の下を潜つて、何うかして組み附かう組み附かうとあせつた。かれはその目的を達することが出来るまで奮闘した。しかもその組み附いた時に、かれはか



なり重い深手を再び右の腹部に受けたやうに感じはしたけれども……。

打伏した女の體に男が躓いて、撞と後に倒れた時には、最早その血に染みた短刀は、その手からかれの手に確實にもぎ取られてあつた。今度はかれが男の首やら胸やらを滅多突きに突く番となつた。唸聲と叫び聲とが凄しくあたりに満ちた。

『さまを見ろ！』

かう言つて咽喉部に短刀をぐつと突立てた時には、男は既にスツとも言はなくなつてゐた。意氣地なく手足を兩方に啓いて、最早何等の對抗をさへ示さなくなつてゐた。

さてかれは立上るには立上つたが、それと同時に、さつき受けた腹部の痛手から血が凄しく流れ出して来るやうなを感じた。かれはそのまゝ、よろけて倒れさうになつた。

しかしそれは正氣であつた。勇氣もまだそれほど失はれてはゐなかつた。かれは傷口を片手に押へながら、靜かに小萬の倒れてゐるところへ近寄つて行つた。

『おい、復讐したぞ……。もう、今度こそは、全くお前は僕のお前だぞ。』

かうかれは女の耳に口を當てるやうにして言つた。

しかし小萬は最早何も言はなかつた。首を持ち上げやうとすると、既に生を失つたものゝやうに體がぐつたりとなつた。

『しつかりしなくちやいけない。』

かうかれは叫んで見た。

かれはつゝいて手を握つて見た。まだ温かであつた。黒い眼がぱつちり星の光に明いてゐるのが見えた。

『おい、おい——』

かう再びかれは呼びかけて、小萬の顔を闇に覗くやうにした。小萬は莞爾笑つたやうに見えたが、しかも體も首も、矢張ぐたりとして、重くかれの兩手に凭れ懸つた。何處かで、さびしくズホンの鳥の啼く聲がした。

## 百九

かれは男の状態が氣になつた。本當に死んだか何うかが氣になつた。かれはぐたりとした女をそのまゝそこに置いて、もう一度その傍に寄つて見た。

男は兩手を啓いたまゝ、すつとも言はずに全く死んで了つてゐるのをかれは發見した。かれは再び女の傍に戻つて來た。

『おい、おい。』



かう首を抱へるやうにして、かれは女の名を三度まで呼んで見た、しかし小萬も既に全く意識を失つて了つてゐた。

突如として起つて來た考へは、かれももう生きてはゐられないといふことであつた。この深手では――腹部に一箇所、胸部に一箇所、それに、何處だかわからないところにそれよりも一層深い痛手があつて、そこから絶えず流れ出してゐる血のために、一刻毎に呼吸が苦しく迫つて來つゝあるやうなのをかれは感じた。

(さうだ……。死ぬには此處よりも舟の中の方が好い。)

かうした考へが不意にかれの頭を横ぎつて過ぎた。同時に、小萬も一緒に伴れて行かうと思つた。かうしてその男の、敵の死屍と一緒に残して置くよりは、舟の中まで伴れて行く方が好い……。そして同じく死ぬものならば、舟の中で一緒に自分も死屍となつて横はる方が好い……。かう思つたかれは、そのまゝ、最後の力を揮つて――とてもさうしたことは出來さうには思はれないほど深手を負つてゐる身であるのにも拘らず、そのまゝ、小萬の體をかれの肩にかけやうとした。

かれは幾度となくよろけた。幾度となく倒れた。しかも、かれはその愛するものゝ半ば死んだ體を遂にその肩に載せることに成功した。かれはまだいくらか温か味の残つてゐる體を自分の體に感じさせることが出來た。

しかし、深手を負つてゐるかれに取つては、僅に一町ほどもない距離も、容易なことではなかつた。かれは何遍となく躊躇むやうにして休んだ。

空には星がキラ／＼と煌いてゐた。

岸に近く漸くかれのやつて來た時には、かれは最早その重荷を負つてゐるに堪へられなくなつてゐた。爲方なしに、かれは一先づそこに女を置いた。そしてかれ自身だけが舟の中に入つた。

かれは暫くそこに倒れてゐた。

かれは再び勇氣を奮ひ起して、何うしてもかの女をこの舟の中に伴れて來やうと思ひ立つたのは、それから何の位時間が経過したのか、或は十分乃至二十分位しか経たなかつたのか、それははつきりとはわからなかつたけれども、兎に角かれはもう一度舟の繋がれてある岸の方へと這ふやうにして動いて行つて、そこから手を延して、女の衣の裾をたよりに次第に此方へとその體を引き寄せるやうにした。

かの女の體は、やがて次第に靜かにかれの動いて行つたあたりまで引き寄せられて來た。かれは遂にかの女の髪を手にした。つゞいて闇を白く割つてゐる女の首のあたりを抱き寄せた。かれは最後の力をそれに籠めた。岸から舟に移る時には、その體の下半部は、水の中に落ちて微かに音を立てたけれども、しかもその次の瞬間には、何うやら彼うやら、かの女の體をその舟の中まで引寄せることが出來た。かれはほつとした。そのまゝ、ばつたりそこに倒れた。



何時間経つたか知れない。しかしかれは深手の創痍の痛みから再び意識を恢復して来た。かれの頭の上には、廣い穹窿があつた。星が煌々と金屬のやうに、天上の楽しい饗宴を開いて見せてゐた。

ズホンの鳥が魔の鳥のやうに、キ、キと鳴いて通つて行くのが聞えた。

丸で違つた世界——今まで生きてゐたところとは丸で違つた世界がかれの周圍にあらはれて来たやうな気がした。何も彼も皆な趣を異にした。色彩を異にした。感じを異にした。氣分を異にした。

かれはそこにゐる。そこにゐるにはゐるけれど、あらゆるものが次第に微かに、微かになつて行くやうなのをかれは感じた。かうしてかれが此處に横はつてゐるといふことも、その傍に小萬が死屍となつてゐるといふことも、土手下にその男が死んで倒れてゐるといふことも、皆その記憶から離れて行くやうな気がした。(あゝ矢張さうだつた。矢張あの歡樂が、あの世にも稀なる歡樂が、かうした自然の運命を生んで来たのだ。否、十年前に、初めて小萬の眼に觸れた時に、かうした運命は既にその最初の芽を出してゐたのだ。否、否——) つゞいて何か考へやうとしたが、その考へは竟に纏まらずに、そのまゝまた意識がほんやりとなつた。

此時ふとかれの眼に、『歡樂』といふ題で描かれた大きな外國のある繪畫が映つて来た。それは男女の

歡樂の場が此方にはなやかに描かれてあつて、向うに死の影の恐ろしく襲つて来るのを示したやうなものであつたが——別にむづかしいものでも何でもなく、いつか何處かの雑誌で見たものであつたが、それがはつきりと浮んで来て、容易にそこから離れやうとはしなかつた。

かれはちつとそれに見入つた。明るい歡樂の光線が次第に死の暗い光線に變つて行くのを見た時には、かれは何とも言はれないさびしさが總身に滲み通つて来るのを感じた。しかしその光景は決して長く續いてはゐなかつた。舞臺はいつとなく轉換した。今度はさびしい廢址があらはれて来た。

かれの眼の前には、再び昔の城址があつた。草深く埋れた石垣があつた。石垣の間に何疋となく出てゐる蛇があつた。黒く腐つた濠の水があつた。折れ伏した蘆があつた。長く解けた女の髪があつた。青い赤いピラピラした小さな魚があつた。(しかし、もう何も彼も駄目だ。駄目になつて了つた。あゝして集めた昔の人達の悲劇の材料も、燒落ちた城の火事を描いた文章も、何も彼も全く徒勞に歸して了つた。)

かう思ふと、丘の上の一室の机の上に積み上げて残されてある原稿が歴々とかれの眼に映つて見えた。(しかし、残り惜しいことはない……。少しもない。何うせ人間は敗滅して了ふのだ。皆な廢址になつて了ふのだ……。さういふことは、無限に人間の上に起つては消え、消えてはまた起つて来ることだ。新しい芽はそれからそれへと無限に廢址の上に萌え出して来るだらう。そして、昔曾てかの色の濃い紫の杜若が、人知れずかれの最後を暗示したやうに、矢張さうした暗示を絶えず人間に與へるであらう。)



かう思ふと、その城址の沼地の中に會て不思議に一面に咲いてゐたその美しい杜若がもう一度はつきりとかれの眼の前を掠めて通つて行つた。

鈴子の戀



## 鈴子の戀

—

鈴子は新に移轉して行く家に興味を持つた。それはお房姐さんの今迄住んでゐた家、六疊に四疊半にそれから奥の八疊。その八疊の一間が草花や植木の多い小さい庭に面してゐて、垣根つゞきに人氣のない空地が廣くつゞいてゐるのも氣持が好かつた。『さう、姐さん、引越すの？ ぢや、私、借りやう。』鈴子はかう乘氣になつて言つて、歸るとすぐ其話を養母にした。

今でも鈴子は獨立した一軒の家を借りて住んでゐるのではあつたが、隣りがすぐ養母のやつてゐる土地の見番の家で、何かにつけて監督されるのが煩く、それに入りに人も人目が多く、狭い巷路の又その上に狭い家並つゞきになつてゐる爲め、室といふ室は皆暗く、陰氣で、青空などは年中見たいにも見られないほどであつた。猫の額のやうな狭い庭、そこに瘦せた松が一本あるが、秋などは雨が終日わびしくそれに降りかゝつた。長火鉢の置いてある處からは、窓を隔て、向ひ合つてゐる隣の見番の一間か



ら、聞馴れてはるるが、又世話にもなつた人ではあるが、ちつともなつかしいとも何とも思はない養母の聲が常に煩く聞えた。

養母はおてると言つて、今年五十七、土地の髪結で一生終つたやうな女だが、今では弟子が多く、小金も出来て、見番のおてる婆さんと言へば、土地でも顔の立つ人達の一人である。鈴子は十一の時から藝者にすべく貰はれて来て、そこで三味線の撥の痛さをも、疝性の養母の小言をも、朝寒を川向うのお師匠さんに通ふ辛さをも、何も彼も覚えて来た。巷路を出た向うにある大きな石の華表、そこには月に二三度縁日の夜店が立つて、草花や、盆栽や、いろいろな人形などが並べられた。鈴子は来た當座、其處の店で、海ほづきを買つて来てはよく鳴らした。そしてそれから坂を上ると、大きな川に白い帆やペンキ塗の蒸汽が通つて、朝は鷗の群にきらきらと朝日がさした。姐さん達が綺麗におつくりをして、車で威勢よく其處を通つて行つたりした。

しかし今では、鈴子もお酌から立派な一本になり、それから自前になつて。昔羨んだ姐さん達にも多くはひけを取らないやうになつてゐた。三味線も上手だが、踊は藏前へ七八年も通つたので、今では名取になつて、何處のお座敷に行つても、すぐれたすらしとした姿を見せないことはなかつた。『鈴ちゃんの踊は旨いのねえ。根は肥つてゐるんだけど、踊ると、すつきりした姿に見えるんだからねえ。藝だねえ。』こんなことを姐さん達は言つた。

さういふ風に、表面は順序正しく、他の藝者などと比べて、後楯もあり、好い旦那もついて、ぐつと幸福に暮して来たのであるが、それでも、これまでに旦那を三度ほど取換へ、子供を一人生み、殊にその子供の旦那は、養母の眼鏡違ひで、金はあるが浮氣で、子が出来るとそのまゝ、他の藝者に氣を移して、さつさと鈴子を棄て、了つた。鈴子は今でもその旦那が他の妓から妓へと轉々移り變つて、相變らず道樂を仕つゝけてゐるのにひよつくりお座敷などで邂逅した。

『鈴ちゃん、變な顔をしてたよ。可哀相ねえ。此頃はあの旦那は鶴ちゃんと大騒ぎをしてゐるんだつて言ふから……。此間も花屋の廊下で、鶴ちゃんと一緒にあの旦那が歩いてゐるところにばつたり邂逅してね、鈴ちゃんが……。』

『氣の毒ねえ、何うして、あゝ浮氣なんてせう。もう五十ぢやない？』

『もう、その上に出てゐるんだよ、お前さん。』  
こんなことを寄ると觸ると、姐さん達は話した。

時には又、鈴子に、

『坊やさん、何うして？』

『久しく行かないわ。』

『でも、大きくなつたでせうね。』



『え、大きくなつたけどもね……。此頃ちや、もうすっかり田舎子になつちやつて、眞黒けな顔をして、洩なんか出してゐると、つまらなくなるわ。行つたつて張合がないわ。』

『何うしても、田舎にやつて置くとねえ。』

かう小妻といふ姐さんは、思ひ當るといふやうな調子で言つて、『それに、離れてゐてはねえ、何うしても、情愛がなくなるわねえ。』

『初めは、それでも、精々と、楽しみにして、風車なんか買つて、大騒ぎをして出かけて行つたもんだけども……。』

『何うしても、向うに馴染んで了ふからね。』

『でも、男の兒だから好いわ。』

かう傍から同じ年頃の、矢張近くに女の兒を生んだ照代といふ妓が言つた。

今の旦那は、つい昨年の秋に出来たのだが、何處かの會社の好い處をつとめてゐて、今まで道樂をしたこともなく、堅いので通つて來た四十男で、鈴子の家にも時々は來るが、何うもさうした處に入浸つてゐる處を見られては世間體が悪いと言つて、最初に鈴子と出来た河添ひの花屋の離座敷をその一間にして、來る時は大抵そこに來て泊つて行つた。花屋ではその旦那のために専用の夜の寢道具などを拵へて置いた。

お房姐さんの住んでゐた家に移轉したいといふ鈴子の希望は、かなり強く且つ眞劍であつた。鈴子は一番先にその養母の長い監督から脱したかつた。その聲から、その態度から、又その利慾に固まつた心から、眼から、空氣から……。次に鈴子は自由に單獨に一人になりたかつた。自分で自分の家や自分の周圍の主人公になりたかつた。靜かに自分の生活を振返つて見たかつた。二十五の年まで、唯無意味に、無邪氣に、他人の言ふまゝになつて動いてのみ來た自分の生活を……。

養母が容易に言ふことをきかないので、後には鈴子はそれを旦那の方へと結び附けた。『あそこなら、人目がさう多くないから、旦那だつて、入らつしやるつて言ひますからね。今のやうにしてゐちや、お實ばかりかゝつて、旦那だつて大變ですもの。』これでも猶ほ養母は何の彼のと言つて言ふことをきかなかつたけれど、性得素直な鈴子が、何うしても言ふことを聞かないので、終ひには養母も折れてそれを許した。養母は自分が長年使つて目をかけてやつた婆さんを附けてやることにした。

移轉の日は、此頃にめづらしい風も無い好い日和であつた。咲過ぎた梅が、寺の門前や、畠や、道の角などに白く浮き出すやうに見えて、垣根の傍に、草が青く萌え出してゐた。大きな桑の木の鏡臺、分厚なしつかりした二棹の箆筒、三味線が四五挺、それに木目のよく出た綺麗に拭き込んだ長火鉢、夜の寢道具、さういふものが荷車二臺に積まれて、細い巷路から、廣々とした寺近い新居へと運ばれた。荷車の後から、鈴子がついて行くと、向うから來た、昨夜近所の待合に泊つたらしいびん助といふ妓



が、

『姐さん、引越し?』

かう言つて、

『羨ましいわね、お房姐さんのゐた家? 好いわねえ。あとで、お祝ひに行つてよ。』

『本當にいらつしやい?』

『行くわ。』

立話を一つ二つする間に、荷物をつけた荷車は、ぐんぐん先へ先へと動いて行つた。寺の傍の井戸端には、しきびの緑葉が一杯に桶に入れられて置いてあつた。

婆さんと養母とは、先に行つて、バタバタと掃塵をかけたたり箒を使つたりしてゐたが、鈴子が行つた時には、それも大方は済んで、婆さんは湯氣の白く颯るバケツの中で雑巾を絞つてゐた。

『此處に長火鉢を置いたのよ、お房姐さんは——』こんなことを言つて、鈴子は上り端の次の間の柱の下の疊の際立つて新しい處を指さした。

『さうだね、矢張火鉢は其處かね。』

かう其處に来て見て養母は言つた。

しかし何より氣分を清々させるのは、四疊半から奥につゝいてゐる六疊の間であつた。障子には明

るい日影がさしてゐる。庭には梅が白く咲いてゐる。紅梅などもある。碧空も廣く見れば、それを横ぎつて通つて行く鳥の翼の影も見える。其處に鈴子は肝心なもの入つてゐる箆筒を置くことにした。

『元の家よりいくらか好いかしれやしない。氣が清々するよ。何だか生き返つたやうね。これで家賃が二圓しきや高くないんだからね。』鈴子は嬉々として晴やかな顔の表情をした。

其處に、お座敷がかゝつて來た。休みたいと思つたけれど、養母の手前もあるので、急いで支度をして鈴子は出かけた。

湊屋で一座敷、それがすまない中に、花月から又かゝつて來たので、そこに行つてそれをすまして、家に歸つて來たのは、もう日暮れ近い頃であつた。室といふ室は、もうすつかり片附いて、箆筒は箆筒、寢道具は寢道具といふ風に、額もあちこちの長押にかけられ、見馴れた梅に月の幅物は、床の間にかけてあるのを鈴子は見た。

『もう、瓦斯も電氣も來るの?』

『え、もう皆な來ます。』

婆さんも莞爾と明るい顔をしてゐた。

引越蕎麥の赤いせいろが澤山壁の處に押しつけて積んであるのを見て、『誰か手傳ひに來たの?』

『清どんや、竹どんが來て、今日は引越蕎麥だなんて言つて、御近所に配る次手に、取つて來て食べ



て行きましたよ。』

『さう？ まだあるの？』

『ありますとも……。』

『私も食べやう。お祝ひだから……。』

急いで、晴衣を不斷着に着改へて、そこに寄つて来て、『婆やおあがりな。』かう言ひながら鈴子は箸を手にした。

## 二

その新居は、新しい格子戸と、二坪ばかりの入口と、御影石の靴脱ぎと、傘やステッキを入れる瀬戸の丸いものとて、静かな緑葉の多い通りへと面してゐた。をりをり下駄の齒入屋の鼓が通つて行つた。午後三時過には、夕日が明るく上り端の中までさし込んで来た。

丸い白い軒燈には、電氣屋が梅屋と黒く書いて行つた。その下に小さく、中田といふ表札が出てゐるが、これは養母の姓で、貰はれて來ない前は、小川と言つてゐた。誰も書く人がないので、爲方なしに、鈴子はその表札に自分で禿筆を揮つたが、中田と書くよりも、何方かと言へば、小川と書きたかつた。しかし、今ではまださうも出來なかつた。

その女文字の中田の二字が、少し曲り加減になつて、細く小さく、夕日に照されて見えてゐた。

何うかすると、夜遅くなつてから、姐さん達が鈴子と一緒に寄つて行くことなどもあつた。その時には、とつつきの六疊の間は、賑やかな話聲や笑ひ聲で満たされた。お座敷の話、お客の話、朋輩同士の話、男女の話、子供の話、それからそれへと話は容易に盡きなかつた。そして婆さんは、きまつて通の汁粉屋や鮎屋などに使ひにやられた。

『静かで好いでせう、彼處は？』

かうお座敷などで、小鈴姐さんが言ふと、

『いゝわ、姐さん。川の方よりも餘程好いわ。静かで、世間が煩くなくつて……。越していらつしやいよ。』

『行かうかしら、私も……。』

『いらつしやいよ。』

『それに、あの家は新しいから好いわね。それに材木だつて、貸家普請ぢやないわねえ。』

『しつかりしてゐるわ。』

『矢張、養母さんは來る？』

『來るには來るわ。でも、ね、この前のやうに隣同士ぢや煩くつて爲方がないけれども、今度は來て



も始終来てやしないから……。」

『それはさうね。』

旦那も二三度はやつて来た。それも大抵は人目をかねて、日のある中はやつて来なかつた。好い家だと旦那も言つた。

『成ほど、これは好い、静かだ……。』かう言つて、奥の六疊をのぞいて見た。始めて来た時に『大丈夫だからお泊んなさい。』と強つて鈴子が言ふのを旦那は振切つて、一時間ほど其處にゐて、それからいつもの花屋へ行つて泊つた。矢張、人目が氣になるらしかつた。『だつて、知つてゐる奴がゐないとも限らんからね。……向うなら大丈夫だけでも。』

それでも二度目に来た時には『ぢや、泊つて行つて見るかな。』と言つて、奥の 二階の午後まで来た。藝者屋の内部といふものがめづらしさうに旦那の眼には映つたらしいが、しかし矢張、少しは金は使つても、料理屋、殊に川の眺望に富んだ花屋の二階あたりで、女中達に、ちやほやされる方が面白いらしかつた。夜のものも、此處と花屋とは大分違つてゐた。

『川の方が好い。朝の心持が違ふ。』かう言つて、旦那は矢張花屋の離座敷の方へ行つた。離座敷の間で、朝早く眼覺めた、艶な、自由な、何んなことでも出来るやうな氣分は、藝者屋の奥の間ではとても味へないやうに旦那には思はれた。

移轉してからも、養母はまだすつかり會計を鈴子には任せなかつた。家にあるものは、皆な家から持つて來させた。米も、炭も、饅頭も……。養母には、まだ何うしても鈴子の獨立が危なつかしいやうに思はれて爲方がなかつた。それに、近所とは言へ、さう離して置いては、何んなことが起つて來ないとも限らなかつた。それも、旦那との縁が深く、始終旦那が世話を見てやつて呉れるやうになれば、手離して置いてもやゝ安心だが、今ではとてもそれは出來ないと養母は思つた。十一二から今まで長い間世話をして來たことを考へると、單に利害の方から言つても、放つて棄てゝは置けなかつた。養母はそれとなく婆さんを捉へては、種々なことを訊いた。

しかし何も變つたことはなかつた。日は段々麗らかになつて、土手には見事に花が咲き、人が假裝行列などをして通つた。土地では其頃が一年中の稼ぎ時なので、藝者は皆な褌を取つて料理屋から料理屋へと急いで出かけた。夜は自働車が大きな光る眼を闇にかゝやかしながら、けたゝましい音を立てゝ、土手の上を通つて行つた。三味線の音は其處でも此處でも聞えた。

## 三

此頃、鈴子はまた藏前の師匠の許へ通ひ始めた。

何うかすると、午後四時過になつても、まだ歸つて來ないやうなことが折々あつた。養母は言つた。



『それは、お稽古だから、わるいとは言はないけれど、何も忙しい稼ぎ時にわざわざ行かなくつても好ささうなものぢやないか。お前今日はお座敷が二つかゝつて来たんだよ。』

『だつて、しやうがない。今度のは、是非覚えて置かなくつちやならないんだもの。』

『なら、爲方がないから、成るだけ早く歸るやうにおしよ。』

『それはその積りであるんですよ。でもね……つい遅くなるんですよ。』

鈴子はいつもと違つて熱心に、いつもは何んな張合がついて來ても時には休むこともあつたのに、今度は決して一日でも休まうとはしなかつた。朝も早く起きた。十二時過ぎに臥床に入つた時でも、朝は七時にはきつと眼を覺した。そして、大急ぎで、いつも婆さんの沸して置く湯のまだ十分に沸き切らないのにもかまはず、金盥にそれを取つて、顔を洗つて、それから、すぐお化粧にかゝつた。そのお化粧がまたいつもよりは念が入つて、髪や髻の出具合を何遍も何遍も梳き返した。着物はつい此間出來た大島を着た。

指には、ダイヤだの、眞珠だの、指環をあるたけはめた。

扇子と撥とを白い絹の手巾につゝんで、『ぢや、行つて來るよ。婆や……。』かう言つて出かけた。

かうした鈴子の朝の稽古が一月二月ほど續いた。

## 四

土手下に住んでゐる小鈴姐さんが、ある日の午後、その小さく細く中田と書いた鈴子の格子戸の前に立つた。そしてその格子戸に手をかけた。

鍵がかゝつてゐる。

（留守かしら？）

かう思つて、聲をかけて見やうと思つたが、別に用事といふほどの用事もないので、そのまま引返して、その二三軒此方の鈴木といふ藝者屋に寄つて話した。

それからまた四五日経つた。今度は、芝居の見物の切符を頼むために小鈴姐さんは又鈴子の家に出かけた。そして前と同じやうにして格子戸の前に立つた。そして手をそれにかけた。

矢張、鍵がかゝつてゐる。

『お留守！』

返事もない。留守と思へば留守のやうでもあるし、さうでないと思へば、さうでないやうなところもある。一度なら、小鈴姐さんも別に不思議にもしないのであるが、同じやうなことが二度あるので、ちよつと變な氣がして、



『お留守なの？』

もう一度聲をかけて見た。矢張返事がなかつた。

始めは午後だつたが、今度は夜だ。しかももうかなり遅い。晝間、お座敷で逢つてそれから今、見番で札を見て来たが、鈴子の札は裏がかへつてゐなかつたやうに覺えてゐる。……不思議だ……。かう思つて小鈴姐さんはそれとなく上り端の方を見たが、靴脱の上には下駄も何もない。がらんとしてゐる。唯奥についてゐるらしい電燈の餘光が微かにそこにさしてゐるばかりである。爲方がないので、小鈴姐さんは引返して来た。

二三日して、湊屋の座敷で一緒になつた時、小鈴姐さんは、

『鈴ちゃんの家は用心が好いのね。』

『何うして？』

鈴子の顔は氣の故かいくらか赤くなつて見えた。

『おとつひの夜行つたのよ、ゐるんだらうと思つたけれども、鍵がかゝつてゐるんだもの……。わりいから歸つて来たのよ。……この前にもさういふことがあつたのよ、一度……。』

『さう？』

少し顔を赤くして、『さう？ いつ？ おとつひ？ おとつひならゐたわ。』

『だつて、鍵がかゝつてゐるもの。』

『でも、婆やがかけて置くんですよ。此間、搔さらひに逢つて、蝙蝠傘だの、下駄だの取られたものだから、それでこりたもんだから、晝間でも何でもかけて置くのよ。』

『さう？ さうとは知らないもんだから。』

それで疑惑は解けたといふやうにして、小鈴姐さんの話は、今度は晝泥棒や搔さらひの話になつて行つた。『あそこは、静かで、人通りが無いもんだから……。』など、鈴子は言つた。

それで話は濟んだが、その時一緒にゐたお静といふ中年増が、餘所でまた小鈴姐さんと一緒になつた時その話がゆくりなく復活した。

『何うも變よ……。あの時、餘程言はうと思つたけれども……。私、黙つてゐたけれど、……。姐さんばかりぢやないわ。私も二三度鍵がかゝつた格子戸を明けたわ。一度なんか、たしかにゐるんですからね。きこえてゐた聲がぱつたり聞えなくなつたんですからね。用心ばかしぢやないと思ふわ。』

『さう？』

『たしかにさうですよ。何うかしたんですよ。あの仲の好い照葉ちゃんなどさう言つてゐるんですけど。』

『さうかね。』考へて、『まさか、あまり皆なが行くから、さうしておくんでもないんでせうがね。』



『さうですとも。』

しかしこれだけで別に變つたこともなかつた。さうしてゐる中に、また日が経つて行つた。土手の新緑が美しく日影を漉して濃淡の縞をつくつた。夜は待合の軒燈が明るく處々に點つて、三味線の聲が何處からとなく微にきこえて來た。四ツ目あたりの牡丹見の歸りの客が、途中で引かゝつて、遅くなつてから、藝者を五六人乗せて、自働車で土手の上を通つた。

袖垣、四ツ目垣、建仁寺垣で餘所から見えないやうにしきつた小さな室、それに面した草花の繪のやうに咲いた庭、或は長い廊下をずつとつき當つたところに隠されたやうにしてある一間、踏石傳ひにずうと遠く離れてゐる離座敷、でなければ、狭い通りに二軒三軒と庇を並べてゐる二階屋の一間、さういふ室といふ室には、皆な戀の歡樂の美しい繪のやうな光景が、待ち焦れる男女の心が、又は嫉妬が、恨みが、歡樂が、さういふものが一つ一つ混じり合ひ纏れ合つてゐるのであつた。ある室へは、襦を取つた美しい女が靜かに入つて行つた。ある室へは、低い私語の後の窓を月が朧ろにかすんで照した。爪彈の低い三味線には、女の涙が添ひ、唄ふ小唄の靜かな節には、男の思ひ詰めた心が籠つた。かと思ふと、『今度はいつ？ 早く來て頂戴よ。』かういふ艶かしい聲が新緑の灯に揺らぐ中に聞えて、やがて下駄を穿いて、襦を取つて女の出で來る氣勢がした。

ある大きな料理屋の二階では、大きな宴會が夜毎に續いた。流るゝやうな三味線の連れ弾、それにつれて翻す美しい舞の袖、客は皆な酒に酔つて、或は唄ひ、或は踊り、時には女の長い廊下を通るのをあとから追ひかけて行つたりした。『はアイ！』など、女中の長く引張る聲なども聞えた。水に添つたある小さな待合からは、朧な月に展げられた川が白く茫と霞んで見えて、對岸の灯の水に落ちて靜かに暗く揺ぐのが指された。

かうした光景の中には、離れ難い男の心もあるであらう。又は捨てられた女の苦しみもあるであらう。欺かれた心の傷痕を癒やしかねて自暴に酒を呷つてゐるものもあるであらう。又、それとは反對に、ある心はある心を求めてゐるだらう。ある情はある情に纏れ合つて行つてゐるだらう。又は生活の辛さに涙を流してゐる女心もあるであらう。合歡の花のやうにひつたり相合ひ相擁してゐる楽しい二つの心もあるだらう。さうかと思ふと、何も知らずに、世の中の辛さをも男女の中の悲しさも知らずに、唯お座敷に行くことをのみ誇りとし樂しみとしてゐる幼い無邪氣な心もあるであらう。指輪と着物とにあこがれて、好きも嫌ひもなしに、客のゐる奥の一間に入つて行く心もあるであらう。思ひのまゝにならぬのを嘆いて、つくづく色戀の果敢ないのを感じてゐる心もあるであらう。姥櫻の顧みる人もなくなつたのを歎く心もあるであらう。——しかし、土手の上はいつも靜かで、交番のある、そして巡查の退屈さうに立つてゐる路の角を向うに曲ると、川は靜かにたぶたと灯を映して流れて、船頭の棹歌の斷續する彼方に、都會の夜の灯が美しく明るく空を照らしてゐるのが眺められた。



『鈴ちゃん、踊つて頂戴。』

かうかの子姐さんが言つた。

『でもね……。』

躊躇してゐると、客は、

『踊れよ、君！』

かう傍から促した。

『でもね……。』

『文句はぬきにして、踊れつて言つたら、踊つたら好いちやないか。』

『踊りますよ！』

かう鈴子は、心安立に焦れるといふやうな語氣で言つた。

やがて姐さんに何か囁くと、

『さうねえ、私、弾けるかしら？ あれには、富本の手が入つてゐるところがあるねえ。』

『まうよ。』

鈴子は自分で姐さんから三味線を取つて、そして、その難かしい富本の手の入つてゐるところを靜かに弾いて見せた。『さうだつたねえ。』かう言つて、今度はかの子姐さんが三味線を取つて弾いて見たが、

『この踊の三味線なんか、もう何年弾かないかわかりやしない、鈴ちゃん、此頃、行つて習つたの？』

鈴子は點頭いて見せた。

『て、此頃でも行くの？』

『え、……。』

『熱心ねえ……。矢張、朝早く……。』

『え、……。何うしてもね、早く行かなけりや、大勢來ますからね。』

『本當に藝熱心ね。』かう言つたが、又、三味線を弾いて見て、

『かうだね。』

『さう……。』

『途中で、間違つたら、御免よ。』

で、鈴子は、さつき三人で揃つて踊つたお酌の一人から、金ピカの扇子を借りて、サツと裾をさばいて立つた。三人の客はそのまゝ、盃を下に置いた。

相對して見てゐては、さう際立つて美しいと言ふほどではないが、扇を取つて立つと、ぐつとその容



色なり態度なりが立勝れて来るのを誰も彼も見た。草花のボツボツ白く出てゐる派手な襟、何處へ出てもひけは取らないといふやうな金ピカの帯、蛇籠に水車のついた裾模様、いきなり向うに裾を引いて歩いて行つたと思ふと、そのまゝ、坐つて、扇を前に置いて、首を低れて、そして、三味線の調子の揃つて来るのを待つた。

かの子姐さんの弾く上手な三味線は、金石でも叩くやうな高い調子を出して、次第に宛轉とした相の手から唄の文句へと入つて行つたが、ふと前に置いた扇を手にした鈴子は、そのまゝ、ぐるりと體を廻して、立つてそして靜かに踊り始めた。

すらりとした體、宛轉とした唄と三味線、それが唯一つになつたかのやうに、又は眼の表情と、心と、手足と、姿と、それが滑らかに一緒になつて靡いて行くやうに、又はその態度やら調子やらの中に、昔からの戀の歡樂と嘆きと情緒とが満ちて溢れて來てゐるやうに、乃至は踊つてゐるものゝ戀の纏綿とした情緒と感傷と悲哀とがそのまゝ、そこにも絡み附いてあらはれて來てゐるかのやうに、靜かに一座に艶な美しい空氣の漲り渡つて來るのを感じた。

眼は靜かに艶に動き、手と足とは軽くやはらかに流るゝやうに靡き、色彩の濃やかな姿は、時には後の帯の模様を見せ、時には前の裾の模様を浮び上るやうにした。三味線につれ、唄につれて、或は立ち、或は踞し、或は袖をひるがへし、或は體を深く沈ませるやうな氣もすれば、又は言葉や態度では言ひあ

らはすことの出来ない深いやさしい情緒がその周圍を繞つて踊つてゐるやうにも思はれた。そこにある戀は悲しい戀か、それとも嬉しい歡樂の極みの戀か、それとも又は身も心も捨て、靡いて絶つて行く戀か。次第に鈴子の眼には、あつき血が湧き、熱した心が靡き、それと共に、言ふに言はれない情緒が、その體を、その踊を、その姿を世にも稀な美しいものにした。

唄と三味線と踊とは、靜かに、又は急に、その富本の相の手の入つてゐるあたりに行くと、流るゝ水もこれがために留り、咲いた花もこれがために散るといふやうな美しい冴えた氣分を見せて來たが、次第に終りに近く、見る人の心を恍惚たらしめずには置かないといふやうな境に至つて、やがて靜かに開いた扇を閉ぢて、そして其處に斜に身を引いて見せた。終りはつひに來た。

三人の客は思はず手を拍つた。

いくらか興奮したやうな顔をして、鈴子が此方にやつて來ると、

『巧いな……。』

かう言つて、客の一人はすぐ盃を鈴子にさした。

『本當に上手ねえ。』

かうかの子姐さんが言つた。

『駄目ですよ……。難かしいから……。』



『鈴ちゃんの踊は、魂が入つてゐるから、違ふわ。上の空ぢやないんですもの。』  
かう傍にゐた染次といふ中年増が言つた。

『本當だな。氣分が生きてゐる。』

もう一人の客もかう言つて、盃を鈴子にさした。誰も彼も、鈴子の踊の中に、ある戀と情緒とが生きて動いてゐるやうなのを感じずには居られなかつた。

## 六

毎朝藏前の師匠に出かけて行く時には、鈴子はわざと川添の土手の方を通らずに、四ツ目垣があつた椎の大樹があつたり富豪の別荘の瀟洒な門があつたりする、靜かな人通りの稀れな裏道を選んで、それから混雑と場末の小商賈の庇を並べてゐる町を通つて、傳馬や荷足や肥料船の絶えず往來する黒ずんだ水に架かつた橋を渡つて、その向うにある町を貫いてゐる電車の停留場に行つて、其處に暫く派手な美しい姿を見せて、向うからやつて來る電車を待つた。

この電車には、鈴子を知つてゐるやうな、又は鈴子の近所に住んでゐるやうな人達は誰も乗つてゐなかつた。汚い顔、あれた唇、亂れた髪、乃至はその近くにある汽車の終端驛から下りて來たやうな大きな鞆や包を抱へた人達が乗つた。扮装が派手なものと、様子が普通の女と違つてゐるので、乗つた時には、

車内の視線が急に此方に向いて來るけれども、それもほんの一時で、すぐ元の状態に復して、鈴子は誰にも知れない心安さを感じた。鈴子は、二月三月の間に起つたことを胸に繰返さずには居られなかつた。かの女は楽しい歡樂にあこがれる心と、待ち焦れて焦々とする心と、戀に満足して何も彼も忘れて了つたやうな溺れた心との間に、根強い、眞劍な、今度こそ本當のものを攫んだやうなある眞面目な意志が心強く加つてゐるのを見た。それにしても不思議な縁だと思つた。あゝ、いふ風にして、時の間に深くびたりと心が合つて行かうとは思はなかつた。新に移轉した時分には、まだそんなことがあらうとは思はなかつた。さういふ男があらうとも、又はさういふ運命が自分の前に待つてゐるやうとも思はなかつた。しかし、さういふことを繰返して考へることは寧ろ稀で、大抵は逢ふことの楽しみ、深く打明け、語り合ふことの楽しみ、あてにして行つて來てゐなかつた時の失望、又は互に相見る喜悅、互に相戯る、情緒、別れて來る淡い悲哀、つゞいて將來の二人の戀の成行などがいつも頭を掠めて行つた。かと思ふと、美しい繪のやうな奥の一間のシーンや、澤々と拭き込んだ廊下や、下に展げられたダリアの赤く白く紫に咲き亂れた小さな庭や、前にジツクザツクした屋根を越した向うに、大きな煙突から漲るやうに巻き上がる煤煙や、さういふものに雜つて、その折々につけての男の言葉や態度が際限なく思ひ出されては消え、消えては又思ひ出された。小さな嫉妬などもをりをりは起つた。男には前に何人も女があるらしかつた。霞町にもあれば、柳橋にもあるらしかつた。何うかすると、鈴子は半日待ぼけを食つ



て、夕暮近く迄其處に一人であることなどもあつた。それに金も二度に一度は此方から出した。それを苦にしてゐる譯ではないが、養母に監督されてゐる身には、まだ金を自由に自分で使ふ譯には行かなかつた。一月程前にも、その金をつくるために、頭のをそつとある人に頼んで質に置いて貰つた。それがまだ出さずにあることなどを鈴子は考へた。つゞいて、一昨夜、旦那にねだつて、金を少しばかり貰つて、それを今、帯の間の財布の中に入れて持つてゐることを考へた……。その間にも電車は絶えず走つてゐた。河岸、其河岸に並んだ二階屋、たぶたぶした量の多い水の上に勢よく動いてゐるペンキ塗の小蒸汽、白い大きな帆、軽く操られるやうに漕がれて行く傳馬、その向うに大きく川を跨いでゐる鐵橋……。

その鐵橋の前で電車を乗替へて、その鐵橋を渡つてからまた電車を乗替へた。鐵橋の上を電車が渡つて行く時には、その二階からすぐ眼の前に見える大きな烟突がその下流に添つて煤煙を漲らしてゐるのはつきりと見えた。晴れた空には殊にそれが鮮かに見えた。鈴子は其處に來ると氣がいつもそはそはした。

鐵橋を渡つて乗替へてからの電車の中では、鈴子は何となく不安を感じた。そこでは、何うかすると、鈴子は知つて居る顔や同じ朋輩や自分の近所のものに逢ふやうなことが度々あつた。ある時は常にお座敷に聘ばれて行く肥つた男に逢つた。ある時は、『鈴子姐さん！』かう言つて頓狂な聲をお酌から懸けら

れた。三味線の師匠の弟子のいやに生白い顔をしてゐる男にも逢つた。その男はいやにニヤニヤして、『お稽古？』など、言つた。その電車は大抵は込んでゐるので、鈴子は釣革を手に、白い腕を見せて、いつも入口の處に立つてゐた。

名高い踊の師匠の家は、そこから停留場を三つ越した處のすぐ近くにあつた。それは瀟洒な意氣なつくりで、格子戸を明けて入ると、習ひに來てゐる弟子達の下駄の派手な鼻緒が澤山に其處に置いてあつた。廣い八疊と十疊との室があつて、三味線、鼓、さういふものが其處等に置いてあつたり、その時々花が綺麗に床の間に生けてあつたりした。弟子達は霞町からも來れば、柳橋あたりからも來た。多くは派手なつくりをしたお酌や藝妓達などで、華やかな賑やかな氣分が家の内に漲つてゐた。

踊の師匠、老いた師匠、それにその高弟とも言はる、門弟二人、さういふ人達が三味線を弾いたり踊を踊つたりして弟子達に教へた。ひるがへる袖、靡く姿、表情と、手と、足と、それに三味線と、唄と、それが一つになつて動いて來るやうになるまでに仕込むには、師匠も並大抵の努力ではなかつた。

鈴子は長い間、その家の空氣に馴染んでゐた。六七年、或はそれよりもつと長く、かの女は此處に來て踊を習つた。鈴子はまだ幼かつた自分の姿を、或は壁に寄せて、又は縁側に坐らせて發見した。覺えにくい振事を何遍も何遍も教へられてゐる自分の小さな姿をも見た。その時分から見ると、師匠も年を取つて、此頃では小鬢にも白鬢が見え、師匠の細君の綺麗な顔にも小皺が寄つた。矢張名高い評判な



師匠だけに、弟子は殖えこそすれ、少しも減つたやうなさまは見えず、それからそれへと若い人達が常に其處に集つて來てゐた。

『鈴ちゃん、此方にお出でなさい。』

こんなことを言つて、細君は鈴子を居間の方へ伴れて行つたりした。

『今日は清さんは？』

『ちよつと出かけました。』

かう細君は言つた。

清一と言ふのは、此處の高弟で、始終此家に入入りしてゐた。矢張師匠のいそがしい時には代つて稽古をしてやつてゐるやうな人で、年は三十一二、おとなしい色の白い氣分の柔らかな髪を綺麗にかけた人であつた。鈴子はその清一を透して今度の戀の相手の出來たことなどを考へた。その相手は、清一の友達で、年は三十五の羊の三碧、兜町の方へ出てゐる男で、この師匠の家などにも時には出入りしてゐたのであつた。三味線も弾けば、唄などもよく唄つた。

鈴子は毎日此處に來なくつても好いのはあつたが、鈴子の出てゐる土地から習ひに來る藝妓やお酌も二三人はあるので、此處に其の姿を見せないでは、『此頃は鈴ちゃんちつとも來ないわ、』とか何とか言はれて、それからそれへとすぐ知れて行く危険があつた。養母は、見番をやつてゐるので、鈴子の噂は

人一倍早く知れた。

鈴子は居間で世間話をしたり、彼方此方の役者の噂をしたり、今度の歌舞伎の面白いことを話したりして、時間を過ごしたが、自分の番が來て、ちよつと濫習つて貰つて、それから此處に來て知つてゐる女達と又暫く話をした。此處から見た花柳界の裏面、又は藝妓達の浮氣物語、やれ旦那が何うしたの、情夫が何うしたのと言ふ話は、いつもこそそと小聲で囁くやうに話されるのであるが、その日は霞町の小富といふ鈴子と同じ年頃の妓が來てゐて、其町で有名な綺麗な一本になつたばかりの妓が、産の出血で一夜で亡くなつたといふ話をした。

『まあ、いつ？ それは？』

『昨日よ。』

『まあ、あの雪ちゃんか……まあ。』驚くやうに鈴子は胸を躍らせて、『此處のお上さん知つてゝ？ もう？』

『まだ、知らないでせうよ。』

『さう。まあ、ねえ、あの雪ちゃんがね。私、お中が大きかつたことなんかちつとも知らないわ。』

居間の方にかけて行つて、その話を鈴子は細君にした。初耳の細君も非常に驚いて、飛んで來て、小富からその話を聞いた。師匠も踊の手を留めてその話を驚いたやうな形をして聞いた。雪子！ あの若



美しい雪子、柳橋でも評判の雪子、矢張、二三年前は、此處によく踊を習ひに来て、その明るい愛嬌のある顔を、しとやかなそれでゐる快活な姿を其處に見せた。踊の質も好かつた。此頃でこそ滅多にやつて来ないけれど、それでも新曲ものなどが出来る時、それを習ひによくやつて来た。今年の春も、一度此處で落合つて、『雪ちゃん、まア、綺麗になつたのねえ。』と鈴子は言つて、その最良の話などをした。

『可哀相なことをしたね。あれまで仕込んでね。これからつて言ふ處だのに……。親はまア何んなだらう。』

かう師匠の細君も言つた。

『お上さん、本當に可哀相ね。』

鈴子の眼にも涙が浮んで来た。

つゞいてそのお中の子は？ その子はあの横町の旦那の兒だらうか、それとも又あの役者のSの子だらうかなど、いふ話が出た。小富は話した。『何でも、Sの子だらうつて言ふ話ですよ。それでもね、昨夜ね、もうこれはいけないといふので、一目でも逢はせてやりたいつて言つてね、電話をさちゃんのところにかけてさうですよ。Sちゃんは、丁度あそこでやつてゐますからね。すぐ飛んで来たさうですよ。そして死目に逢つたさうですよ。』

『さうかね、まア……。あの子も、随分ませてはゐたからねえ。』

かう師匠の細君は言つたが、そのまゝ用事が出来たので、居間の方へ行つた。師匠も踊を始めた。

鈴子は小富と立つて長い間話した。『姉さんはがっかりしたでせうね。』とか『あの若いのに……。』とか言ふ言葉が絶えず出た。鈴子にはそれが自分の今の戀と相連續してゐるやうにすら考へられた。『まア、さう？ Kちゃんにも關係してたの？ あの子？ あんな小さくつて？ それぢや随分浮氣はしたのね。』かう鈴子は驚いて言つた。

横町の旦那といふのは、大きな呉服屋の息子で、まだ二十五六の好い男である話などを小富はした。

『旦那も泣いてゐましたつて……。』こんなことをも言つた。

しかし、さうした話も今日は落附いて聞いて居られないやうな氣が段々鈴子の胸に起つて来た。清一があるれば——自分等の秘密をよく知つてゐる、寧ろ鈴子の今度の戀を取持つたと言つても好い清一があるれば、まだ話して行きたいこともあるにはあるが、ちよつと歸つて来さうにも思はれないやうな師匠の細君の口振なので、鈴子は急いでそこを出ることにした。

其處に、同じ土地の常香といふ妓が入つて来た。

運がわるいと鈴子は思つたが、それを面には表はさずに、

『今、来たの？ 遅いわねえ。』



かう聲をかけると、常香は、

『姐さん、もう歸るの？』

『ちよつと、寄るところがあるから。』

『何處？』

『公園に、ちよつと寄つて、買物をして行かうと思ふの。』

『さう。』

これでわかれて、鈴子はほつと溜息を吐いた。始めて自分の體になつたやうな氣がした。こゝからはもう眞直に、男の傍に行くことが出来ると思ふと鈴子は嬉しかつた。この前逢つた時、今日の十一時と約束をして置いた。もう來てるかも知れなかつた。かう思ふと、今までやつて來た媿曳の數々が頭に浮んで來た。そつと自分の宅に伴れて來たことや、婆やに口留のお小遣ひをやつて、ある夜こつそり自分の宅の奥の六疊の一間に泊めたことなども思ひ出された。自分のやつてゐることを誰も知らない、養母も旦那も世間の人達も誰も知らないと思ふと、戀の秘密の歡樂が一層色濃く鈴子の體に絡み着いた。

鈴子の姿はそこから電車の通ふ大通に出て、向う側の堀割の黒ずんだ水に舟が二三隻かゝつてゐる河岸を通つて、其側の煙突のある大きな會社の赤い煉瓦の塀と大きな門と其處に出入する職工の汚い姿とを眼にしなから、楊柳の青く靡いてゐる傍をずつと靜かに向うに歩いて行くのが見えた。

やがて細い通りがあつた。そこは、此處等にそんな家が、そんな媿曳の場所があらうとは思はれぬやうな混雑としたところで、古い庇の家があつたり、泣く子を汚い上さんが叱つてゐる家があつたり、指物師の小さな店があつたりした。午前の日影は明るくさした。

鈴子の姿はやがてそこのある巷路の中へと急に吸ひ込まれた。鈴子の前には、小さなしかし瀟洒な二階屋があつて、古い板塀の上に、庭の松や楓の埃を帯びてゐるのが見えた。古いしつかりした格子戸、それをあけて入ると、綺麗に掃除された上り端、質素ではあるが、何處となく艶かしい氣分が漂つて、成ほどさうした人達のために出來た秘密の家らしい感じが何處かでした。

これは昔からあつた家ださうだ。斯の道に深い、種々な秘密を知つたものでなければ、ちよつとわからない家で、さういふ人達の口から口へ、紹介から紹介へ、秘密から秘密へと永く藏されて續いて來たのであるといふ。『今の東京にもかういふところがあるんですよ。』始めてつれられて來た時、男はこんなことを鈴子に言つた。

この家には、種々の人達がやつて來た、名を聞くとびつくりするやうな人達が……。あの操行の正しいので聞えてゐる夫人が……。又はあの名高い役者が……。あの大官が……。あの娘が……。そしてさういふ人達は、決して派手々しく自動車などではやつて來ず、又車でも來ず、皆歩いてこつそり此處にやつて來た。其處まで來た車も、皆通りで乗捨て、來た。それに、堅い紹介者がなければ、決して此處



では客を上にあげなかつた。

鈴子は兼ねてさういふ家がこの近所にあるといふことは、お座敷で客の話に聞いて知つてゐたが、始めて男に伴れられて其處に來た時には、聞いたのと違つて、室も立派に、あたりも靜かに、道具なども昔のものが多く、寢道具なども立派であるのを見た。男の話によると、其處では絶対に客を泊めるといふことをしなかつた。又、騒がしい鳴り物を弾かせたり酒肴を多く取らせたりすることをしなかつた。『晝間が主だから、それで喧しくないんですよ。夜も貸すには貸すけれど、九時、十時すぎは、もういやがるんですから……』かう男は説明した。女中にも、老主婦のみよりのもの以外には、決して使はないといふことであつた。

鈴子が入ると、五十先の主婦——主婦と言つても、飽までも堅氣風に鬚を小さく結つた、しつかりした主婦がちよつと顔を出して、それでも莞爾と挨拶して、そして鈴子を二階の一間に案内した。二十二三の、さう綺麗でない、此前にも來て度々世話になつた女中は、やがて其處に茶を運んで來た。

『もう、少し前、お電話で御座いました。』

『さう。』

『あの、もう三十分ほど経つと、行くといふお電話でした。』

『さう、難有う。』

一人かうして此女中と對してゐると、この生眞面目な口の利き方をする女中に相對してゐると、さうした稼業の空氣に浸つてゐる鈴子も、何だかまきまりがわるく、顔がほてるやうな氣がせずには居られなかつた。かうして男を待つてゐる心が冷かに笑はれてゐるやうな氣もした。

女中が下りて行つて、鈴子は始めて落附いた自分を見出した。歡樂の記憶の多いその折々につけての楽しい跡の今だに其處此處に絡まり附いてゐる室の中に自分を發見した。其處に松があつた。欄干があつた。室の右の方に雅致に富んだ丸窓があつた。床には此間見た浮世繪の古い軸がかゝつてゐた。大きな煙突からは、矢張同じやうに煤煙が漲つてゐた。

靜かな初夏の明るい晝だ。

ふとある考へが鈴子の胸に往來し始めた。それは今始めて起つたものではなく、此前にも度々起つては消え、消えては起る考へであるが、又はその考へは、至極眞面目なもので、それに觸れ始めると、いやに陰氣になつて了ふので、成たけそれを思ひ出さない様にしてゐるのであるが、それが今、不思議にも力強く鈴子の胸に漲つて來た。それはこの戀は何うなつて行くであらうといふことであつた。又、これから先、飽までも自分達の戀を遂げずには置かないといふ心であつた。それに、一方この戀が此まゝ、知れずに長く續いて行くものとも思はれなかつた。かと思ふと、金のことや、質に入れた頭のものゝことやら、養母のことやら、旦那のことやらが、それからそれへと思ひ出された。旦那はまア何うでもな



るにしても、養母は——あのむづかしい利慾一方の養母は、一通りのことでは承知しさうにも思はれなかつた。しかし、鈴子ももう年若の娘ではなかつた。養母と自分の関係もかなり細かく飲み込めても居れば、養母が自分に對する権利の程度といふこともいくらかわかつてゐた。それに男の方でも、強く女の出て行くのを望んでゐた。『その時はしつかりしなければならぬ。』かう鈴子は繰返して考へた。

鈴子は既に餘りに多く養母の利益と犠牲とにその一身を供して來た。今までは全く操られた人形か何ぞのやうに、自分の死ぬほど厭なことに、自分の生命に關することにも、又は辛い辛い涙の出るやうなことにも、全く目を瞑つて通つて來た。唯、養母の言ふまゝになつて來た。しかし、一二年前子供の生れる頃から、又はその子供の父親である旦那に捨てられた頃から、かの女のまことの心は目覺めて來てゐた。自分の沈んでゐる境遇のいかに不自然で且つ慘めなものであるかも飲込めて來た。年取つた姐さんの末路、又は中姐さんの浮氣と不しだら、客といふものゝ薄情、さういふことがわかつて來ると、いつまでかうして浮々しては居られないやうな氣がして來てゐた。

ふと空想が自分の幼い頃に飛んで、不仕合の身の上であつたことやら、度々注いだ戀が皆な氷のやうに溶けて流れて行つたことやら、何やら彼やらを思ひ出して恍惚としてゐると、不意に、下に人の話す氣勢がして、やがて廊下を此方へ、一階へと上つて來る足音がした。

男はやつて來たのであつた。

空想から覺めて鈴子の立上つたのと、男がその意氣な姿を階段のところに見はしたのとは殆ど同時であつた。二つの眼は逸早く宙に逢つた。

鈴子は男が大島づくめの着物に、白っぽい夏外套をはおつて、髪を綺麗にわけて、色の白い顔に莞爾と笑ひを湛へて、なつかしく其處に上つて來るのを見た。

『待つたらう！』

外套をぬぎながら男は言つた。

『そんなことありませんでしたよ。』

『早く來やうと思つただけでも……。あとの様子もすこし見て置きたいと思つたもんだから……』

『私、もうすこし前來たばかしよ。』

『いつでも待たせるから、今日こそ、此方から早くと思つただけ……。莞爾と鈴子の方を見て、』

『今日はあそこへ寄つて來たのかえ？』

『え。』

鈴子は考へてゐたことも何も彼も搔消すやうになつて、唯、心が、體がすべて男に偏つて行く様なのを感じた。此處では、鈴子は稼業をしてゐる女でもなければ、客の一舉一動に冷やかな觀察を向け



る藝者でもなかつた。唯の娘、男と遊ぶことを喜ぶ唯の娘であつた。

『何う？ 今日は何？』

『まア、好きさうだ……。』

『それは好いわねえ。』かう言つたが、『一昨日は何して？ あれからすぐ歸つて？』

『歸るには歸つたけども、まだ早くつて渡しも、蒸気もないんだもの、困つちやつた……。爲方がないから歩いた。』

『さう……。車もなかつたの？』

『車なんかまだ出てやしなかつた……。』

『さう……。早かつたから。』

『それに……。向うに行つてから困つたよ。何處でもまだ爲事が始まらないんだもの。』やがて詰頭を變へて、『大丈夫だつたかえ？』

『え、大丈夫ですとも……。』

『知れやしないかえ。』

『知れたつて構やしないけど……。』

鈴子は莞爾笑うて見せた。

艶な舞臺はやがて始まつて行くのであつた。男と女の遊びの樂み、それに雜つて心と心との交錯、軽い嫉妬、美しい楽しい争ひの氣分、さういふものが靜かな初夏の晝の午後の空氣の中に漂ふやうに漲つて行つた。『でもね、心配になるもの。』こんなことを鈴子が言ふと、『だつて、何うも爲方がない。』かう言つて男は笑つた。女中は久しく二階に上つて行かなかつた。

## 七

ある晴れた日の午後、いつも乗る電車の停留場から、此方へ歩いて歸つて來る鈴子の姿が見えた。矢張いつもの扮装だが、手に扇と撥とを包んだ絹の風呂敷を持つて、いくらかぼんやりしたやうな風をして、車や荷車の陸續と通る路を橋の方へと靜かな歩調で歩いて來た。

何うしても、もう、男を自分の宅に入れるより他に爲方がないやうになつてゐるのを思ひながら鈴子は歩いた。眞劍に此方で思つてゐる心に向うに通じさせるには、さうする他に爲方がなかつた。旦那、その旦那がゐるといふことは、さうとははつきり言はないけれど、男には不満足であるらしいのは、種々の言葉でわかつた。『そんな旦那ぢやないんですよ。本當に世話になつてゐるばかりなんですよ。』かう言つて聞かせて見ても、それだけでは、男の心を十分に此方に引寄せることが出来なかつた。鈴子は自分の今まで通つて來た生活の話などもした。今日も子供の父親であつた旦那に捨てられた話をして泣



いた。

さういふ男の心持もよくわかるのであつた。それに、さうしないでは、自分達の遊ぶ金を何うにかしなればならないのだが、その方でも鈴子はもうかなり行詰つてゐた。けれど、今此處で、旦那と離れて了つては、生活のたつきの方がより以上に心配になつた。無論男は、さうなれば、自分で出来るだけのこととはすると言つてゐるけれど……。さうなつた曉に、この事がばつと世間に知れた時に、果して自分は今まで通りにお座敷に出て稼ぐことが出来るであらうか。

それに男の方の様子の知れないのも、いくらか鈴子の心を鈍らせた。惚れてはゐるが——是非一緒になりたいが、今度こそは眞剣に戀をしたいと思つてゐるけれど、男の心に就いて疑へば疑へないこともないやうなところがあつた。鈴子は今日もいろ／＼に考へながら歩いて來た。

橋を渡つて少し來たところに、長唄の師匠の二階屋があつた。それはさう大して上手な方ではなかつたけれど、杵屋の名取の一人で、名をEと言つて、よく鈴子の出てゐる土地にやつて來て、若い妓に稽古などをしてやつた。ある家の抱妓と出來て、一時評判に立てられたことなどもあつた。鈴子は其處を通る時に、いつも稽古をしてやつてゐる三味線の音を聞いた。

ふと通りか、らうとすると、格子戸が明いて、中からかねてよく知つてゐる松屋の抱妓のとん子が出て來た。

『あら、鈴子姐さん。』

かう言つて寄つて來て、

『お稽古の歸り？』

『え。』

並んで歩きながら、

『さう言へば、姐さん、今朝梅吉姐さんの處で大變よ。大喧嘩よ。』

『誰と……。』

『旦那とてせう？』すぐ言葉をついで、

『屹度、あれよ、あの事が知れたのよ。それで、旦那が怒つたか何うかしたのよ。ところがね、お金姐さんあゝだから負けてゐないでせう。それは騒ぎ。宅のすぐ前だから、よく聞えるのよ。お金姐さん啖阿をきつて、旦那がまけさうなんですもの。』

『さう……。』

と長く引張つて、『お金さん、もうあの旦那がいやなのね。切りたいばかりに、あの人を拵へたんでせう。それにしても旦那は氣の毒ね。好人ですからね。』

『姐さん、知つてゐて？ 旦那を。』



『よく、元は聘んで呉れたわ。あの家だつて、あの旦那が買つてやつたのよ。お金さんのためには随分いろんなことをしてやつたわ。』

『さうですつてね。』

『それにしても、あの人が泊つて行くの？ 今でも……。』

『さうでせう、屹度。何うかすると、あそこいら歩いてゐてよ。何でも、あの人も好いですつてね。鑛山の方が何うかしてゐるんですつてね。お金姐さん、今の旦那に切れたつて、ちつとも困りやしないんですつてね。』

『それはさうらしいわね。兩天秤をかけてゐるのよ。お金さんは怜悯な人だもの。』

話に移つて、今度は、土手際にあるSといふ元藝者であつた女になつて行つた。

『だつて、あの人は昔から評判だもの。』

『今でも三人や四人は来るんですつてね。——そして、それがよく鉢合せをするんで……。あそこは待合のやうだなんて言つてたわ。』

『それに、あそこの母さんが豪いなのよ。さういふ人達に、鉢合せをさせないやうにすることが、上手だつて評判だもの。』

『さう。』

こんなことを話しながら二人は並んでのろくさ歩いた。すれ違ふ人々は、一人は若い派手な著物を着ただらしのない風體をしたのと、一人はどつちかと言へば、じみな年増らしい風をしたのが纏れ合ふやうにして何か話して行くのを見送つた。路は混雜した町から折れ曲つて、椎の樹などのある淋しい屋敷町へと入つて行つた。ある二階屋の硝子窓には、夕日がピカ／＼と金屬か何かのやうに光つた。

突當りに、大きな社の石の華表が見えて、やがて汚い黒い溝に、新しい蘆荻の新芽がツンツン出てるのなどが見え出して來た。

路は二つに分れた。

『お前さん、其方？』

『え。』

『ぢや、私もおつき合をしやうかね。』

鈴子がかう言つて、華表を入つて、神社に通ずる敷石道を眞直に靜かに歩いて行つた。新緑で包まれた社の境内は靜かで、昔からある名高い三圍の社殿は、斜に靡いた庇と、丸い二本の柱と、大きな賽錢箱と、赤と白とを緋ひ交ぜただらりと下つた太い鈴の紐とを持つて、瀟洒に、且つ清楚に此方に向つて立つてゐた。

鈴子は立留つて、



『さう言へば、何年にも、近所にゐながらお詣りしたことがないから、お詣りして行きませう。』かう言つて、眞直に社殿の方へと向つて行つた。鈴子は帯の間から賽銭を出して、それをそこに投げたが、やがて白い手が太い紅白の紐に觸れると、鈴はガラ／＼としづかに鳴つた。鈴子は両手を額のところに合せて、さながら小唄にあるやうな形をして、一心に暫し祈念した。鈴子の胸には、今度の願事などが繰返されてゐた。

抱妓も鈴子と同じやうに、賽銭を投げ、鈴を鳴らして、そして手を合せた。

鈴子に取つては、この社はなつかしい追憶を誘ふに十分であつた。近くに居りながら、何年にも來たことがなかつたけれど、こゝに來た當座の幼い頃には、學校の女生徒の姿をして、又は可愛いお酌の姿をして、よく此處にやつて來たものであつた。其時分はまだ此處等は一面の田で、げんげが綺麗に咲き、菫の紫などもそれに雜つて、遊びに來るのに好い所であつた。姐さん達と根芹をつみにやつて來たことなどもあつた。鈴子はふと松屋の小富姐さんの言つた話を思ひ出した。それは小富姐さんのまだ一本になりたて位の時のことで、鈴子の知つてゐる時よりも、あたりはもつとぐつと淋しかつた。矢張願事があつて、深夜の祈願を七日かけて、毎夜十二時頃に、一人で其處にお詣りに行つた。丁度春の初めて、これから土手の櫻が咲き出さうとする頃であつた。小富姐さんは話した。『丁度、薄月のある夜で、何だか怖くつて怖くつて、土手から入つて行くのも思ひだつたが、それでも一夜二夜と願をすまして、何でも満

願の夜でしたがね、お詣をすまして、ほつと呼吸をついて、其處に置いた傘を取らうとすると、……矢張小雨が降つて居ながら、薄月がぼつと白くかすんで見えると言ふやうな夜でしたがね。しんとするんだよ。それは夜はさびしい處だからね。ふと、さつきひろげたまゝにして置いた傘を取らうとする、その少し向うに、白い、茫とした、何だかかう被衣か何かを着てゐるやうなものが立つてゐるぢやありませんかね。私はぎよつとしてね。さうでなくつてさへ怖い怖いと思つてゐたんだから、胸の動氣は高くなるし、何うしたら好いかと思つて、立竦んで了つてゐると、その白いものがすうと動いて行く……いえ、まぼろしぢやないんだよ。本當にはつきり見えたんだから……それから夢中で、そこに置いた傘を取つて驅け出して來たがね。本當にあの時位怖いと思つたことはない……。』その薄月夜のさまを鈴子は思ひ出したが、今は、そんなことがありさうにも思はれないほどあたりは開けて、明るい氣分が一面に境内に満ち渡つてゐた。

鈴子はその話を抱妓にしながら、裏門から土手の方へと出て來た。

『本當ですかね。本當なら、狐か何かね。』

かう簡単に抱妓は言つた。

土手はもうすつかり新緑で、人通りも稀に、蓋簾張の茶店になびく小旗もさびしさうに見えた。土手の下には、藝者屋や小待合などが並んで、下地妓の習ふ三味線の音などが賑やかにきこえた。



『其方へ行くの？ それぢや、さよなら。私、ちよつと花本屋に寄つて行くから。』  
『ぢや、さよなら。』

かう言つて二人は別れた。

土手について少し行くと、二階屋の瀟洒な家があつて、椎の樹が夕日近い日影を帯びてゐるのが見えた。門には、花本といふ名が丸い軒燈に書いてある。

鈴子は門を明けて入つて行つた。

## 八

そこには、鈴子など、同じお酌で鳴らしたことのある梅子といふ妓が、二月ほど前に、二年ほど行つてゐた福島から歸つて来て、再び此地で名弘をして、袂を取つてお座敷へと出てゐた。家の生計は、福島で出来た旦那がやつて呉れるらしく、かなり有福で、抱妓も來るとすぐ二人置いて貰つて、『矢張梅ちゃんはいわね。昔から違つてゐたからね。』など、土地の人々から言はれた。鈴子と一つ違ひで、昔から仲がよく、踊りも旨く、容色もすぐれてゐて、何處に出しても立派な姐さんで通る妓であつた。旦那は月に一度位しかやつて來ないので、昔の友達は皆よく其處に遊びに行つた。

梅子の福島に行くやうになつたのには、事情があつた。それは丁度十九の時で、一本になつて一二年

経つた時分のことであつたが、利根川べりのある豪家の息子に思はれて、散々金を絞つて、殆んどその息子が勘當される位にまで引寄せて、もういよいよ脈が上つたといふ時に、それを突離すために、一時地方へ行かねばならなくなつたのであつた。梅子が姿を隠した時、紙衣になつた息子は、梅子の蒲團に顔を當ててオイ／＼泣いたといふことであつた。土地でも梅子の評判はわるかつた。

『あの妓は本當に腕がすすぎる。あんまりひどい。』かう二人の最初の仲を取持つた家の女將は言つた。

しかし其息子が勘當が許りたので、今では、梅子は矢張そのよりを戻してゐるらしく、其方の方からも、多くの金を取つて、時には家に泊らせることもあるらしかつた。梅子は土地の妓達に憎まれるほど着物や身についたもの、綺羅を飾つて、五六百圓もするダイヤを二つまで指にはめてゐた。

従つて鈴子の養母などは、それを話の種にして、『何うして、宅の鈴子はあゝ呑氣だらう。あゝ腕がないのだらう。梅ちゃんなど、比べては、丸でお話にも何にもならないんだからね。』など、當てつけて言つた。

『誰かと思つたら、鈴ちゃん。』

かう言つて梅子は出て來た。

綺麗にみがいた長火鉢の傍、そこには友禪モスリンの派手な座蒲團が敷いてあつて、抱妓の一人の色



彩に富んだ着物や言葉や、壁につらねてある三四挺の三味線や、大入のピラヤ、神棚や、さういふものが六疊の一間を艶に且つ贅澤に見せた。

芝居の話や、昨日松阪屋にセルを買ひに行つた話や、見番の政どんが不深切で貰ひをかけても電話を通して呉れなかつた話や、そんな話を少ししていると、其處に格子が明いて『梅子姐さん、ゐて?』かう言つて鈴屋の照葉といふ妓が入つて來た。

照葉は鈴子や梅子とは一時代後だが、矢張お酌から本式に一本になつた妓で、鈴子の行く踊りの師匠の許にも通ひ、三味線も上手で、土地の若い綺麗な方で評判な一人であつた。

『おや、鈴子姐さんもゐるのね。』

かう言つて莞爾して、其處に來て坐つた。

『今度の音羽屋は好いわ。』

『いつ行つて?』

かう梅子がきくと、照葉は、

『昨日見たい連で行つたわ。五右衛門が好いのよ。』

『私も行かうと思つてゐただけど……。梅子がかう言つたが、すぐ、『照葉ちゃん、何うして此間の……。』』

『知らない……。』

梅子は笑つて、『知らをきつたつて駄目よ。すつかり村さんから訊いちやつた。だから、お前さん、油斷しちや駄目よ。鶴ちゃんが腕によりをかけてるツて言ふから。』

『どうせ、駄目よ、私なんか……。』

『意氣地がないわね、あんな奴に、ほれた男を取られて、お前さん、それで好いのかえ?』

『だつて、爲方がないぢやないの?』

『そんなことを言はずに、もう少し真劍におなりよ。』

『照ちゃん、一體呑氣な方だから。』

鈴子が傍から言ふと、

『あら、さうぢやないわ、鈴子姐さん……。随分私だつて苦勞してゐるんだけど……。』

『引込思案は駄目よ。しツかりしなけりや!』梅子が眞面目で言ふと、照葉は、

『だつて、私なんか、餘り辛くなると、何うでも好いと思つちやうわ。……詰らないんですもの、苦勞ばかりして?』

『その苦勞が面白いのよ。』

かう鈴子は押しつけるやうに言つた。



『本當だともね。』

梅子はそれに相槌を打つたが、『でも、鈴ちゃんも、何方かと言へば、呑氣な方ね。ぢやなかつた、堅い方ね。』

『さうかしら。』

『だつて、さうぢやない……。』

鈴子は梅子と眼を合せたが、『でも、詰らないと思ふわ、藝者なんか。本當のことなんか一つもないんたもの。苦勞したつて、苦勞の仕ばえがないやうなもんだもの。』

『いやに後生を出してね。』

『だつて、さうぢやない。浮氣で、フワ／＼してゐる中は好いけども、浮氣なんか詰らなくなるこゝとがあるわ。お客なんか、本當に相手になりやしないもの。真劍でなくつちや苦勞したつて詰らない。』

『本當ねえ。』

照葉は傍から言つた。

『私なんか違ふよ。私なんか、男が意氣地がないのが面白いよ。真劍ツて言ふけども、夫婦になつたつて、真劍なんてなれやしないやうなもんぢやないかしら？ それよか、男と面白く遊ぶ方が好いと思ふわ。だましたり、だまされたり、此方で引張つたり、引張られたりして……。一體、男なんて、遊べ

ばこそ面白いのよ。真劍になんか考へちや、一日だつてかういふ稼業はしてゐられないわ。』

『それはさうね……。』鈴子は猶言はうとしたが、言つても無駄だといふやうな氣がして口を噤んだ。暫し一座は黙つた。鈴子の頭には、梅子のやつて來たことなどが一つ一つ浮んで通つて行つた。あれほど薄情にして振捨てた息子と今になつてよりを戻してゐることなども考へられた。梅子はその他にも奥の待合などでお客を一人や二人は持つてゐるらしかつた。それにも拘らず、田舎の旦那が來た時には、神妙に、猫をも傍へは寄せないやうな顔をして、『貴方、何うして？』など、言つて、旦那に甘えるやうな態度を梅子はして見せた。『私なんかには、とてもあの真似は出來ない。』かう鈴子は思つた。

『でも、旦那だつて、長く一緒にゐれば情愛は出て來るわねえ。』

『鈴ちゃんは何方かつて言ふと、惚れつぽい方だもの……。何うも、堅い人は惚れつぽくつて、そしてぢき真劍になるよ。』

『それはさうかも知れない。』

鈴子の頭には、人知れずこつそりやつてゐる自分の男のことなど思ひ出された。

『もう少し浮氣をおしよ。』

梅子はかう言つて笑つた。



男を自分の宅に引入れると言ふことは氣が咎めて爲方がなかつたけれど、しかも一方では首尾よく誰にもわからずに泊めて歸すといふことが楽しみであつた。監督のためにつけた養母の婆やは、養母の眼鏡とは違つて、存外譯知りで、でなければつかませられるお小遣の多くなるのを楽しみにして、知つて知らぬ顔、見て見ぬ顔をした。『もう、寝て好いよ。』かう言はれると、婆やはいつも自分の三疊に行つてこそく寝た。

晝の中は、養母の來る虞があるので、男は十時すぎ、乃至十一時すぎにならなければやつて來なかつた。時には——男の財布に金のある時には、近い所にある待合などに行つて、わざと知らぬ顔をして、鈴子をかけて、女中や女將の目を盗んで、手を握つたり膝を寄せたりして、秘密の快樂を楽しむこともなどもあつた。さういふ時には、歸りには、男は女よりも一足先に歸つて、いつも明けて置く裏口からそつと入つて、鈴子の歸つて來るのを待つた。やがて鈴子は歸つて來た。そして婆やにあとをまかせて、二人は奥の六疊に入つた。低い聲が遅くまで婆やの室に聞えて來た。

しかし、さうした夜更で、誰も來るものがないときまつてゐても、それでも鈴子は床の中で絶えず耳を聴くして、些少な音にもはつとして胸を躍らした。細い巷路を隔てた藝者屋に遅く歸つて來る不見轉

の語聲にも、何處かできこえる戸を明ける音にも、靜かに家の前を通つて行く氣勢にも枕を擡げた。

『何うしたの?』

『でも、誰か來たんぢやない?』

かう言ふと、男も耳を聳て、

『向うの家だよ。』

『さうかしら?』

まだ安心が出來ぬといふやうにして、鈴子は眼を大きくして、

『でも、家の周圍を誰か歩いてやしなくつて?』

男も半ば身を起して聞いた。

『そら、聞えるでせう?』

ハタ、ハタと物の動く音が靜かに庭の垣の向うのところでした。

『さうだね。』

その音を見送るやうにして男は見たが、

『何だ……犬だよ。』

『やい……』



かう言つて女は始めて心を安んじたやうにして莞爾と笑つた。

こればかりではなかつた。餘りさうしたことを氣にするので、ある夜は、男は、

『そんなに、わるいことをしてゐるやうに思ふのかえ？』

かう言ふと、

『さうぢやないけども……だつて、知れると困るもの。』

『矢張、水臭いねえ。』

『さうぢやないよ、すぐさう取るから困るのよ。第一、母さんに知れたり何かすると困るぢやないの？』

『そんなに母さんが怖いの。男は笑つて、

『それより旦那が怖いだらう。』

『旦那なんか構はないけれども、本當に、知れると、困るわ。すぐ、土地で評判になつて了ふんだもの。此間、花月に行つた時なんか變だつたわ。お上さん、勘付きやしないかと思つて、ヒヤ／＼してたわ。貴方つたら、餘りズバズバ何でも言つて了ふんですもの。』

そつと裏口から男の出て行く時は、夜は明けたばかりで、時には朝霧が白くぼつとあたりをこめてゐることも度々であつた。朝の空氣はしつとりとしめつて、空地に生えた草も青々と露に濕つてゐた。そ

の時分は婆やは大抵ぐつすり寢込んで了つてゐるので、鈴子は長襦袢のまゝの派手な艶な姿をして、自分で裏口の鍵を外して、『今度は明後日、明々後日、早く来て頂戴よ。』とか、又は『ぢや、あそこでね、十一時にね。屹度ね。待たせてはイヤですよ。』とか言つて情しさうにして男を戸外に出してやつた。そして自分は再び男のぬくもりのまだ残つてゐる床の中に入つて、疲れた體を十時近くまでぐつすりと寢込んだ。

ある時には、男の來るといふ晩に、運わるく旦那が花屋にやつて來て、何うしても泊つて行かなければならないやうなこともあつた。その時には、鈴子は殊に染々とかうした稼業を情なく思つた。今夜は歸れないと言ふことを言つてやることも出來ず、またさういふことを平氣で男に言つてやるのも濟まないうやうな氣がして、花屋の廊下を行つたり來たりした。とは言へ、旦那の方もさう菅なく振切つて行く譯にも行かなかつた。其夜は爲方がなしに泊つたが、寢てゐても、男がほつねんと獨りで待つてゐるさまが眼に見えて、いつものやうに旦那を喜ばせることが出來なかつた。漸く朝が來て、忽々に歸つて來たが、男はさびしく一人奥の六疊に寢て、朝早く歸つて行つたといふ婆やの語であつた。本當に濟まなかつたと鈴子は思つた。否、それからすぐ電話をかけて男の聲を聞かない中は、心配で不安で爲方がなかつた。次に逢つた時には、鈴子は其夜の懊惱を男に話し、又男からは待つて待ち明かした話を聞いた。鈴子は涙を流した。



であるから、其次ぎに、旦那と男と打突つた時には、鈴子は、『今夜は神田の伯父の家に不幸があつて、是非お通夜に行かなければならないから。』と言つて、自分の言つたことがすつかり旦那に見すかされてゐるといふやうな氣がするにも拘らず、無理に遅くなつてから歸つて來た。

しかし、鈴子は男には旦那の來てゐたことは、少しも打明けて話さなかつた。却つてありもしない長尻のお客の話をして、『六時から行つて今時分までですからね。ほんたうに長尻のお客は懲々ですよ。それ、あそこは貰ひがきかないんですからね。』など、言つた。鈴子は兩方に虚言をつかなければならぬい身の上を悲しまずにはゐられなかつた。それも、今までは——無邪氣に稼業をしてゐた時分には、そんなことは何でもなかつたけれど、寧ろ藝者には當り前のことだ位にあつさりと考へてゐたけれども、今は單にさうして片附けて了ふことが出來なかつた。心は無論男のものではあるけれども、體は、汚れた體は……。又、汚れた體を知らん顔をして戀した男に寄せて行く身は……。

十

『おい、おい。』

と言ふ聲が戸外でした。

鈴子はギョツとした。男はさつきそつと裏の戸を明けて來てゐた。長火鉢の前に坐つてゐた。婆やは

ちよつと使ひにと通りまで出て行つて留守であつた。

鈴子と男とは耳を欬てながら互に顔を見合せた。

夜はもう九時すぎであつた。

鍵のかゝつた格子戸の頼りにガタガタと動く氣勢がした。

『おい、おい……。』

又その聲がした。

たしかに旦那である。旦那の太い聲である。

男は急に長火鉢の前から立つて裏口の方へ行かうとした。『い、わよ、ゐても好いわよ。』といふ表情を鈴子は男にして見せたが、男はそれにも拘らず、こそこそと其方の方へ行つた。

『おい、おい、ゐないのか。』

外では聲が段々高くなつた。

『誰方？』

わざとかう言つて、今始めてその聲を聞き附けたといふやうにして、鈴子は上り端の方へと立つて行つた。で、上り端の障子を明けると、バナマ帽をかぶつた背の高い旦那の姿が、軒燈の明るい光を全身に受けて、黒い影を地上に落して、格子に手をかけてゐるのを鈴子は見た。



『あゝ、貴方！』

かう言つたが『待つてゐらつしやい。今、明けますから……。』

男のことも氣にかゝるが、しかし旦那を家に上げない譯にも行かないので、胸はドキ／＼しながら、下駄箱の蓋を明けて、下駄を出して、そして下に降りて、格子にかけた鍵を外して、更に用心深くさして置いた釘を抜いた。

格子戸はがら／＼と明いた。

『ゐたのかえ？ さつきから呼んでゐたんだがな。聞えなかつたのかえ？』

『はばかりに入つてゐたもんだから。』

『婆やは？』

『ゐないの。ちよつと使ひに行つたもんだから。』

旦那はそのまま、入つて來た。鈴子は何うすることも出来なかつた。

此方へ入つて來た時、鈴子は男の裏口からソツと出て行く氣勢を耳にした。鈴子は濟まないやうな、男が可愛相のやうな、又はこれから樂しまうとした自分等の歡樂がこの不意の闖入者によつてすつかり壊されて了つたのを腹立たしく思ふやうな氣がした。しかし旦那の入つて來るのを拒絶する譯には行かなかつた。

長火鉢のあたりには男の慌て、置いて行つた煙草入が、飲みさした茶の半分の入つてゐる茶碗が、懷から出して半分讀みかけた夕刊が、又は今まで坐つてゐた男の跡が、一目見れば、すぐわかるといふやうに、あたりに残つてゐるのを鈴子は見た。鈴子は慌て、男の煙草入と煙管とを取つて懷に入れた。てつきり旦那に感附かれた……、と思ひながらも、そんな風は少しも顔へ現はさずに、今まで男の坐つてゐたところに旦那を坐らせて、鐵瓶から湯を急須にさして、茶箆筒の棚から茶碗を一つ取つてそれに茶をついで旦那にすゝめた。

鈴子の眼は鋭敏に旦那の顔やら態度やらに注がれた。

旦那はたしかに機嫌がわるかつた。

『大層、遅いのね、今日は？』

『うん……。』

など、言つて、旦那は膝を固く坐つて、四邊を見廻して、夕刊やら茶器やらに眼をつけて、更に深い秘密を嗅ぎ出さうとするもの、やうに、眼と、耳と、心と、體とを、一方面に集中するやうにした。それを、その狐疑を、その疑惑を、鈴子は先づまぎらかさなければならなかつた。

『今、お座敷から歸つて來たばかり、その着物を藏つて、此處に坐つて、お茶を飲んで、それからばかりに入つてゐたのよ。』



『さうかえ……。』  
『でも、暫らくいらつしやいませんでしたのね。何うしたの、一體。今日も餘程電話をかけやうかしらと思つたのよ。』

『忙しいものだからね。』

『忙しいものだからね。』  
『忙しかったって、随分になりますよ。一週間以上になるわ。花屋のお上さんも、何うかしたの？ なんて言つてたわ。』

『少しそれに風邪を引いたものだから……。』

『さう、それはいけないわね。何んな風でしたの。寝たの？』

『寝もしないがね。』

『大事にしなげれやいけませんよ。風邪がもともなるんだから。』

其處に、裏口が明いて、酒を取りに行つた婆やが歸つて來た。婆やは男がゐるものとのみ思つて入つて來たが、そこに、思ひがけず旦那が坐つてゐるので、はつとしたといふ風で、また可笑しいといふやうな顔の表情で、『入らつしやいまし。』と言つて丁寧に挨拶した。

鈴子にしては、此際、何うかしなければならなかつた。男は闇に立つてゐるか、それとも近所の球突へでも行つてゐるのである。まさかあのまゝ歸りはしまいと思ふけれど、ことに由ると、旦那を家に上

げたのに腹を立て、歸つて行つて了つたかも知れないなど、心配になつた。

鈴子は言つた。

『今日は家に泊つて行つても好いでせう。もう遅いから……。』

『いや——』

『ぢや、花屋に行くの？』

『何うでも好い……。』

探りを入れたところでは、旦那は確かに疑つてゐるに相違なかつた。鈴子は辛い氣がした。

『何うでも好いつて、泊つて行つても好いでせう。』泊つて行かれては困ると思ひながら、かう鈴子は言つた。

旦那は黙つてゐた。泊るとも言はなければ、花屋に行くとも言はなかつた。しかし泊るにしても、花屋に行くにしても、兎に角、今夜は一度旦那に待さなければならなかつた。

『花屋にいらつしやいな？』

『それでも好い……。』

『それでも好いぢや困るわ。家に泊るなら泊るで、さうなさいよ。もう遅いですからね。……ぢや、さうなさい。』いくらか焦々した調子で言つた鈴子は、なアに泊るなら泊つても好い……と思つた。鈴子



はこの奥の方に、違ふ見番の支配の許にある知らない小待合の澤山あることを思つた。

で、さういふことに決めて、旦那が養え切らない調子であるのなどには、もう取合つてゐられないといふ風な氣分で、婆やに酒の支度——男と一緒に飲まうとした酒と肴とを旦那に出すやうに吩咐けて、そしてその間に、小聲で、何處からか電話がかゝつて來たやうに言はせるやうに婆やに頼んで、そして此方に来て、落附いて坐つてゐた。

酒の支度はやがて出來て、旦那は、餉臺に並べられた盃を手にして、いくらか機嫌が直つたといふやうな顔をしてゐるのを鈴子は見た。

『姐さん、電話……。』

かう婆やは言つた。

『何處から？』

『花月さんから。』

『さう。』

かう言つて、わざと考へて、『誰かしら？……』旦那の顔を見て、『ちよつと行つて來るわね。』

で裏口から下駄をはいて、そゝくさと鈴子は出かけた。鈴子は一番先に奥の方へ行つて見た。男はまだ其處等に立つてゐるやしないかと思つたからであつた。しかし闇の夜は暗く、樹の影が深く蔽ひかぶさ

つてゐるばかりで、そこらに人の影も見えなかつた。奥の藝妓屋の二階からは、灯が明るく光線を樹蔭の中に落して、抱妓達の何か笑つたり話したりしてゐる氣勢がした。

鈴子は引返して、今度は球突の方へ行つた。途中で松屋の抱妓のお座敷から歸つて來るのに逢つた。それからお房姐さんにも逢つた。運がわるいと思つた。

球突はずつと行つた角のやうなところにあつた。隣りには西洋料理と書いた小さな家がある。そこには五六人人があるらしい氣勢がしてゐる。で、目かくしの間から覗いて見ると、果して男が其處に球を突くの立つて見てゐる姿が眼に入つた。しかしそれを知らせるのに鈴子は困つた。それに、定連のお金姐さんがお客と來てゐるらしく、その姿は見えないが、その高い笑ひ聲がをりをりきこえた。

二人の仲をけどられては大變である。けどられ、ばすぐ養母に知れる。大騒ぎになる……。かう思ふと、減多なことは出來ない。しかし自分が入つて行つても、男はそれを知つてゐるから、そんなぶまな眞似はすまい。それに、自分の姿を見さへすれば、男は出て來るに相違ない。で、鈴子はいきなり球突屋の入口の處に姿を顯して、『お金姐さん、其處にゐるの？』と聲をかけた。

『鈴ちゃん、お入りな。』

『え、また……それより明日の籠割、何うするの？』

『私、行けない……。』



『ぢや、母さんでも行くの?』

『何うするかしら?』

『私も、何うしやうかと思つてゐるのよ。』

『今度の狂言は面白くないツて言ふぢやないか。』

『さうですツてね……。』

『まアお入りな、鈴ちゃん。』

『また来るわ。』

かう言つて鈴子は此方に來た。これで男はすぐわかつたらしく、五六間行つたと思ふと、あとから男が近寄つて來た。

『困つちやつた、私……。』

『……………。』

鈴子は男の手を闇に握つて、『後生だから、この奥にね、小待合が澤山あるからそこに行つてゐて頂戴な。此方ぢや知れると、あとで困るから……。向うなら、大丈夫だから、私を知つてゐるものはゐないんだから、見番が違ふんですからね……。』かう言つて、又堅く握つて、身をすり附けるやうにして、『一時間位すると、私行くから……。屹度行くから。』

男は黙つて歩いた。

『だツて、それは無理だわ。世話になつてゐるんだもの。……さうぢやないのよ。さういふ風にとるから厭だツて言ふのよ。ね、さうして下さいね。たしか、彌生ツて言つた家があつたと思ふわ。』

二人の黒い影は纏るやうに纏れるやうにして動いた。鈴子は自由にならない稼業のことを染々と悲しく辛く思つた。二人は向うから來る足音に氣がねして、細い暗い路地の中に入つて行つた。ある家の軒燈は遠く二人の影の重なり合ふのを黒く地上に映した。

暫くしてから、

『そら、彌生よ……。間違つちや、駄目よ。え、一時間、遅くも一時間半すれや行くわ。』

二人はもう一度抱合ふやうにして、そして別れた。

鈴子は裏口から入つて行つた。

『お座敷がか、つて來たのよ。』

かう言つて、旦那のつまらなさうにして盃を口に當て、ゐる方へ行きながら、『ちよつとも好いからツて言ふのよ。斷つたんですけれどもね。いつでもよく聘んで下さるお客さまなんですから。何でもよし町あたりの藝者とよく來る人よ。今、すぐでなくつても好いのよ。時間間際になつてからでも好いのよ。かの子姐さんが行つてゐるらしいから……。』



かう言つて、それから鈴子は精々旦那の機嫌を取つた。旦那も、さう言はれて見れば、まさか行くなとも言へなかつた。さうした野暮も、かういふ社會では通用が出来なかつた。それも、旦那が大通て、男と女の心理に精通してゐて、びしびしポイントをつかむことの出来るやうな人であつたなら、野暮でなしに、又は無理でなしに、女を引留ることが出来たであらうが、餘り深くかうした社會の空氣に浸み込んでゐない旦那には、それ以上に深く入つて行くことが出来なかつた。旦那は鈴子の言ふまゝになつてゐるより他仕方がなかつた。

旦那はいつも餘り深酒はしなかつた。一本飲めば、顔は赤くなり、機嫌がよくなり、兎に角女がそこに美しい顔と白い肌と滴るやうな髪とを見せてゐるさへすれば、それで爲方がないから満足してゐるといふ風であつた。鈴子はつとめて明るい顔をして、三味線を下して来て、旦那の好きな春雨などを弾いて見せた。

その間に婆やの支度した奥の六疊には、五燭の電氣が薄くついてゐて、枕元には藥罐にコップが赤い盆に載せられてあつたりした。婆やは支度をしてから、可笑しいやうな、淺猿しいやうな氣がちよつとしたが、いろ／＼さういふ所をこれまでに澤山通つて来た身には、別にめづらしくも不思議にも思へなかつた。婆やはそれよりも、貯金の殖えて行くことなどを考へた。

その奥の六疊に一度入つて、そしてそこから出て来た鈴子は、すぐ出かける支度をした。しかし別に

大して改まつた晴衣を出せとも言はず、いくらか亂れた艶な仇つほい髪と顔とを鏡臺を持ち出して映して見て、それを綺麗に梳き直して、そしてちよいちよい着の大島を出して貰つて、帯は黒縹子と羽二重との腹合せをしめた。ダイヤの指環だけはそれでもはめた。

で、晝間、養母のところから、融通して貰つて来た金の十圓ばかり鏡臺の抽斗に入つてゐるのを出して、財布に入れて、それを帯の間に挟んだが、もう一度出して、そこから一圓札を一枚さがして、『これ、お小遣におしよ。』と言つて婆やにやつた。婆やは、『澤山ですよ。さう、いつでも戴かなくつても……』と言つて、一度は辭退したが、後にはお禮を言つてそれを自分のくしゃくしゃになつた帯の間に挟んだ。

『ちや、ね、朝になるかも知れないからね。』

『えゝえゝ……。』

鈴子はお出かけやうとしたが、ふと柱にかゝつた時計を見て、

『十一時半ね、もう。』

存外時間の経つたのを驚くといふやうにした鈴子の胸には、小さな待合の一間で、佗しく酒を飲んで自分を待つてゐる男のさまがまざ／＼と映つて見えた。しかしそれもこれから、逢はれる喜悅と歡樂との想像に由つてすぐ打消された。鈴子はいそ／＼として出かけた。



それから一日二日経つた或日の午後、養母の許から竹どんといふ箱屋が、『姐さん、ちよつと用があるさうです。』と言つて來た。鈴子は別に何とも思はなかつた。呉服屋でも來てるのかしらと思つてすぐ氣輕に出かけた。

いつものやうに、見番の箱屋の大勢あるところに行つて、そこで一言二言世間話をして、何氣なしに其の長火鉢のある處に行くと、養母はいつもと違つて、疝の立つた蒼白い顔を此方に向けて、挨拶も碌にはせず、じろくくと鈴子の體をさがすやうにして見た。鈴子の胸は俄かに騒ぎ始めた。

『お前かういふ噂があるがね。本當だらうね。』  
かう養母は興奮して言つた。

鈴子の顔は見る見る赤くなつた。『何うしてそんなこと？』

『何うしても彼うしてもないよ。本當かえ？ ツて言ふんだよ。』

『旦那が言つたの？』

『誰れが言つたもないよ。人が知らないと思つて、よくお前さんは、そんなことをおしだねえ。……それぢや、本當なんだねえ？』

鈴子は暫し首を低れて、長火鉢に凭りかゝつて、火箸で灰などをならしてゐるたが、『旦那が誤解してゐるんでせう、屹度……。』

『しらじらしいことをお言ひでないよ。お前さんは、私はまだ知らないと思つて馬鹿にしてゐるけれど、ちやんと知つてゐるんだよ。お前さんは、あの男は、一體、何ういふ身上だか知つてゐるのかえ？ お前、騒がれてゐるのを知つてゐるのかえ？』

『……………』

鈴子は思ひもかけず深く自分達のことを知つてゐるらしい養母の言葉に驚かされて黙つて了つた。

『名代の女たらしだつて言ふぢやないか。よし町でも、柳橋でも、もう散々女を泣かせた男だつて言ふぢやないか。さつきもお政さんがさう言つてゐたよ。まア、ね、鈴ちゃん、あんな男の口に乘せられたんですか、それは心配ですなつて言つてゐたよ。藝者稼業をしてゐて、二十五にもなつて、その位のこととはわかりさうなもんだ。』獨語のやうに言つて、『本當に人に心配ばかりかけて、此前の旦那の時だつて、泣いたり吼えたりして……。つくづくお前さんには呆れたよ。』

養母の話の様子では、もう何も彼もすつかり材料が上つてゐるらしかつた。婆やが昨日長い間此方に呼ばれて來てゐるたが……。婆やは歸つてから別にその話をしなかつたけれど、その時婆やは養母に詰問されて、すつかり何も彼も饒舌つて了つたらしかつた。『あの婆やも本當に、人がつけてやつた甲斐もな



い。口留めの鼻薬を貰つて、さういふ眞似をさせやがつて……。もう今から暇をおやり……。『こんなことをも養母は言つた。』

いろいろに口汚く言ひ罵る養母の言葉を、鈴子は長火鉢の前に俯向加減に坐りながら黙つて聞いている。一體、鈴子はお座敷などでも口敷を利かない方だが、かうなると、一層黙つて唯々下唇を咬んだ。烈しい言葉を浴せられる時には、手にした火箸で、頻りに灰を縦横にならした。

鈴子の心は養母の言葉につれて深く細かく種々なものに反響してゐた。『評判の女たらし』といふ言葉、『あんなものに騙されて、今に裸にされるのも知らないで』といふ言葉、中でもさういふ言葉が鈴子に愈々強く下唇を咬ませた。養母がそれと気がつき出したのは、此間、彌生といふ待合に男と二人泊つて、そして朝早くまだ夜が明けないうちに歸つて来た。その歸りかけを牛乳屋の男に見られた。そしてその牛乳屋の男は、『あゝいふ自前の姐さんでも不見轉をするのかねえ。』と言つた。その話が何處からともなく養母の耳に入つた。と、今度は今までのあらゆる不思議に思はれたこと、朝早くお稽古に行くことや、いつも格子戸に鍵がかゝつてゐることや、球突に出かけて行つたことや、旦那をほつたらかして電話に出で行つたことや、何や彼やがあつちこつちから一つになつて来たのであつた。

養母はこれまでにするについての一方ならぬ丹誠をも一々並べた。『お前さんは、一人で大きくなつて、人に押しも押されもしないやうになつたと思ひだらうけれど、お錢がかゝつてゐるんだよ。並大抵ぢ

やなかつたんだよ。来た時は、寢小便をして爲方がなかつた子なんだよ。』毒々しい言葉で噛みつくやうに言つた。

『梅ちゃんなんか御覽な。人に世話なんか少しも焼かせないで、……。あんな幼さな時分から、お客をあやなすことをちやんと知つてゐて……。今度だつて、あゝして立派に、一人立になつて、立派な旦那の他に、またあゝして稼いでゐるぢやないか。』かう言はれた時には、鈴子は餘り口惜しいので、

『だつて、梅ちゃんと私は違ひますもの。』

『だから、お前は馬鹿だつて言ふんだよ。』

『馬鹿でも好う御座んすよ。』

終には養母も怒つて、『本當に、ぶうくしいたらありやしない。恩も義理も忘れて、自分の思つたまを通さうとするんだから。……。通すなら、ちやんと通るやうにしてから、お通し……。兎に角、お前さんは、養女なんだから、今ぢやまだ私の言ふことを聞かない譯には行かないんだからね。さうお思ひ……。そして、今日にも、明日にも、あの家を疊んで此方と一緒におなり……。好いかえ、わかつたかえ?』

餘り養母の指立つた聲が高かつたので、後には、年を取つた政どんといふ長年ゐる箱屋が仲裁に入つて、二人の間をなだめたりなどした。鈴子の眼は赤く涙に腫れ上つて見られた。



一度は好加減にして歸つて來た。しかし鈴子には泣いても泣いても盡きないやうな悲哀がその軀に纏り附いてゐた。鈴子は愈々行くべきところへ自分達の戀が到達して來たのを思った。しかし、鈴子は割合に自分の心の動搖してゐないのを自分自身で見た。歸つて來ると、婆やはそれと知つて、逸早く傍に寄つて來て、いろいろ話しかけたけれど、鈴子はそれを好加減に聞流して、そのまゝ、長火鉢のところになつて、長い間じつとしてゐた。昨日結つた銀杏返は、今朝梳かれたまゝ、にまだ綺麗になつてゐて、長く出た髪は、俯向加減になつてゐるので、白い襟足を一際美しく艶に見せた。

不仕合で、親身になつて心配して呉れる父母もない、又あつても無いと同じである身の上を考へると、鈴子は急に悲しくなつて來た。今までは、自分の置かれた境遇に唯盲目的に適從して、別に何とも思はなかつたけれど、養母の冷やかな打算的な心がわかつたり、世間の通り一遍な好加減な心持がわかつたりした今、又男の心より他に縋るにも縋るものがないといふことがわかつて來た今、又その縋るべき男の心が果して縋るに足るものであるかないかといふ疑念もいくらか萌して來てゐる今になつては、染々と深く自分の境遇を考へて見なければならなかつた。涙は拭つても拭つても出て來た。(女たらしだか何だか、見るが好い。)

男をかばふ心と、世間の批評に對する反感と、自分の戀を何うしても眞剣な眞面目なものにしなければ……少くとも世間や養母にさうして見せなければ氣がすまないといふやうな心が奥の奥から流れて來るのを鈴子は感じた。鈴子は猶々長い間じつとして、身動きもせず、其處に坐つてゐたが、一時間ほどしてから、靜かに格子戸を明けて通りの方へ出て行つた。

その姿はやがて明るい日の光線の中を土手の方へと行つた。昨日までは、……今朝までは、男と逢ふにも、人に知れないやうに、誰にも見られないやうに、秘密の上にも秘密にして、家に呼び寄せるのならば、人目のない夜、でなければ、金を使つて此方からわざわざ藏前まで出かけて行つてそこでこつそり逢ふやうにしてゐたが、今はその心はがらりと變つて、自分でも不思議に思はれるほど著しく變つて、知れた上は、もう仕方がない……といふ度胸が強い力で塞いだ鈴子の胸を開いて來るのを見た。鈴子はいつも行く土手の上の自働電話に出て來た男に、『ぢや、すぐ來て下さいね、相談があるんですから……夜でなくつて、今、すぐでも好いの。』といふ電話をかけた。

## 十二

顔にはそれと表はさなかつたけれども、鈴子は今日こそ旦那にその話をしやうと決心した。

それより他に、自分等のまことの戀に行く道はなかつた。養母には知れたし、土地では稼業もしてゐられなくなるのはわかつてゐる。しかしさうかと言つて、旦那を一方に釣つて置いて、此まゝ、際限なく男との仲をつゞけて行くわけにも行かなかつた。それに二人の戀はもうかなり突詰めてゐた。旦那との



關係を切るか切らないかが、眞の情を男に捧げてゐるか否かの試験石のやうな形になつてゐた。平生鈴子は旦那を満更厭だとは思つてゐなかつた。そこからもさうした空氣は醸されて來てゐた。

鈴子は竟に決心した。

旦那は普通多くの旦那に見るやうに、さう旨い口も利かず、唄もうたはず、又年も取つてゐたが、以前に持つた旦那よりは眞面目で、自分のことを深く思つてゐて呉れることを鈴子は思はずにはゐられなかつた。それから比べると以前に持つた子供の出來た旦那などは、旨い口は利いた。女の喜びさうなことは言つた。機嫌を取ること上手であつた。旨い洒落などばかり言つてゐて、本當のところをつかみたいと思つても、いつもつかめないやうな處があつた。第一、女と遊ぶことが好きで、賑やかに大勢藝者でも集めて騒ぎさへすれば好いといふやうなところがあつた。子供が出來たことを始めて話した時にも、喜ぶかと思ひの外『ふん、それはお目出度いな。』など、平氣で戲談のやうにして言つた。鈴子はさういふ人に一度は目覺めかけた深い戀の情を寄せかけて行つたのであつた。鈴子はさうした旦那は向うから離れ、此方から離れやうとする旦那は、離れまいとしてやさしく眞心を開いて來るのを感じた。

旦那の顔を見ると、決心した言葉が何うしても口から出なかつた。

それは靜かな曇つた日であつた。かれ等はいつもの花屋の一階の間になるた。旦那は機嫌が好かつた。その日は旦那は午後の三時頃から來て、靜かに酒を飲んで話した。『もう一人、誰か姐さんと呼ばうぢや

ないか。』かう旦那が言ふのを鈴子はとめて、『今日は誰も呼ばないで靜かに二人ぎりて話させようよ。』と言つた。鈴子は辛さうにさびしさうにしてゐた。それを旦那は却つて嬉しさうにして聞いた。

『この間の晩はあやしかつたぜ——』

かう旦那は笑ひながら言つた。

鈴子もつとめて晴々した顔をしてゐた。いくら考へたつて、なるやうにしきやならない。かう思つて此間中から辛い思ひをさせられた辛勞も何處かに行つたかのやうに、莞爾と楽しさうにして、『私にも一杯頂戴。』など、つゞけて飲んで、顔を眞赤にして、三味線を弾いた。

夕暮近い頃には、旦那と伴れ立つて築山のある庭から、池の縁を廻つて、敷石を傳つたり、小さな丘に添つた道を歩いたりして川の方へ行つた。一年以上もかうして來ては眺めた川である。池の岸には紫白の菖蒲が眼もさめるやうに咲いて、大きな龜の子がその石に甲羅を干してゐた。『そら、其處に龜の子がゐるわねえ。』わざと平氣な顔をして、こんなことを言つて、鈴子は池の中の踏石を渡つた。

『危いよ、危いよ、酔つてゐて、落こちでもすると、母さんから大小言が出るよ。僕の責任になるからな。』

『大丈夫ですよ。』

丘の裾を廻りながら、何も知らない旦那は、



『今日は静かだね、何處の室にもお客はゐないね。』

『さうね……静かね。こんなことはめづらしいですよ。』

ふと思出したやうに、『藝者稼業なんて、いやな稼業ね。人間のするもんぢやなくつてね。』

『何うして?』

『何うしてツて言ふこともないけれども……さうぢやない?』

『それはさうだね。』

『つくづくいやだわ。』

川の畔に出た時には、二人は静かに姿を浮き出すやうにして、長い間溶々として流れる大河に面して立つてゐた。對岸には大きなガス溜があつて、エンジンの動く音が川に反響して凄しく聞えて來た。川には荷物を満載した舟や帆やボートや、大勢人を乗せた渡舟などが通つて行く。對岸の大きな工場の此方では、女の労働者や男の土方などが頻りに煉瓦を運んで働いてゐるのが小さく見えた。

晴れた日ならば、夕日が美しく川に金屬のやうな輝きを流すのであつた。また碧い美しい空を、白い羊毛のやうな雲を、又焰のやうに赤い夕映を……。しかし其日は灰色に空は曇つて、流るゝ水の色も佗しく、岸に生えた蘆荻の新緑に打寄せて來る波もわるく濁つてゐた。半孕んだ帆は薄暗くあはれげに見えた。鈴子はつとめて氣を引立てるやうにして話した。

歸つて來てから、さびしいから、何うしても、ひとり姐さんを聘ばうと旦那が言ふので、さういふ氣は起らなかつたけれど、女中に頼んでかの子姐さんを聘んで貰つて、やがてやつて來たその老妓を相手に、又一しきり静かに酒を飲んだり話したりした。あまり進まなかつたけれども、旦那が望むので、別れのつもりで、鈴子は立つて静かに袖をひるがへした。土地でも鈴子は踊が上手なので評判であつた。狭い一間に入る時分には、一日降らずに暮れた空がいつか雨になつて、それも近頃のない大降になつた。屋根や庇に打ちつける音は、時としては霰か氷雨かと思はれた。従つて何の室にも客はなく、女中が丸い鑊に水を持つて來た後には、あたりはひつそりとして了つた。唯瀉ぐやうな雨の音ばかりだ。

五燭の電燈、赤いメリンスの四布蒲團、微かな光線の中に浮き出すやうに見える派手な長襦袢、長い艶な美しい鬘と襟足……ある期間を過ぎたあとで、静かな聲で言つた。

『聞いて戴きたいことがあるんですがね。』

『何だえ?』

かう無造作に言つて旦那は此方に向いた。

静かな囁くやうな鈴子の聲は續いた。鈴子の胸には眞面目な決心が上つて來てゐた。かうして打明けではならないことを、又は濟まないことを、自分の口から、旦那の耳へ。悲しい辛い思ひがをり／＼胸を一杯にするのを鈴子は感じた。旦那は始めは驚いたやうな顔をしてゐたが、又はいくらか焦々するや



うな形を見せてゐたが、話して行くにつれて、『うん、うん。』と静かに點頭いて聞いた。眞面目な表情が旦那の顔にも上つて來てゐた。

『ですから……ですから。』

かう言つて鈴子の言葉は途切れた。押へに押へた悲哀、世間や養母に對する悲哀が、思ひのまゝにならない悲哀、かうしたすまないことを言はなければならぬ悲哀が、今しも堰を切つて落した瀧津瀬のやうに鈴子の胸にこみ上げて來たのであつた。鈴子は顔を突伏して泣いた。

旦那も黙つて鈴子の腕を自分の腕に合せたまゝにしてゐた。

鈴子が顔を上げた時には、旦那の眼にも涙のあるのを見た。

『わかつたよ、よくわかつたよ。』

かう旦那は靜かに言つた。

『本當に、こんなことを申上げて……。』

鈴子はまた突伏した。

何事をも鈴子は旦那に隠さなかつた。すべてあつたことを話した。『いゝえ、家を移轉したのは、さういふつもりで引越したんぢやないんです。越してから一月も経つてからのことですから……。』かう言つて師匠の相弟子の友達である男に戀したことを話した。前にもいくらか薄々知つてゐる旦那は別に驚き

もしなかつたが、折角眞剣に世話をしやうとした自分の心の通じなかつたのを遺憾に思つた。しかし鈴子の心持がわかつて來ると共に、又は鈴子の境遇と戀にあこがれた心とが飲込めて來ると共に、折角馴染かけた戀に似た自分の心が、忽ち水を注がれて消されて行くのを辛く旦那は感じながら、しかも何うすることも出来なかつた。そればかりではなかつた。旦那は自分の心が鈴子の戀に纏れ合つて行くのを見た。終には、自分を別に、自分をわきに離して、戀に狂ふ男女の心理に同感するやうな境にまで旦那は伴れて行かれた。何のために？ また何の力のために？ 鈴子の眞面目なまことの涙と、かうしたことを自分に言ひ得るまで思ひ詰めた心とのために……。

鈴子はこの間の夜の出來事の内容までは話さなかつたが、それでもその事は既に旦那にちゃんと察しられてゐることを知つた。旦那はまた旦那で、そこまで追求しては聞かなかつた。

旦那はをりく溜息を吐いた。腕を合せたまゝ、長い間黙つてゐた。

一度小降になつた雨はまた音を立て、強く降り出して來た。

旦那には鈴子の心がわかり、鈴子には旦那が先の旦那とは違つて、物のよくわかる旦那だと言ふことはわかつたけれど、兎に角かうした別れ話を女から持ち出したといふ形が、その夜の空氣を佗しく辛く感じさせた。かれ等は同じ床には寝たけれども、竟に竟にいつものやうな氣分にはなれなかつた。

鈴子も旦那も終夜雨の音をきながら眠ることが出来なかつた。鈴子は一度はかうした話をあと先見



ずに打明けて旦那に話したことを後悔した。惚れてはゐないけれど、さう憎くも厭だとも思つてゐる旦那ではない。これが他の藝者ならば、言ふ時はいつでも言へる。別れる時はいつでも別れられる。かうした軽い程度で、それを月々世話になつてゐる經濟上の補助とくつ附けて、あるところまで理解させて、そして時節の來るのを待つやうにさせずには置かない。この社會では、さうした事件は到るところにある。ある姐さんなどは、さういふ風にして男をあやつつて行くのを戀の一番おもしろいことだと思つてゐる。かう思つた鈴子は、餘りに早く餘りに後先見ずに、さういふ話を持出したことを悔いても見た。そしてこれが、藝者稼業に似合はないかうした生真面目が、梅ちゃんのやうに腕を振ふことが出来ない自分の性質かなども思つた。旦那は又旦那で、かうと言はれて見れば、それならさうかと言つて此まゝ別れて了ふことが出来ないやうな氣がした。夜明近く、今度は、旦那は、鈴子の男に就いていろいろに訊いた。

『一緒になれ、ばそれは結構だけでも、……何うせ、さうすれば母さんは反對なんだらうから。』

『さうなれば、養母とはどうせ、すつかり綺麗になりたいと思つてゐます。』

『しかし、お前の話では、その人はこれまで随分女にかけては、手のある男だつて言ふ話だが……。』

『だから、何うなるか、先はわからないんですけども……。』

で、さうした煮え切らない話が夜明までつゞいた。要するに、際限がなかつた。しかし旦那の男心が鈴子の思つたとは反對に、そんな女とは思はなかつたとか何とか言つてすぐ突離すかと思つたとは反對に強く熱く自分の方に偏つて流れて來るのを感じた。それが却つて鈴子には辛かつた。旦那は終にはエクススタシーに陥つたやうに、『わかれの *Bye-bye!*』など、言つて女の體を固く抱き緊めた。

鈴子は長襦袢姿で、廊下を通つて厠へ行つた。また一つ新しい苦勞が開けて來たやうな氣がした。つゞいて容易に解くことの出来ないきづなが深く自分の體にからみついて來るのを感じた。昨日までは、今度逢つた時には、旦那にはきつぱりことわる。さうでなくつては本當ではない。かういふ風に簡単に考へてゐた。ところが、さうは行かないものであることが考へられた。『何うでも好いよ。此處の家で具合がわるいなら、此處でなくつても好い。又、別れなければならぬなら、表面別れた形にして置いて好い。兎に角、さうした新しい生活に入るなら入つて見るが好い。その邪魔はしない。しかし、折角僕もお前を見て來た。世話といふ世話は出來ないが、行末までも世話をして見やうと思つてゐた……。』かう言はれて見ると、鈴子はそれでも暇を戴きたいとは言へなかつた。

厠を出たところで、手に水をかけながら、鈴子は立留つて、心を一ところに集めるやうにして考へた。やがて室に歸つて來た鈴子は、再び床に入らうとはしなかつた。その儘着物を着て起きる支度をした。旦那は佗しさに、又は自分の言ひ出した心持を女が汲んで呉れないらしい態度に失望したと言ふやうに、ぐつたりと半あけてゐた頭を枕に落した。



鈴子は着物を着て、帯をしめて、涙に濡れた顔を直して、そのまゝ、旦那の枕元のところに来て坐つた。

『兎に角、一度お暇をいたゞかして……。』

『……。』

『表向きだけでも好う御座んすから……。』

『兎に角、これきりで別れるといふことは止さう。』

『それでも好う御座んすけども……この家へは、もうこれ切りにして下さい。』

『それは何うでも好い……。しかし藝者はしてるんだらう？』

『え。』かう言つたが、張り詰めた心がまた弛んで、自分の男の戀に對する疑惑と旦那のやさしい未練に對する同情とが纏れ合つて來るのを感じた。鈴子はわからなくなつたといふやうに、『もう、この話はよませう。もつと考へさせて下さい。』かう言つた鈴子の眼からは涙が出た。

佗しい佗しい雨の朝であつた。昨夜のやうにもう強くは降らなかつたけれど、びしょくといつ晴れるとも知れなかつた。庭の縁も石も菖蒲も野も皆雨に濡れそぼちてゐた。やがて女中は入つて來たが、その眼にも、その座敷のいつにも違つて濕つた空氣に滿されてゐるのがわかつた。鈴子の眼にはかくし切れない涙の痕が残つてゐるし、旦那の顔には包みきれないやうな佗しさがそれと見えた。いつも樂し

さうにして酌み交す朝酒も、多くは手持無沙汰のやうな沈黙の中に過ぎた。

女中は鈴子を廊下まで呼び出して、

『何うかしたの？』

『いゝえ、別に……。』

『でも、變ね。』

『御機嫌がわるいのよ。』

て、雨の降頻る中に車は呼ばれて、旦那は淋しさうにして歸つて行つた。あとで鈴子は女將や女中から種々なことを聞かれたけれど、鈴子は別に何も話さなかつた。別れないですむものなら、旦那とも別れたくないといふ心が未だに胸の何處かに残つてゐるのを鈴子は見た。やがて鈴子の車も來た。雨は入口の紫陽花の紫にしとゞに降つた。

## 十三

鈴子と男との間柄は忽ちその土地にばつとなつた。何方かと言へば思ひがけない噂なので、初めは人々も半信半疑でゐるたけれども、またある姐さんなどは、鈴子の平生堅いのを知つてゐるので、そんなことはないと言つて容易に信じなかつたけれど、段々それが事實であるといふことが知れて來た。『まあねえ、



鈴ちやんが……』かういふ妓もあれば、『もう三月も前からですとき。それで格子にいつも鍵をかつて中で逢つてゐたんですとき。』といふものもあつた。照葉といふ鈴子と仲の好い妓は、『さう言へば、思ひ當ることがあるわ。此間、芝居に行く約束をした時、私の方から誘ひに行くつて言つたら、好いよ、家になんか来なくつたつて好いよ、誘ひに来るならやめるわつて言ふのよ。變なことがあると思つてゐたのよ。その時ゐたのよ、屹度。』かう言つてある妓に話した。

これが見番の養女でなかつたならば、あの監督の喧しい養母のもとにある妓でなかつたならば、又は平生堅い方で旦那と別れるにさへ涙を流したと言ふほどの妓でなかつたならば、人々はさう評判にも立てなかつたかも知れなかつた。かういふ社會にはさういふ話は別にめづらしい話でもなかつたから……しかし鈴子の戀の話は人々を驚かした。

従つて、その相手の男に對する批評もあちこちでできた。遊人だと言ふものもあれば、有名な女たらしだといふものもあつた。一中節の年を取つた師匠は、『まア、あの人がかえ？ あの人は評判の男ぢやないか。それはね、好い男さ。よし町あたりを通ると、お酌さんがキとか、アとか言つて目くばせしたものだアね。大變な人に引か、つたね。』など、言つた。『見番のお政をばさん、それは心配だね、だから、堅い人は柔かい人よりも用心しなけりやいけなかつて私が言はぬことぢやない。』かうも言つた。お座敷で、或るお客が、

『それにしても、好く三月もわからずゐるたもんだね。』  
かうある老妓に訊くと、

『これが土地で出来たことなら、すぐわかるんですけれども、稽古先で出来たんですから、それで、ちよつとわからなかつたんですね。そひやもうねえ、土地ならすぐなんですけれども……。』

『面白いな、しかし……。』  
『堅い評判の妓だけにね。』

『矢張、色戀でなくつちや末が納まらないんだねえ。かういふ稼業をしてゐても……。』

『それは本當ですね。』  
かう言つて老妓は笑つた。

花屋で鈴子が旦那をぢかに斷つたといふ話は、旦那の口から洩れたか、それとも旦那から話した養母の口から洩れたか、それは何方からだかわからないが、さういふ噂も土地の人達の耳を聳たしめるには十分であつた。

『ぢや、本當に、きつぱり斷つたのかしら？ 本當にさうなら、豪いわねえ、餘程眞剣ねえ。』などと妓達は言つた。

その時分には、鈴子と養母との關係は、一層難しくなつてゐた。始めは養母は度々出かけて行つて、



一刻も早く家を疊んで同居することを嚴談した。時には、中に人が入つて、『今の中に思ひ切れれば、今までのことは許してやる。何にも言はない。さうした方が貴女の行末のためにもなる。今、かうして見番の養母と喧嘩しては、また不義理をしては、貴女だつてこの土地では藝者の稼業をして居られなくなる。又、同盟を廻され、ば、他の土地に行つたとて矢張稼業が出来ない。それに、折角これまで築き上げた貴女の名前だ、餘り智慧のない話ぢやありませんか。』かう言つて譯を細く説いた。

## 十四

鈴子は世間で想像してゐるよりも一層辛い運命の迫つて來てゐるのを感じた。しかし、何うしても自分の思つたことは通したいと鈴子は思つた。鈴子に取つては、今では、男と『女たらし』だとか『騙されてゐるのだ。』とか言はれてゐる男と、一緒に伴れ添うて見せなければ、何うしても自分の面目が立たないといふやうなハメに陥つて行つてゐるのであつた。

その話を男にすると、

『大丈夫だよ。僕がついてるよ。そんな心配はしない方が好い。』

かう言つて、男はいつも鈴子をなだめた。それは戀の歡樂に續いてゐるので、何の點まで男は自分を愛してゐるか、又どれほど深く自分を思つてゐて呉れるか、それがちよつとわからぬやうな氣がしたけ

れども、それでも男が割合に眞剣に、養母の方を綺麗にする話の相談相手にもなつていろ／＼心配して呉れるのが力であつた。花屋での旦那とのわかれ話を男にした時には、男は決してそれをわるいと言はなかつた。又、普通の藝者のするやうに兩天秤にかけて置かなかつたことを、『もう少し引張つて置けば好いの……智慧のない女だ。』とも言はなかつた。此頃では男は午後になると、いつも蟻殻町の方から歸つて來た。

時には踊の師匠の相弟子と一緒にやつて來て、酒肴を取つて、はしやいで騒いで三味線を弾いたりした。

通りに面した格子戸には矢張り鍵がかけてあつた。

一月ほど経つた後には、鈴子は益々自分の墜ちて行くところに墜ちて行きつゝあるのを感じた。最早鈴子は土地での一流の姐さんではなかつた。又、勢力のある見番の養母や、立派な後楯の旦那を持つて居る姐さんでもなかつた。それに、かうなつて了つては——かう土地に噂を立てられて了つては、假令口がかゝつて來ても、きまりがわるくつて、又人々にじろ／＼顔を見られるやうで、お座敷には出て行かれなかつた。そればかりではなかつた。養母が見番の全權を握つてゐるので、又、養母と土地のお茶屋との關係もあるので、お座敷の口はばつたりかゝらなくなつて了つた。お名指でかけて來ても、見番では矢張陽に、陰にそれを遮つた。



『けしからんな、それは、見番にはさういふ権利はない。』  
かう男が怒つて見たところで、養母の方がそのまゝになつてゐるので、何うすることも出来なかつた。

聞くこと、見ること、すべて没落の光景を鈴子に思はせた。仲を好くした照葉や梅子なども、そのことがあつてからは、成べく此方に近寄らないやうにした。何うかして、土手などですれ違つても、ちよつと挨拶する位で笑つて通つて行つた。今まで入れなかつた川添ひの大きな料理屋へも、此頃では梅子が入つて行つて、お座敷の数が非常に殖えたなど、いふ噂を聞いたときには、鈴子は今更ながらくわつとして、男のために拂つた自分の犠牲の如何に大きかつたかを思つた。何處に行つても、此處に行つても、人達はもう相手にしてくれなかつた。

## 十五

これが川添ひの土地で全盛を盡したかの女か。又これが何處のお茶屋でも姐さん姐さんと立てられて、美しい巧な舞の袖に客の心を恍惚たらしめたかの女か。又これが人に羨まれる旦那をもち、指環にも着物にも贅澤を盡し、自働車などで歌舞伎座や國技館の本場所あたりに出掛けて行つたかの女か。又たこれが世間の苦しみも何にも知らず、人情の冷たいのも暖いのも知らずに暢氣に日を送つてゐたかの女か。

唯熱心に川向うに毎朝朋輩と連れ立つて踊の稽古に行つたかの女か。

ある時、土手で花屋の女將に逢ふと、『鈴ちゃん、お前さん、何うしたつて言ふんだよ。魔がさしたつて言ふのかえ、それとも何うかしたのかえ。ちつとは、自分の身の上の振方も考へてごらんよ。』かう言つて、その他には何にも言はずに、さつさと向うの方へ行つて了つた。つい此間まで懇意にした花月の女將は、それでも行くと、別に變つたことが無いやうに愛嬌よく取扱つてくれるけれども、『でもねえ、鈴ちゃん、損ぢやないか。折角磨いた藝を持つてさ、それが惜しいぢやないかねえ、さうは思はないの、鈴ちゃん。』など、言つた。

鈴子はそれが口惜しいと言ふやうにして、又はその代りにかうして見せてやると言ふやうにして、いつも髪はきまつて丸髷に結はせた。矢張元の髪結さんであつたが、それがそのことがあつてから三四度來て、その次に、『お氣の毒ですけれども、お師匠さんが喧しくて爲方ありませんから……』と言つて斷つた。髪結の師匠と言ふのが、鈴子の養母であつた。

それからは、鈴子はその近處に住んでゐる髪結の許に、自分で出掛けて結つて貰つた。矢張何時も丸髷に結つて貰つた。手絡もわざと派手なのを、髷の形も一番大きいのをを用ゐた。

何うかすると、その髪結の許に、知つてゐる抱妓などが來てゐることがあつた。抱妓は待ちながら鈴子の大きな丸髷の段々出來て來るのを見た。



『羨ましいわねえ、姐さん!』

『何うして?』

『だつて、丸髷に結びたいわ。』

『でも、苦勞はあるわ……。』

『それはあるでせうけれども……丸髷に結つてゐる人を見ると、私なんか、いつさういふ身になれるかと思つて……。それに、姐さんは、毛が好いから、丸髷が本當によく似合ふわ、羨ましいわ。』

『駄目よ……。』

『本當に綺麗……。矢張、姐さん位の年頃になると、丸髷が一番好く似合ふわねえ。』

『何うしても、年が來ますとねえ……。』かうそれを見てゐた髪結は言つた。

大きな丸髷は、鈴子の心の象徴か何ぞのやうに四邊に際立つて美しく見えた。土地の藝者達も、何うかすると、その髪結がへりの鈴子の丸髷に邂逅して、それを話の種にした。

## 十六

養母の方のきまりを附けなければならぬ時期が次第に切迫して來てゐた。男も無論、心配して、出來るだけ多くその額をつくらうとして奔走した。

養母の方では、好加減に鈴子が懲りて、戻つて來て呉れるのを望んでゐた。仲に入つた人達も、『何アに魔がさしたんですよ、ぢき目が覺めますよ。』こんなことを言つてゐた。しかし、それをかれ等の目的の下に近づけて來るには、何うしても鈴子の養母に負つた負擔の方から攻め寄せて行かなければならなかつた。後には、養母の手から、さういふ口利きをのみ業としてゐる三百代言なども入つて來て、毎日のやうに、靜かな、世離れがした鈴子の家を脅かした。

婆やはまだそこに使はれてゐた。見番の養母に濟まないから暇を取りたいと言つてゐたが——更に立入つて、かうなつてはもう以前のやうに旨い鼻薬を貰ふことが出來なくなつたので、體好く引上げやうと思つてゐるのだが、手のない今、婆やに行かれては、ちよつと鈴子は困るので、いろ／＼に機嫌を取つて、つとめてそれを引留めて置くやうにした。しかし、その婆やも此頃ではもとのやうに自由に十分には動かなくなつてゐた。はいと言つておとなしく引込んでゐるところにまで理窟をつけて、いろ／＼なことを言つた。洗濯物なども何の彼のとよく溜めて置いた。

鈴子はさういふところにも、没落の氣分を味はなければならぬのを悲しく思つた。ある日は、『本當にしやうがない、婆やまで人を馬鹿にするんですもの。』かう縋るやうにして男に言つた。鈴子の眼には涙が光つた。

『出して、代りを伴れて來たら好いちやないか。』



『だって、ちよつとはありませんし、それに、近所に奉公でもされて、種々なことを言はれると厭だと思つて……。』

『そんなことは構はないぢやないか。』

『でもね……。』

しかし男が此頃になつて眞面目に種々なことを考へて呉れるのが鈴子には嬉しかつた。乗りかゝつた船、始めはさういふ風なところが何處かに見えてゐて、本氣になれないやうな水臭いところが、いくらかないでもなかつたが、此頃では、かうして世間を離れて、又自己の位置を離れて、女が自分一人に盡して呉れる眞心がかれを動かしたか、それとも又かうした世離れた二人の生活が、今まで紅燈緑酒の間にのみ埋められるやうにして來たかれに興味を起させたのか、それは何方だかわからないが、兎に角、男は家を明けるやうなことは滅多になかつた。『今日は遅いわねえ、何うしたんでせうね。』壊れかけた髪を氣にして、いろ／＼なことに思ひ崩折れて、長火鉢の傍でしよけて待つてゐると、格子が音高く明いて男は歸つて來た。

あたふたと迎へに出て、

『随分遅いのね。待つたわ。』

『でも、あの話であちこち廻つて來たもんだから。』

『やう……。』

かう言つて、男の不斷着を出したり、着物を疊んだりして、それから二人で長火鉢にさし向ひに、其話やら、何やら彼やりに夜は更けて行くのであつた。

『向うぢや、いつまでもさうぐづ／＼してゐるなら、爲方がないから、表沙汰にするやうな話よ。』

『おどかしだよ。』

『でも、今度はおどかしぢやないやうだわ。』

『今日も來たのか？』

『え……。それに、長火鉢だの、箆笥だの、皆な向うのものだから、今日にも持つて行くつて言ふのよ。實はさうぢやないんですけども……。この長火鉢だつて、箆笥だつて、先の旦那が皆な拵へて呉れたんですからね。』

『そんな眞似をするつて言ふなら、さうさせれや好かつた。家宅侵入で、あべこべにやつてやるから……。』

『しかし本當に、何うにか始末をつけたいわねえ。いつまでもかうしてゐては、氣持がわるいわ。』

『僕もさう思つてるんだ。もう少し待つて呉れ……。今日もその話で行つたんだが、何うも旨く行かなかつた。今、十日も経てば出来る筈だから。』



『何なら、私がつけてもいいわ。』かう言つた鈴子は、長い間のことを考へて來てゐた。兎に角何を措いても、鈴子は養母の手から自由になりたかつた。世話になつたとは言へ、又恩にもなつたとは言へ、あの慾の深い、薄情な、金を貯めることばかりに夢中で、義理も人情も知らないあの養母の籍から身を抜いて、もとの、小川姓に戻るなり、又は男の籍に自分を入れるなりしたかつた。さうしなければ、世間に對する自分の顔も立たないし、かうした戀に進んで入つて行つた意義も徒爾になつて了ふやうに思つた。立派な一人前の細君になつて、この土地の人達に見せてやらなければ氣が濟まないやうに思つた。

『私ね。』かう言つて男の顔を見て、『此間から考へてゐたにはゐたのよ。私、ダイアの指環を三つ持つてるし、それに櫛だつて、簪だつて、好いのがあるから、あれを皆な賣つて了へば、かなりのお賣になりますからね。さうしたら、綺麗にすることが出来ると思ふわ。』

『何アに、好いよ、僕がするよ。』

『でも、ね、あんまり喧しく言つて來るんだもの。向うではね、その癖それとは、正反對のことを考へてゐるのよ。今に目が覺めるだらうツて言つてゐるんですよ。そして、あやまつて歸つて來るだらうと思つてゐるんですよ。馬鹿にしてゐるんですよ。藝者なんか、イヤなこつた、もう二度と再び……』

『でも、此間、旦那から來た手紙は何うしたえ。返事をやつたらう？』

『まだ、あんなことを……。』

かう言つて、ぢつと男の顔を鈴子は見詰めた。急に、悲しくなつて來たといふやうに、はらくと涙は鈴子の白い頬を傳つて落ちた。

暫く二人は黙つた。

『貴方はまだそんなことを思つてるの？』

『さうぢやないけれど……。』男は笑つて、『まあ好いよ、そんなこと、戯談に言つたんだよ。』

『でも、本當に、そんな風に、貴方は思つてるの？』

『さうぢやないよ。』

『聞かして頂戴……本當にさう思つてゐるんなら、さうと聞かして頂戴……。』

『ぢやないツて言ふのに……。』

『旦那だつて、それはわかつた旦那よ。それは好い事だつて賛成して呉れたんですよ。先の旦那なんかから比べれば人情はあるし、物はわかつてゐるし、さういふことにするにしても、お前、當分は困るだらうからツて言ふのよ。それを私は、ちゃんと斷つたんですよ……。私は、これでも藝者氣質ぢやなくつてよ。普通の藝者なら、屹度兩天秤かけて置くのにきまつてゐるのよ。それをしない私ですからね。そんなことを思はれると、本當に腹が立つわ。』



『好いよ、わかつたよ。』

世離れた二人だけの生活になつても、かうした話は猶ほをりくかれ等の間に取換されるのであつた。鈴子がいかに情を見せても、さびしく丸鬚に結つて見せても、前に關係した男の數々は、常に二人の間に浮び出すのであつた。又時に由つては、それとは反對に、男の持つた大勢の女に對する鈴子の疑惑が際限なくかの女を惱ますのであつた。勝手に近い三疊にゐる婆やは、これを聞いていつも、『又始まつたな。』と思つた。そして馬鹿々々しいやうな笑ひたいやうな氣がするのであつた。そして二人は泣いたり笑つたりするかと思ふと、今度は急にはしやぎ出して、長押にかけてある三味線を下して、男が弾くのに女が合せたり、女が弾くのに男が唄つたりした。

奥の六疊には、明るい晝のやうな月がさし込んで來たり、又はしめやかに終夜雨の音が聞えたりした。庭には婆やが買つたり又は此間通りに賣りに來た爺さんから買つたりしたダリヤの赤い白い紫の花が一面に咲いて、朝は眩しいほどそれに七月の暑い日がさした。名物の蚊は、もう先月あたりから出て、此頃では、もう蚊帳を吊らなければならなくなつた。五燭の電燈の白い笠は、蚊帳を吊ると、ずつと持上つて、紐はたるんで、蚊帳の中に、浮ぶやうになつた。鈴子の丸鬚は、派手な長襦袢と共に繒のやうにその淺黃の蚊帳の中に透いて見えた。

## 十七

ある日の午後、鈴子は自分の持つてゐる貴重品をすつかり調べて見た。

鈴子は何も彼も出して見た。寶に入れて、まだ出さずにそのまゝになつてゐるものもあるが、それでもまだ大切なものは大抵其處に残つてゐた。

ダイヤの指環が三つ。一番大きいのはその時四百圓したもので、それはかの女をお酌から一本にして呉れた旦那が買つて呉れた。その時は何んなに嬉しかつたか知れなかつた。子供のやうに朝に夕にそれを簞笥から出して來て見た。そのためにのみ旦那は難有い情深い人だと思つた。それにお座敷にそれをはめて出るのがまたどんなに得意であつたであらうか。朋輩の妓達は皆なそれを羨しがつた。『鈴ちゃん、ちよつとお見せよ、大きいわねえ、光るわねえ。』など、言つて寄つて來て、細いかの女の指にはめてあるダイヤを羨しさうにして見た。姐さん達すら、大抵はさうした指環を持つてゐないので、『四百圓、その位するだらうね。寶が好いもの。』などと言つた。そしてまたそのダイヤが夜のお座敷の灯に光るのがうれしかつた。それをはめてゐると、自分の身から、體から後光がさすやうにすら思はれた。何處のお座敷に行つても、それがあつたために、人にひけを取らないで濟むやうな氣がした。

そればかりではなかつた。それには、そのダイヤの指環には、旦那の情と言ふやうなものが今でも矢



張絡みついて残つてゐた。遊びの派手な、金を使ふことを何とも思はない、土地では評判されるほどの旦那で、年はかなり取つてゐたが、何處か氣の若いところのある人だつた。『もう、少し若いとな、夫婦になれる處だつた、もう十年遅く生れて來れば好かつた。』など、よく戯談を言つた。鈴子は、まだ若かつたので、その情を深く染々と感ずることは出來なかつたけれど、それでも時々思ひ出して『何うしていらつしやるだらう、今時分は？』など、思つた。この間も、『あの旦那が盛んでゐて下されば……』など、思つた。その旦那は二年ほどして、すつかり家産を蕩盡して、紙衣のあはれな身になつて了つたのであつた。今は東京にゐるか、それとも田舎に行つたかわからなかつた。

もう一つのダイヤの指環は、梅子があの息子を騙してゐる時分のお客で、何うかして鈴子を自分のものにしたと言つて奥の待合に一日隔のやうにやつて來た。芝居へも伴れて行けば、國技館へも一緒に自動車で行つた。何でも日本橋あたりの大きな呉服屋の息子で、年は二十七八、金を使はせやうと思へば如何やうにも使はせることが出来るやうな人であつた。それを散々引張つて、終に、鈴子はそのダイヤを買つて貰つた。矢張二百圓と少しした。しかしその息子とはさう長い間關係はしてゐなかつた。息子はやがて禁治産になつた。その本當の女は、今もゐるRといふ藝者だつたが、息子はいつしかそのRの方にも來なくなつて了つた。

もつ一つの矢張二百圓ほどしたダイヤの指環は、二番目に持つた旦那に買つて貰つた。この旦那は厭

で、寫方がなかつた。丁度息子に口説かれた時分正面に持つてゐた旦那であるが、その息子に一度でも鈴子が睨いたのは、その旦那をよしてから、Rからその息子を奪ひ取らうと思ふ心が鈴子に萌してゐたからであつた。後には、餘り此方が無愛想をして見せたので、つまらないと思つたか、旦那の方から手を引いて了つた。その時、養母はその旦那から鈔からぬ金を取つた。

箱の中にある其他いろ／＼な形をした指環を鈴子は一つ／＼手に取つて見た。後にはさう大して指環なんか欲しくなくと思ふほどそれほど鈴子は、眞珠の入つたのや、純金の名工の彫をしたのや、ルビイの入つてゐるのやを持つてゐた。

『まア、大變あるのね。』かう言つては、照葉などが來て見て羨しがつた。その他の翡翠の玉の金簪や、蒔繪の櫛や、珊瑚の根がけや、その折々につけての流行の細々したものを澤山に持つてゐた。

かうしたものを、いろ／＼な男の追憶の絡み着いて残つてゐるものを、かうして調べて見たが、いざ賣らうとなると、流石に鈴子も悲しいやうな氣がせずには居られなかつた。ダイヤの一つもない指！それはもう藝者はする氣はないから好いやうなもの、又はさうして自分の物になつたものをすつかり手離して了ふといふことはさつぱりして却つて氣持が好いやうな氣がするけれども、さてそれを賣つて了つた曉は？ 何にもなくなつて了つた曉は？ かう思ふと、疑つてはならないと思ひながら、世間の言ふやうに、實際自分は夢を見てゐるのではないか、魔がさしてゐるのではないか、あとで後悔するやう



なことがあるのではあるまいか。かう思つて、容易に出来ない男の金を疑つて見たりした。

しかし、鈴子に取つては、何うしても、養母との間の關係を綺麗にして置きたかつた。鈴子は二度と再び養母の家に行くことだけは絶対に厭だと思つた。此頃になつては、一層養母と土地とに對する反感が強くなつて來てゐた。

男はそれでも、その期限までに、兼ねて言つただけの額は出来なかつたけれど、その半分ほどの金を拵へて持つて來た。

『これで澤山よ。あとは私のものを賣るから好いわ。』

かう言つて、鈴子は胸算用をした。養母の方から言つて來た金の額は、かなりに多かつたけれど――又わざと多くしたやうな形もあつたけれど、その本當のことを知つてゐる鈴子は、仲に入つた人に一々言つてやつて、此方から正當に拂はなければならぬものはこれだけといふ風に談判した。世間では、男が仲々な腕を持つてゐるからとか、あの男がついてゐては流石に見番のお政をばさんも困つたらしいとか、いろ／＼に評判したけれども、實は鈴子が先に立つて、その方面のことは一切自分でその衝に當つた。

その翌日はかねて出入りしてゐる日本橋あたりの小間物屋の老舗の番頭がやつて來た。いよ／＼さうした記念の多い貴重品に別れなければならぬ時が來た。

流石に、その番頭も、鈴子の思切りの好いのに驚いたと言ふやうな顔をして、其處にずらりと並べられた品物を見た。

『皆な御不用なんですか。』かう言つて鈴子の顔を見た。

『だつて、藝者をしてなけりや、こんなものは要りやしないもの。』

『それは左様ですけども。』

『成たけ、高く買つてお出でよ。長年のお馴染だから……』

『へえそれは、もう……他さまでは御座いませんから。』

かう言つて番頭は世辭笑ひをして、又はかねていくらか聞いてゐる鈴子の情話に思ひあたると言ふやうな顔をしてにや／＼しながら、めづらしく男に打ち込んだ女の心と、そのあたりに漂つてゐる歡樂の氣分とを覗いて見るやうな顔をしてゐた。

鈴子はいつそ何も彼も、綺麗さつぱりと賣つて了はうかと思つたけれども、それでも、頭のもの、息子に買つて貰つたダイヤの指環と、それから戀しい思出の割合に濃く残つてゐる精巧な彫をした金の指環とを脇にのけた。

番頭は其日は歸つて、翌日又やつて來て現金を鈴子に渡した。鈴子は流石に悲しいやうな心細いやうな氣がせずにはゐられなかつた。番頭の歸つて行つた後では、獨り行末のことなどを考へながら、茫然



として長火鉢の前に坐つてゐた。

養母との仲に入つた人も、養母自身も、鈴子がさういふ態度に出たことを、寧ろ意想外にも、又は裏をかゝれたやうにも思つた。しかしさう出られた上は、その上苦情は言ふことは出来なかつた。その義務の遂行と共に、養母は爲方なしに、鈴子の籍を返すことにした。

養母はあしざまに鈴子のことを罵つて世間に吹聴した。『あんな恩知らず、義理知らずはありやしない。借金さへ返せば、それで、長年世話になつたことは忘れても好いと思つてやがる。……あんな男に騙されて自分の持物は皆な賣つて了つたつて言ふぢやないか。阿呆も何處まで阿呆なんだかわかりやしない。今にすつてんてんになつて捨てられて、目が覺めないやうにするが好いや。』こんなことを大きな聲で、見番に來る妓達や人達に言つた。

ぢかに旦那を斷つたのさへ、藝者にはめづらしいとも愠がないとも思はれてゐたのに、身のまはりのものまで賣拂つて、養母との關係を綺麗にしたといふ話は、其處でも此處でも眼を丸くさせるに十分であつた。『あの子は、そんなに度胸がある妓とは思はなかつたがね。お酌の時分にも、一本になつた頃にも、はきくしないうやうな妓だつたがね。』などと年を取つた姐さん達は噂した。男に騙されてゐると言ふのはかれ等の定評であつたが、その騙された程度が餘り深過ぎ、又餘りはまりすぎてゐるので、その男の旨さや歡樂の度數の濃さ加減などが、いろいろと噂されるのであつた。従つて通に面した中田とい

ふ女文字の曲つて書かれてある表札の家は、かれ等にとつては、想像の出来ない歡樂の場所のやうに思はれたり、又さうした思ひ切つた態度に出て行つた鈴子の心の中に自分等の悲しい心を發見して羨しいと思つたり、又目を睜つて不思議のやうな氣がしたりするのであつた。かれ等にとつては、丸鬚に結つた鈴子の姿は、時には妬ましく、時には羨しく、又は自分等とは丸で違つた種類の女のやうにも思はれた。

何うかすると、朝歸りの抱妓などが、その格子戸から兜町へ出掛けて行く男の姿などを見かけた。男はいつも意氣なソフトを冠つて、白っぽい夏外套を着て、雪駄をちやらちやらさせて、靜かに鷹揚にその通りを土手の方へと出て行つた。時には、鈴子が半ば壞れかけた丸鬚姿で、その男の出かけるのを入口まで送つて出て來るのを見送つてゐることなどもあつた。『仲が好ささうよ、鈴子姐さん。行つて入らつしやい……なんて、にこ／＼して見送つてゐたわよ。あれが本當ね。好きな人と一緒になつたんだから、土地から除け者にされたつて本望ぢやない？ それが人間の本當の道なんだよ。それを思ふと藝者なんか、いつまでしてゐるやうとは思はないわね。』染々自分の身に思ひ當るといふやうにある抱妓は話した。

それに引かへて、梅子は、鈴子がさうなつたのを好いことにして、鈴子が持つたお座敷を皆な自分の勢力範圍にして毎日忙しさに棲を取つては出かけて行つた。『鈴ちゃんがあゝなつたんで、旨いことをしたのは梅ちゃんだよ。』かう誰も彼も言つた。



鈴子を大の最良にしてゐた中年のお客は、『さうかえ？ 養母とも手を切つて、すっかり素人になつて行くつもりかえ。さうかえ。それは好いな。一つお祝ひに行つてやるかな。僕はさういふことは大賛成さ。あいつは、昔からさういふ好い處があつたよ。藝者氣質ぢやなかつたよ。さうとも、それが本當とも……。男だつてね、さういふもんじゃないよ。たとへ、始めは、さう思つて、引張る氣で始めたことでも、さう女に縋られて見ると、それでも騙す氣や何かでゐられやしないよ。そこまで出て行つたあいつの心がいぢらしいね。だから、僕はあいつは好きさ。……唯あの巧い踊を見られなくなつたのがさびしい。扇子を持つて、かうして立つと、何とも言はれないところがあつたからな。』かう言つてその手にした盃に口を當てた。

## 十八

暑い夏も時の間にすぎて行つた。土手の上から都鳥の流燈を見に賑かに人達の集つて来た夜も過ぎて、川には涼しい秋風が立ち、碧い晴れた空が澄んだ水に印象派の繪のやうに映つた。上流から下つて来る白い帆は帆につまき、ペンキ塗の小蒸気は浮き出すやうにすつきりとあたりに見えた。

百花園の草花などを見に出かけて行く人達が靜かに土手の上を通つた。寺のほとりの細い通に面した鈴子の家は、依然として元の儘であつた。中田といふ曲つた女文字は、一

小川といふ姓に男文字で書き更へられたが、格子戸も、格子戸の中に見える下駄箱も、長い瀬戸のステッキ入れも、何も彼もそのまゝで、時には女のあづま下駄がさびしさうに唯一足置いてあつたりした。午後の日影は靜かにさした。使つてゐた雇婆はとうの昔に其處を出て行つて了つたらしかつた。土地でもその噂はもう滅多には出ず、出ても以前のやうにめづらしくは思はれなかつた。人々は皆な自分自分の生活に逐はれた。養母ですらも、その話が出ると、『あれはもう駄目さ。捨てたものさ。』など、平氣で言つた。

しかし近所では、をり／＼猶その噂が出た。『マア、ねえ、鈴ちゃん我真似は出来ないわね。此頃はね、婆やがるなくなつてはからね。女中も置かないで、自分で糞焚をしてるんだとさ。……それもね、始めの中は、きまりがわるいと見えて、朝早くと夜遅くとしか通りには出て来なかつたさうだけれどね。此頃ぢや晝間でも八百屋なんか平氣で出かけて行くとき。』かう一軒置いて隣の姐さんは言つた。その姐さんも、此頃は長年添つて来た最初は情夫であり中頃は間夫であり後には亭主になつた四十先の男に厭氣がさして、名高い三味線弾と出来て、時々家をあけるので、凄しい喧嘩などがをり／＼持ち上つた。

此方の方の梅林といふ藝者屋では、姐さんはさう大して容色は好くないが、旦那を大事にするので、段々抱妓などが多くなつて、笑ふ聲や三味線を復習ふ聲がいつも賑やかに、夜は切火の音が景氣よく聞



えた。その抱妓のある窓は、丁度鈴子の家の裏口に對してゐるので、鈴子が襷がけて、勝手元などをしてゐるのを抱妓達は常によく見かけた。『すつかりお上さんね。堅氣ね。』かういふ噂が抱妓達の口に乗つた。

鈴子の生活は、脇目にはさういふ風に平和に、暢氣に人に羨まれるやうに見えたけれど——又、男は曾て女を大勢相手にしたものに似合はず、鈴子の情と真心とに引かされてか、滅多に家を空けるやうなことはなかつたけれど、戀の後の空虚と悲哀と辛苦とがひし／＼とその身に迫つて來ずには置かなかつた。何うかすると、金を男が澤山に持つてゐて、その時は、男の乾兒見たいな人達に留守を頼んで、普通の夫婦がするやうに、市川の方や、柴又の帝釋天あたりで睦し／＼に出かけて行つたり、川崎の大師にお詣りしたり、更に遠く、箱根あたりまで出かけて行くこともないではなかつたが、大抵は財布は空な時が多く、『どうも、これぢや困る。もう少し好い目が出さうなものだ。』など、言ひながら、ありもしない小遣を鈴子の財布から引出して持つて行つては使つた。それに、乾兒になる男達は、

『姉さん、姉さん。』と言つてよくやつて來て酒を飲んだ。

何うかすると、鈴子は長火鉢の前で、ひとり涙を流してゐることなどもあつた。

鈴子は養母との縁を綺麗にする爲めに自分の持つたものをあらかた賣拂つた後、更に近頃になつてまた自分の持つてゐた種々なものをなくしたことを頭にくり返した。『二三日経てば、すぐ出すよ。屹度だ

よ。』かう男に言はれて入れた冬着の一葛籠が、一月経つた今になつても出すことが出來ずに、その利子にさへ追はれ勝であることを鈴子は思つた。他にもそのをり／＼につけて近所の質屋に持つて行つたものも少しではなかつた。

鈴子はひとり種々に思ひ沈んだ。男に對しては世間で言ふ『女たらし』と言ふやうな批評の思ひ當るやうなこともないではなかつた。しかし、さうは思つて見ても、男と相對して話をする時には、また一方何うしてもさうは思はれないやうな處もあつた。男は金があつてそれを出さないのではなかつた。鈴子に對しては、すまない、すまないと思つてゐるやうな氣の小さい可愛い處が見えると、『あんなことを思つてすまなかつた。』とかの女は思つた。かうした間柄になつて一緒に苦勞をするのは當り前のことだとも思つた。それに、かの女の胸には、世間の笑はれ草になるといふことが何よりも厭であつた。

## 十九

『まア、鈴子さん……』

かう言つて聲をかけられて、ふと見ると、そのすぐ向うの木槿の垣のところ、かねて知つてゐる秀子といふ妓が大きな乳母車に綺麗につくつた生れていくらも経たない兒を乗せて、そこで赤い白い木槿



の花を手にして立つてゐた。

『まア秀ちゃん……。』

かう鈴子もなつかしさうに言つて傍に寄つて行つた。

『こんなになつたの？ もう。』

大きな眼を明いて空をじろく／＼見てゐる子供の方に體を寄せて、『大きな子ね。男の子だつたね。』

『さうよ。』

『もう、すっかり好いの？』

『え、大抵好いの。』

『幾日になるの、一體？』

『今日で、もう百日の上になるのよ。』

『さうなるかね、もう。早いものね。』

鈴子が戀に落ちる時分、秀子のお中はもう餘程眼に立つてゐた。秀子の旦那は、土地でも評判の金のある旦那で、着物でも指環でも十分にして呉れた。そればかりではなかつた。今まで住んでゐた家屋が汚いと言つて、二階を新しく普請して呉れたり、離れを一間拵へて呉れたりした。懐妊して、目に立つやうになつてからは、いつそ引かせて了はうと言つて、惜しいと人々に惜まれながら、立派な立派な引

祝をした。旦那は平生親しくしてゐる又は秀子の世話になつてゐる姐さんや藝者や土地の女將などを大勢大きな料理屋に呼んで、ひき物なども人の驚くやうな立派なものを添へて、そして御馳走をした。その時鈴子も呼ばれて行つて、その席に列した。『本當にね、秀ちゃん位仕合せな妓はありやしない。今ぢや、土地ぢや一番だよ。時ちゃんの旦那も好いけれども、あれよりもつと仕合せだよ。それがね、お前さん、つい去年まで、正月の出を何うして拵へやうなんて、秀ちゃんは心配してゐたんだがね、運だねえ。運が向いて來たんだね。』こんなことを姐さん達は言つた。秀子は鈴子や時子やなどよりも一時代新しい妓で、鈴子とは昔から交情がよかつた。踊も上手で、二人は一緒によくお座敷で踊つた。

着物もわるく、髪も壊れ、非常に世帯染みた鈴子を秀子はいたましいやうな氣がして見た。

鈴子は言つた。

『でも、皆な丈夫、……父さんも……』

『え……難有う……』

『ちよつと家に寄らない？』

『寄つても好いけれど……』

『お寄りよ。』

『ゐるの？』



「一人よ。」

「さう。」

で、秀子は其處に置いた乳母車を自分で押した。

秋の日影が靜かに赤兒の顔を照した。兒は眼をぱちぱちさせた。

「まぶしいんだよ、幌をかけておやりな。」

「大丈夫よ。」

「でも、あんなに眼をぱちぱちさせてるよ。」

「日に照される方が好いのよ。男の兒は色の黒い方が丈夫々々してゐて好いわ。」

「でも、本當に可愛い子ね。」さも羨しいと言ふやうに又覗いて見て、「子供って嬉しいもんだらう？」

「さうね。でも、世話が焼けてしやうがないわねえ。」

「だって、秀ちゃんなんか——手元で育て、行けるから楽しみぢやないの？ 私の以前の子なんか世

話が焼きたくたって世話が焼けなかつたんぢやないの？」

「それはさうね。」

かう言つたが、「でも、此頃でも行つて逢ふんでせう。」

「行つたことなんかありやしないわ。もう向うのものになつたのよ。本當につまらないと思ふわ。散

散苦勞をして……」

「本當ね。」

二人は話しながら、やがてその格子戸の處へ來た。鈴子は先に立つて、乳母車の中から赤兒を抱いて、それをあやしたり自分の頬に押しつけたりした。

秀子は障子などの破れた掃除も十分に行届かないやうな亂雑な室の長火鉢の前にやがてその身を發見した。

「女中もゐないの？」

「一人でやつてるのよ。」

「本當？」

「だって、面倒なもの……それに、貧乏なもの。」

「あんなことを言つて……」

「だって、秀ちゃん、お前さんなんかにはちよつとわからないだらうけれど、それは苦勞したのよ、瘦せたらう？」

「さうでもないけど……」

「色戀なんか懲々よ、もう……」



『あんなこと言つて……』

抱いてゐる児が泣き出したので、『おう、よし、よし、おつぱいが飲みたいのか知れないわ。』

『さうね。』

秀子はそれを受取つて、胸をひろけて、白い大きな乳を出して、平氣でそれを兒に吸はせた。『もう、

秀ちやんにかういふ兒があるんだからね。』

『でも、つまらないわ、お父さんがおぢいちゃんだから……。この兒が二十位になると、お父ちやんがもつ七十だわ。』

『だつて、ちやんとして置いて呉れるんだから好いちやない？』

『でもね……』

考へて、『もう一偏藝者になりたいと思ふわ。』

『あんなことを言つてゐる。私なんか、藝者はこりん、あんな稼業位いやなものはないと思ふわ。』

『ぢや、懲りてばかりゐるのね。色戀が懲々で、藝者が懲々ぢやしやうがないわ。私なんか好いから色戀に懲りて見たいわ。』

『そんなことを思ふもんぢやないわ……。秀ちやんなんか仕合せだもの。』

かうした話は長く長く續いた。養母とさうした關係になつたために、稼業をしてゐる昔惡意であつた

藝者達は、鈴子をふり向いても見ないやうにしてゐたが、それが秀子には可哀相にも氣の毒にも思はれた。豫て噂できいてゐたよりも一層鈴子は困つてゐるらしかつた。

秀子は其處で一時間ほど遊んだ。歸る時には、幼い兒は乳母車の中でよく眠つて、小さい可愛い呼吸を立てゝゐた。秋の日影は靜かに通にさした。『好い兒だ、本當に……。何ッて色が白いでせう。まア可愛い顔をして寝てること。』かう言つて鈴子は乳母車の中を覗くやうにした。

## 二十

ある日鈴子はいつものやうに男を送り出して、跡片附をしようとして勝手元に来て、茶碗を洗つてゐると、入口の格子戸の方で、頻りに戸をあけやうとする氣勢がした。

格子戸にはいつもの通り矢張鍵がかけてあるのであつた。

それは秋の靜かな晴れた午前であつた。日影は鮮かに前の空地の草原を照し、向うの方からは、何處かで普請をしてゐる大工の鉞や鉋の音が靜かにしてゐた。物賣や人通りのちよつと途絶えたやうな時で、隣の藝者屋にいつも今時分に來る清元の師匠もまだやつて來てゐなかつた。晝間の靜かな時——さういふ時であつた。

格子戸をガタ／＼させる音に氣の附いた鈴子は、また乾兒の一人でも來たのかしらと思ひながら、洗



物の手を止めて、茶の間から長火鉢の傍を通つて、上り端の方へ出て来て見た。しかし、そこには誰もゐなかつた。午前の日影が唯明るく向うの寺の垣にさしてゐるばかりであつた。

『犬かも知れない……』

かう思つて鈴子は再び勝手の方へ戻つて來た。

また蹲踞んで洗物を始めた。

と、今度は、すぐその前で、ガタガタと戸に人の觸れる氣勢がした。

不思議にしながら、戸を明けて見ると、そこには誰もゐない。はてなと思つて、首を出して見たかの女は、急に赧くなつた。

家のしたみに身を寄せるやうにして元の旦那が立つてゐた。

『ま？』

かう言つて聲を擧げた。

旦那は寄つて來て、

『誰もゐないのかと思つたよ。』

その顔にも、表情にも、狼狽したやうに、又は誰もゐないかといふことを聞くやうな形がありありと見えてゐた。鈴子は鈴子で、さうした水仕業の姿を、取亂した姿を元の旦那に見られたことを恥ぢた。

何うして好いか鈴子にもちよつとわからなかつた。

『こんな恰好をして……』

かう言つて鈴子は笑つて見せたが、『マア、お上んなさいましな。』

『好いのかえ、上つても……』

『え、誰も居りませんから……』

こんなことを言ふのではないと思ひながら、鈴子はいかう言つて了つた。

『あちらから……』

『いゝよ、此處からでも好いよ。すぐ行くからね。たんと邪魔はしないからね。』

『でもね、此處からでは……』

『いゝよ、いゝよ。』

外に長く立つてゐるのを怖れるといふやうにして、旦那は逸早くその裏口から入つて内から戸を閉めて了つた。

『本當に誰もゐないのかえ？』

『え……』

鈴子は益々顔をほてらせて、爲方がないといふやうにして其處に立盡した。胸は早鐘をつくやうに鳴



つた。

『此頃は婆やはゐらないのかえ？』

あたりを見廻しながら旦那は言つた。

『え……』

かう言つたが、氣がついて、

『ぢや、まア、此方へ……。ひどく散らかつてゐるのよ。』

『一人でやつてゐるのかえ。』

上にあがりながら旦那はやさしく言つた。

『まア、本當に汚ないんですよ。』

かう言つて、兎も角、茶の間の方へ旦那を伴れて行つた。しかし、鈴子は何う挨拶して好いかわからなかつた。胸がドキ／＼して顔が火のやうにほてつて爲方がないので、そのまゝ旦那を其處に置いて、そして再び勝手の方へと來た。轟く胸を靜めるやうに……。

旦那の眼には、會て來た同じ室、同じ長火鉢、同じ箆筒、同じ長押にかけた三味線などが映つたけれど、その時分と比べて、あたりが亂雑に、男のぬぎ捨てた着物や襦袢がそこらに散らかつてゐたり、女の帯が長く引張られてあつたり、疊がイヤに汚なくなつてゐたりするのがすぐ眼についた。もう一つあつた

分厚な桐の箆筒も、それに並べて置いてあつた服箆筒もなかつた。掃除も碌にしないと見えて、床の間には埃塵が白く積つてゐた。

旦那は一種の淡い悲哀を覺えた。

鈴子は容易にその姿を其處にあらはさなかつた。さうかと言つて、仕かけた洗物をつけてやつてゐるらしくもなかつた。誰もゐない家の中はしんとして、奥の六疊の方の庭の荒れたさまが一とこ此方から見えた。

暫くして、鈴子は此方へやつて來たが、『御免なさいまし、今、御挨拶をしますから……』かう言つて矢張顔を赧くして、旦那の坐つてゐるところを通つて、奥の六疊へと入つて行つたが、十分ほど經つて其處から出て來た時には、着物なども着替へ、亂れた髪も梳いてあつた。やがてさう綺麗でない座蒲團を勧めて、丁寧に挨拶をした。

『藝者をやめちやつたツてね？』

快活な調子でかう元の旦那が言ふと、

『え……』

矢張鈴子は顔を赧くしながら、旦那の方を見るのもきまりがわるいといふ風で、鐵瓶に觸つて見たり、茶箆筒から茶器を出したりした。



『すつかり聞いたよ。』

『さうですか……矢張、養母にお逢ひになりますか。』

『いや、近頃は逢はないがね……』少し途切れて、『すつかり理想通りにして了つたッていふ譯だね。』

『……………』

黙つて鈴子は茶を注いで出した。何かないかと思つて、茶籠笥の中を捜すと、其處に、昨日男の買つて來た甘納豆があつたので、それに匙をそへて出した。

『母さんの方を綺麗にしたんだつてね。』

『え……。でも、養母はわる口を言つてるでせう。本當を言へば、それは世話になつたんですから、無理はしたくなかつたんですけど……』

『矢張、慾だからな、お母さんだつて……』

『本當ですよ。』

『でも、感心してゐるよ、僕は……。お前のやり方はきばきしてゐるから……。ぐんぐんやりたいと思ふことをやつて行くから……』

『駄目ですよ。』

『でも、仕合せなんだらう。』

『駄目ですよ。』鈴子は又顔を染めて、『思つたやうには行かない世の中ですよ。』

『それはまアさうだが、何處に行つたからつて思ふやうに行きやしないが、兎に角、自分で思ひ通りにしたゞけでも好いちやないか。』

『いゝえ……』

旦那の軽い酒脱な心持は、かうして相對して坐つてゐる中に、次第に重く苦しくなつて行くのを覺えた。もとのやうに扮つてゐないので容色が落ちたやうな氣はするが、それでも其處にその眉があつた。額があつた。笑ふ時何とも言はれない愛嬌のある眼があつた。小さな唇があつた。旦那は突然やつて來て、靜かな生活の中に波を立たせたのを悔ゆるやうな氣がした。男のことを訊かうとしたが、何うしてもさういふ軽い氣分にはなれないのをかれは見た。

ともすると、互に押黙つて、話が途切れさうになつた。

鈴子の胸には言ひたいこと話したいことは非常にあつた。あの時別れたまゝで何とも言つてやらないのからしてすまないと思つてゐる。それを、かうして訪ねて來て呉れた眞心にも感謝してゐる。自分をよしてすぐ他の女に移つて行くやうな旦那でないだけに、一層氣の毒にも思つてゐる。しかしその心を何う言葉に上せて好いか鈴子にはわからなかつた。貧しい生活に對する苦痛、世間に對する反抗の苦痛、土地の人達の薄情、さうしたことを打明けて話して、自分の今の苦しみを同情して貰ひたかつたけれど、



其心の中には、男と旦那と自分とが一緒になつてくつ附いてゐるので、好い加減にお世辭に言つて了ふことは出来なかつた。

『でも、ね、僕はね。』

かう言ひかけた旦那の顔には、眞面目な表情が上つた。『僕はね、お前のことはね、心配はしてゐるんだよ、これでも……。上の空には思つてゐないんだよ。困つた時には、力になつてやるつもりなんだよ。』

『……………』

『實はね、かうして來ちやわるいと思つたのさ。折角靜かな心持でゐるところを亂しちやわるいと思つたのさ。だけどね、氣になるんだ。いろんな噂を聞くもんだから……。』

『私こそすまないんです……。』

『何アに、僕はさうは思つてやしないよ。幸福であつて呉れ、ば好いと思つてゐるんだよ。さう言ふと、變に取られるかも知れないけどね。あのわかる朝言つたことは、今でもさう思つてゐるんだから……。困つてゐる時は、いつでも力になつてやるよ。』

『すまなかつたことは、私は……私は、忘れや致しません。』

かう言つた鈴子の眼には涙が見えた。

『未練があるからと思はれちや困るんだ。それはね、未練はあるさ。しかし僕だつて、もう年は取つてゐるし、いろんなことは知つてゐるからね。單に、未練ばかりで、かうして訪ねて來た譯ぢやないんだ。兎に角、一年でも一緒にゐたお前だからね。決してあしかれとは思つてゐるやしないよ。仕合せであつて呉れ、ば好いと思つてゐるんだよ。本當だよ』うつむき加減にしてゐる鈴子をちつと見て、『何うも思ふやうにならないもんだね。』

『……………』

旦那はさう長くは其處にゐなかつた。鈴子のしやくつて呉れる甘納豆を一匙手に受けて食つて、それから茶を五六杯飲んだ。友情——さういふ淡い心持にはお互に容易になれなかつたが、世話になつてゐる時よりも、一層旦那の心持がわかつたやうな氣が鈴子にはした。普通藝者のやる兩天秤——それが單に金ばかりのものではなく、心を分けて行く段になれば、さうしたことは決して不自然でなく行はれることなどを鈴子は考へた。

歸る時には、旦那は財布の中から五圓札を二枚出して、

『何にも買つて來なかつたから……。』

と言つて出した。

『いゝえ、こんなものを頂いては……。』



『好いから来たしるしだよ。』

『いゝえ……』

と押返すのを、

『いゝぢやないか、それつばかし……。取つてお置きな……。それとも、知れちやいけないのかえ？』  
いくらか笑を含んで旦那が言ふと、

『そんなことはありやしないけど……。』顔を赧くして、『でもお氣の毒ですもの。』

『そんなことはないよ。清く貰つてお呉れよ……。』

『さうですか。本當にすみませんね。』鈴子は涙を見られないやうに顔をうつ向けて了つた。

『ぢや、丈夫でゐたまへ……。困つたら、いつでも、手紙でも何でもおよこし。』

かう言つて、旦那は立つた。下駄を表に廻さうとするのを、『好いよ、好いよ。』と言つて、そのまゝ裏口から出て行つて了つた。

鈴子はほんやりして暫しは長火鉢の前に坐つてゐた。かうした生活を見られたのがきまりがわるいやうな又さうした旦那の情が染々と心に染みわたるやうな、又一方男の中ぶらりんな、微温い心が物足りないやうな、かうしてゐたら本當に身が何う立つて行くであらうといふやうな、さうした考へが雑然として胸に湧き上つて来て、拂つても拂つても容易に去らなかつた。鈴子はいつか心を二つにわけ、體を

二つにわけ、欺騙と虚偽とを敢てしてゐる自分を想像してゐるのを見た。深い溜息がひとり手に出た。やがて思返して勝手元に洗物に行つた鈴子は、ちよつとの間に突然湧くやうに起つて来た光景をくり返して考へた。急にかの女は悲しくなつて来た。孤獨が、さびしさが、絶らうと思つた男にさへ完全に絶ることの出来なかつた悲哀が、その小さな胸を塞ぐやうにした。涙は洗桶の水の中に落ちた。

## 二十一

それから少し経つたある日のことであつた。鈴子は途中でふと邂逅した秀子に訊いた。

『何處か明いてゐる家はないかしら。』

『何うして？ 越すの？』

『だって、今の處は少し廣すぎるの。二間か三間ありや、好いのよ。もつと小さな家に入らなけりや、とてもやりきれないもの。』

『あんなことを……。』

『本當よ。』

秀子はふと思ひついたといふやうに、『そら、私の家の隣が明いてゐるわ。』

『あの真砂屋のゐる家？』



『え、さうよ。……あそこなら丁度好いと思ふわ。』

『さうね。』

鈴子は此處の家賃が既に三月も四月も溜つてゐてやかましく移轉を差配から迫られてゐることを思つた。『さうしようかしら？』

『さうなさいよ、……さうすると、家が隣りだから、何かにつけて便利よ。父さんも、鈴ちゃん可哀相だなんて言つてゐたから……』

『さう……』

移轉するにしても、又いくらか金がいるなど、鈴子は考へてゐた。何うして男はあゝ暢氣だらう。そして又女はまた何うしてかう苦勞しなければならぬのだらう。つゞいて鈴子は、立派な好い旦那を持つて、かうして平和に、自分の子を育て、行くことの出来る秀子を羨ましく思つた。先の旦那のことだの、此間来た旦那のことなどがいろ／＼と思ひ出されて來た。

二十二

その月の末には、鈴子は秀子の隣の家に移轉してゐた。前の家に比べては、家も古く、間敷も少く、疊や建具なども汚れてゐたけれども、それでも家賃は安く、もとの半分位で済んだ。秀子の父親は鈴子

を氣の毒に思つてゐるので、何んの彼のと親身になつて世話をして呉れた。男と一緒にゐて棚を吊つたり壊れた處を直したりした。

しかし世間ではいろ／＼な噂をした。養母の側に立つてゐる妓達は、『呆れたもんですね。わざと意地になつて近くに越して來たんですがね。私なら、きまりがわるくつて、土地にはゐられませんかね。……此頃はもうひどいつて言ふぢやありませんか。向うの家を疊む時だつて、家賃が三月も四月も溜つてゐたつて言ふぢやありませんか。』などと言つた。それに久しく逢つたことのない妓達がひよつくり繕はない鈴子の姿を細い露地などで見かけて、『すつかり世帯染みちやつてね、鈴ちゃん……。随分可哀相のやうな氣がしたわ。』と言つた。

中には、それほど鈴子の心を注いだ男のインバネス姿を見て、『あゝいふ人なの？ 好い男つて言へば好い男だけれど、それほどぢやないぢやない？』などと言ふものもあつた。鈴子は後には平氣で、見番の前を通つて、通りに買物などに出懸けた。

鈴子がかうなつたために、一時非常に流行兒になつた梅子は、其時分、引くとか引かぬとかで評判になつてゐた。何でも、その前の息子でなしに、新しく出來たKといふ藥種屋の主人との間に、梅子は懐妊したらしく、それがまた田舎の旦那に知れて、散々悶着をしたが、その噂を伏せるために、旦那は金を出して、梅子を引かせることにしたといふことであつた。そしてその子は旦那の兒にして育てる代り、



Kとは一切綺麗になるといふことであつた。鈴子は何うかすると、湯の中で、梅子に逢つたりした。さういふ時には、次のやうな會話が始まつた。

『さう？ もう四月、羨しいわねえ。』

『だつて、困つちやつたわ、私。』

『でも好いわよ。』

『鈴ちゃんも、出来さうなんもんだがね。』

『駄目よ、私。』

『體はわるくはないんでせう？』

『わるくはないけども……駄目よ。』

『出来て好いものには出来ないで、欲しくもない私なんかに来るんだものねえ、』  
時には又小桃といふ妓と、こんな話をした。

『花屋のお上に逢つて、此頃？』

『昨日も逢つたわ。』

『皆な丈夫。』

『え。』

『娘さんも矢張學校？』

『さうよ。』

『矢張、あの禿ちやん来て？』

『え……』

『山川さんは？』

『暫くお目にかゝつたことはないわ。』かう言つたが、小桃はふと四五日前に、鈴子の旦那に逢つたことを思ひ出して、言はうか言ふまいかと迷つてゐたが、思ひ切つて、

『さう云へば、此間、旦那に逢つたわ。』

『何處で？』

『奥で？』

『誰が行つて？』

『お房姐さんと、政治姐さんと……』

『それきり？』

『他に若い妓がゐるたけれど、土地の人ぢやないらしかつたわ。』

『さうなの？』



かう言つて、鈴子は考へたやうな顔色をした。何も彼も皆な解釋がついて行つたやうな気がした。旦那はもう思ひ切つたらしいのが、鈴子には淋しい心細い感じを起させた。其夜は男が遅くまで歸つて來ないので、ひとりさびしく長火鉢の前に坐つて、あの大騒ぎをした戀が、お座敷にも出られなくなるほど評判された戀が、旦那にもあんな不義理をした戀が、かうしたさびしいぢみなものになつて行つたことを思つた。鈴子の頬には涙が流れた。

それに、隣の秀子の全盛が、いつも鈴子に種々なことを思はせた。電話もかけられれば、離座敷も出來、新しい寢道具も出來、風呂は毎日立つて、前の細い烟突からは、紫の烟が西風に吹かれて來た。秀子の妹の京花までにも、旦那は著物をつくつてやるらしく、ある日行つた時には、呉服屋がやつて來て、頻りにお召の裾模様などをあれかこれかを選んで見てゐた。『鈴ちゃん、何方が好い？ 此方が好い。』かう言つて、秀子は水車の模様と梅の模様とを並べて見せたりした。

秀子の旦那には、此方に越して來てから逢つたことはなかつたけれど、それでもそのやつて來る時の氣勢は、隣りだけにすぐわかつた。旦那はいつも車でやつて來た。と、格子戸が明いて、『姉さん、旦那が入らしてよ。』きまつてかういふ妹の京花の聲がした。

夜は賑やかな氣勢が二階の壁一重を隔て、聞かれた。その肥つた旦那のあは、と笑ふ聲、秀子の父親の酔つて騒ぐ聲、秀子の幼い兒をあやす聲、時には花でも引いてゐるらしい、ピタ／＼と札を疊に打つ

音などとした。三味線の賑やかにきこえる夜などもあつた。

さうした幸福の境遇にゐても、それでも猶懲々するほど色戀をして見たいなどと秀子はまだ思つてゐるのであつた。それにつけても、自分の戀がいかにか大きな犠牲を拂ひつゝあつたであらうか。それでしつかりとつかんだ筈の男心は、果して鈴子にしつかりとつかむことが出來たであらうか。

鈴子は二階でその賑やかな全盛な氣勢を聞くのを辛く思つて、後には、その時は成るべく下に下りてゐることにした。鈴子は自分の心の孤獨に堪へられないで、早くから床を取つて寝たりした。

鈴子の今の心には、眼には、土地にゐる種々の妓達の生活が、寧ろ女といふものゝ生活が、はつきりと映つて來るやうに感じられた。何處を見渡しても、思つたやうな生活はなかつた。秀子だつてその全盛に満足してゐるのでもなく、梅子だつてそれで好いと思つてゐるのでもなく、又、お座敷へ出て客に大騒ぎをされてゐる妓達も、決してそれで好いではなかつた。それに、その近所に庇を並べてゐる二階屋の妓達も、決して好い生活はしてゐなかつた。ある妓は情夫と旦那とおなじやうにしてその家に泊らせた。ある妓は男に出刃庖丁をつきつけられた。又ある妓は男を養母と二人で張り合つてゐて、一日として喧嘩口論をしないことはなかつた。『それから比べれば、まだ私の生活の方が本當だ。困つて困り抜いて、何か質にでも持つて行かなければ、お小遣もないといふやうな時には、鈴子はかう思つて、せめて自分の小さな心を慰めやうとした。



藏前での構曳宿、そこにゐる老主婦、踊の師匠の家、二人の間を取持った清さん、さうした光景は、遠い遠い昔になつたやうに思はれた。時には、何うしてさう夢中になつたかと不思議に思はれる位であつた。しかし、つかむことの出来ない男心を矢張つかむより他に爲方がないのを鈴子は思つた。

鈴子は決して愚痴をこぼさなかつた。愚痴をこぼすのは耻辱である。そのため自分が世間の笑はれ草になるのだと思つた。鈴子は辛い辛い思ひを忍んで、黙つて暮した。

世間ではこんな噂をした。

『それでも、よくいつまでもくつ附いてゐるね。もう大抵、男の方で、愛想をつかしさうなもんだが……男は惚れてるんぢやないんだがな。』

『男は爲方がないから、くつついてゐるんですよ。無論、見番の養母を宛てにして、それで出来たに相違ないんですけども、鈴ちやんがあゝいふ風だから、それも出来ず、今ぢや、えらいものに引かゝつたと後悔してゐるに違ひないですよ。しかしそこは人間だから、いくらわるでも、いくら、女たらしでも、女があゝ、縋つて行くのを投り出して行くわけにも行きませんからね。』

『それはさうですね。』

かう言はれるけれど、しかし、それとは違つて、鈴子の心と男の心とびつたり合ふやうな夜がないでもなかつた。流石に、男の心は此頃では鈴子の心に深く確り合つて行つてゐた。

『そんなに、いつまでも困らせて置きやしないよ。僕だって男だよ。その位のこととは考へてゐるよ。』  
かう言つて、男は涙の流れた鈴子の顔を眺めた。

## 二十三

お房姐さんは言つた。

『さうですって、もう六月位ですって……』

『本當かね。』

『本當ですよ。あの人は前にも子供があつて、體が丈夫ですからね。』

『それは好いな。』

いくらか顔を曇らせ加減にして、前の鈴子の旦那は言つた。

それはその翌年の五月頃で、奥の菖蒲が見頃になるといふ頃であつた。旦那はよく葭町あたりの若い妓をつれてやつて来ては、昔から馴染の姐さん達をお座敷に聘んだ。

『何うやら彼うやらして居ると見えるね。』

『去年の暮あたりは、いくらかよかつたらしいですよ。』

『生れたら、一つ祝ひに行つてやらうかな。』



『さうなさいよねえ、旦那。旦那だつて、わるく思つてばかりはしませんわねえ。さうして、兎に角、やつて行くんだから、豪いわ、あの子……』

『苦勞はしてる人だよ。それでも……』

『それはさうよ、秀子さんなんか、とてもあの眞似は出来ないつて言つてゐますもの。一度藝妓をしたもので、あゝまで世話女房になる人はめづらしいつて、此頃では評判だわ。大きなお中をして、平氣で、歩いてゐるのをよく見るわ。』

『あいつは昔から、何處か素人らしいところのある女だつた。』  
其處に入つて來た若い妓は、

『何を言つてるの……？ さう、昔の惚氣を言つてるの？ 子供が出來たら、お祝ひに行つてやらうつて言つてるの？ 暢氣ね、男は？』……

『だつて爲方がない。』

『女ぢや、さうは行きませんね。さういふことがあつたら、一生口なんかきけませんね。』

『さうでもないわ、ねえ、旦那、矢張人情はありますものねえ。』

『わるかれとは思はないよ。』

かう言つたが、旦那は考へて、

『養母とは矢張これかえ？』仲たがひのしるしを手でして見せた。

『さうですとも……。途中で逢つたつて、お互に挨拶もしないでせう。それに、今度引越したところはそれは近いところですよ。あの通りですよ。矢張、あゝして別れずになるのは、意地もあるのね、意地で持つてるのね。』

『さうしたところのある女だよ。』

『まア昔の女の惚氣なんか止ませうよ。』

かう長く引張つて甘つたれてゐるやうに若い妓が言つたので、話はそのまゝになつて了つた。

二十四

時はやがて經つて行つた。土地の妓達は鈴子が大きなお中をした姿をあちこちで見た。體の加減で、時にはいやに青白い顔をしてゐる時もあるが、大抵は元氣の好い、漸くつかむものをつかんだといふやうな顔をして歩いてゐた。

もう鈴子は悲觀ばかりしてはゐなかつた。朋輩の秀子の家へ出かけて行つても、晴々したやうな顔をして、お産の話や、子供の話などをした。

何うかすると、其處に、奥に住んでゐる小吉といふ妓が來合せたりした。



『でも、鈴ちゃんは、體が丈夫だから、お産が樂でせうけれども、私は随分重かつてよ。綱を引張つて置いて、それを力にしたんですがね、あんな苦しいことは二度とは思ふわ。』

かう秀子が言ふと、『さう、そんなに重かつたの？ 私は前の時も、樂だつたから、今度だつて、ちつとも心配してゐないのよ。さう言へば、二三日前梅ちゃんのも生れたてね。男の兒だつたけれども、重かつたつてね。前の日の午頃から一夜中かゝつたんだつて……。今年には産なみがよくないつて言ふわねえ。』

かう鈴子は話した。

『でも、産んで見れば、案じたほどのことはないわよ。』

『それはさうね。』

傍にゐた小吉は、

『羨しいわね、みんな子持で……。そんなお産の話なんかされると、不思議の氣がしますよ。私なんか丸で知らないことなだから……。』

『それはさうでせうね。』

かう鈴子と秀子は笑つた。

その傍では、秀子の兒の二つになるのが、聲高に笑つたりした。小吉は『可愛いわね』と言つて、それを自分で抱いて見たりした。

『秀ちゃん、子供を持つた時はどんな氣持？』

かう小吉が訊くと、

『さうね。』と鈴子の方を見て、『そんなことをきかれても、ちよつと口へ出しては言はれないわねえ。生れて初めて啼聲をきいた時は、變な氣がするものね。』

『さうね、本當に。』

かう鈴子も合せた。

『嬉しいでせうね。』

『嬉しいには嬉しいが、唯うれしいばかりぢやないわねえ。安心したやうなさつぱりしたやうな……。いろんな苦勞なんか忘れて了つたやうな氣がするわ。』

『さうですかね。』

小吉は經驗しない、これからもさういふ經驗には逢ひさうにも思はれない不可思議を捜すやうな顔をして言つた。小吉は矢張節操を守つたり、心を一つにすることの出来ない女であつた。鈴子の今度の戀なども、『何うして、皆なさう眞劍になれるものかね。私なんか、いくら惚れた男でも、疑つたり、だまされてるやしないかと思つたりして、とてもあゝいふ風に、何も彼も捨て、くつついて行くことは出来ないがね。』と言つたりする方の女であつた。



近所の人達は、相變らず、鈴子が構はない扮装で、全く世話女房で、もういくらか眼に立ち始めたお中をして、通りなどを歩いて行くのを見懸けた。湯屋では、鈴子は昔の友達にいろいろな話をしかけられたりした。

去年の暮は、一時男は景氣が好く、まだ流れずにあつた鈴子の質物などを出したり何かしたが、今年の二三月頃からまた餘り思はしくないとふ風で、鈴子はをりをり質屋の門を潜つた。隣へ行つては、「秀ちゃん、お氣の毒だけど……五十錢ほど一寸貸して頂戴。」など、言つて借りて行つた。

男の歸つて來ないやうな夜が續いても、鈴子はもう以前のやうにやきもき思はなかつた。さういふ時は何も用事もない身の、朝は、午近くまで、廁のところの雨戸を一枚明けたばかりにして、ゆつくり床の上に身を横たへてゐた。隣に來る五もくの師匠が、黄い聲で下地子に三味線を教へる聲を聞いて、「あゝもう一時だ……」と思つて漸く床から離れることもあつた。

起きたばかりのところに、秀子がやつて來て、「何うしたの？ 今起きたの？ 随分寢坊ね。あんまりいつまでも戸が明かずにゐるから、何うかしたのかと思つたわ。」

『だつて、用がないもの。』

『昨夜は歸らないの？』

『え、。』

別にそれを苦にもしてゐないらしいのを秀子は見て、

『氣にならない？』

『したつて爲方がないもの。歸つて來ないものを何うする譯にも行かないぢやないの？ 足に糸をつけて置くわけには行かないものね。』

かう言つて鈴子は暢氣さうに笑つた。

時には、何も彼もするのが厭で、雨戸を明けるのも、掃除をするのも厭で、茫然長火鉢の前——それは此頃は元のやうに氣にして拭きもしないので汚くなつてゐる長火鉢の前に半日坐つてゐることなどもあつた。かと思ふと、ある日は、別な人かと思はれるやうに、しやししやきと、赤い襷を十文字に綾取つて、ばたばたはたきをかけて掃除をしたり、雑巾掛をしたり、又そこらにたまつてゐる汚れた物を盥に一杯持つて行つて、近所にある水道栓のところ、女達と平氣で話しながら、一生懸命に洗濯をした。ある暑い晴れた日には、二階の狭い欄干に、餘り綺麗でない蒲團や夜着などを干した。

以前は、自分一人のさびしさ、父母も兄弟も何もない孤獨のさびしさを心から辛いと思つて、夜ひとりで悲しい涙をこぼしてゐることなどもよくあつたが、さういふ時には、男の浮氣が疑はれ、意氣地なさか呪はれ、貧しい頼りない生活が悔まれたが——旦那のわざわざ訪ねて來てまで呉れた情なども染々と思ひ出されて、何うしてかういふ氣になつたか、何うしてあんなに夢中になつて惚れて行つたかと、



自分で自分が怪しまれるやうになつたことが度々あつたが、今は鈴子はもうそんなことに多く心を悩ま  
さなくなつて了つた。鈴子はもう一人ではなかつた。鈴子は自分の體に中に生きて動いてゐる小さい呼  
吸と心臓と魂とを空に描いた。

## 二十五

夏は來た。

南風が大粒の雨を車軸のやうに二階の雨戸に降りつけるやうな日が三日も、四日も續いた。さういふ  
時には、低い川添の土地は、地水が出て、溝といふ溝がみんな開き、縁の下まで水がさして、ちよつと  
通りに行くのにも足駄の丈が立たないで困つた。『水が出やしないか、土手が切れやしないか。』かう言つ  
て人々は心配した。土手に上ると、川は岸につくばかり凄じく赤く濁つて流れて、いつも通つて行く帆  
の影すらも見えなかつた。雨は幌深く包んだ車の上から流るゝやうに落ちた。

しかし、さうした雨も長くは續かず、やがて赫と晴れた暑い日が濁つた埃の多い水の上を照した。

『好い鹽梅だ。これぢや、今年も水は大丈夫らしい。』

かう其處此處で言つた。

鈴子の家の裏の細い通りを通る人達は、その二階の雨戸が閉切りになつてゐたり、下の厠のところの

雨戸が一枚明けたばかりになつてゐるのを見た。いつもしんとしてゐることが多かつた。しかし此頃で  
は、もう何もめづらしくないので——さうした生活とさうした懷妊した女とは、何處に行つても澤山にあ  
るので、土地の人達の口にも、鈴子の噂はもう滅多に上るやうなことはなかつた。二階の庇を並べた格子  
戸の家々では、いつものやうに切火の音がして、藝者達は袂を取つてそこに待つてゐる車に乗つて出懸  
けた。

それでも、閑なTといふ妓の母親は、何うかするとその話を持ち出した。

『鈴子さんの家に、今でも男は毎日歸つて來るのかね。』

『何うして?』

『だつて、餘りしんとしてゐるからさ。いつ通つても、話聲なんて、滅多にきこえたことがないよ。』

『夜、遅いでせう。歸つて來るのは——』

『お前、見たことがあるかえ? その男を。』

『あるわ。おとなしさうな人だわ。矢張、女たらしだとか、何とか世間では言つたけれども、あゝして  
ゐる處を見ると、さうでもないのかも知れないわねえ。』

『鈴子さんが伶俐なんだよ。愚痴なんか少しも言はないからね。……それに、もう生れるんだから。  
男としても、あゝなつたものを投げ出して行くわけにも行くまいからね。』



かうした話の出た二三日後の秋晴に近い赫と照つた日に、秀子は鈴子が産氣が催して來たといふことを聞いた。秀子の家では、下女を産婆の家に走らせてやつたりした。

秀子はちよつと見舞に行つて歸つて來たが、産婆が來ると間もなく、やがて女の子が安らかに生れたといふことを聞いた。産は極めて輕かつた。綱を柱に張るまでもなく、三度目のいきみには、もう兒は生れてゐた。

それと聞いて、秀子が行つた時には、産婦が枕を高くして、白い顔を薄暗い室の空氣の中にくつきりと嬉しさうに見せてゐる向うで、産婆が後産の下りる始末をいろいろとしてゐた。生れた兒はさゝやかな聲を立て、啼いた。

縁側のすぐ下の狭い庭には、鳳仙花の赤いのや白いのが靜かに午後の日影を受けてゐた。

その日は男は早く歸つて來て、莞爾して、生れた兒を覗いて見たり、いろいろ世話になつた禮を秀子の家に述べに行つたりした。

かねていろいろ評判を聞いてゐる男を産婆はその時初めて見て、『かういふ人か』と不思議に思つた。それほど男はやさしい口の利き方をした。

鈴子の家には、それからをりをり小やかな兒の啼聲と、それをあやなすやうな鈴子の聲とが聞えた。おしめが竿につらねてかけてあるのなども見えた。

ある日、Tの母親は言つた。

『今日始めて見た。あの鈴子さんの男ッて言ふのを……。あそこを通ると、赤兒をあやすやうな男の聲がきこえるから、何氣なしにひよいとのぞいて見ると、縁側に立つて、男が兒を抱いて立つてゐるぢやないかね、お前……。ちよつとも好い男ぢやないぢやないか。それに、もう年も取つてゐるね。もう四十近いぢやないか。』

『そんなことはないわ。』

『さうかね。あれで三十二三かね。ふけてゐるねえ。』

根が丈夫な鈴子は、肥立つのも早かつた。十五六日も経つと、もう勝手に出て働いた。産褥にゐる間は、それでも男の遠い親類の老人が來て手傳つてゐたが、それもやがて歸つて行つて了つた。

をりをり秀子は自分の子を伴れて來て、『そら、赤ちやん、……。ね……。ゐたでせう。』などと小さな蒲團の上に寝てゐる兒を指して見せた。

一年経つた頃には、その生れた兒も大きくなつて、よく肥つて、人見知もせずに聲高に笑つた。相變らず餘り樂でない生活らしかつたが、それでも鈴子は、銘仙の新しい派手なねんねこを拵へて、大きな丸鬘に結つて、際立つて色の白い、頬の柔らかな、髪かみの濃い兒こをあたりに見せながら其處等を歩いた。と、通りすがりの妓達は、『まア可愛いわねえ、なんて色が白いでせう』と、言つて、母親の背を覗く



やうにした。

—花袋全集 第十卷 終—

解 説

宇 野 浩 二

「私も四十二三位までは駄目だった。人も恐れず世間も恐れなくなつたのは、四十五を過ぎて後である。さうでない人もあるかも知れぬが、人間と云ふものはどうしても年齢と云ふ事は重大な関係をもつてゐるものだと思う。(中略)仕事の方から考へても、自然主義運動などは何と云つても世間を対象にしたものであつた。それから後、だんだん思想も變つて來て、今日に到つたのである」。

右は、昭和四年、田山花袋が五十九歳の年に書いた文章の一節である。  
右の文章にこだはる譯でなく、四十五を過ぎた私は、花袋が、四十六歳の年の作、『時は過ぎ行く』、その翌年の作、『残雪』、その翌年の作、『再び草の野に』、その翌年の作、『新しい芽』、その他、晩年の作に、最も心を引かれる。が、ここでは『残雪』と『新しい芽』と『鈴子の戀』に就いて簡単に述べることにする。

この三篇の小説は、彼の最も得意とした、愛慾生活を主として扱つたもので、特に『残雪』と『新しい



『芽』は、彼の全作品の中で勝れた小説であるばかりでなく、大正昭和の日本文學の中でも勝れた小説であらう。

『残雪』は、藝術的には多少の缺陷はあるが、深刻な愛慾の苦惱と煩悶と迷ひとを、恐らく作者の身心の體驗を、或ひは反省するやうに、或ひは懺悔するやうに、或ひは咏嘆的に、或ひは感傷的に、それを、類ひ稀な正直さで、卒直さで、「人も恐れず、世間も恐れず」に、思ふ存分、書かれてゐる。自然、書かれてゐる事は可なり生ま生ましいが、それだけ讀む者を引きつけて離さないやうなところがある。これが前田晁が「三四年來、頻りに苦悶し動搖してゐた主觀が、遂に其頂點に達したものと見られる」といひ、「自然主義を逸脱して、宗教的、哲學的なものとなつてゐた」といふ所以であらう。

『残雪』を讀んでゐない人、『残雪』を讀む前に此の解説を讀む人のために、『残雪』のほんの一部分を紹介しよう。

「山門から、本堂に通ずる、あの高い數百段の石磴を無茶苦茶に登つた。(中略)まだ三十三町目の石標に達しないうちに、薄ぐれ近い空氣が次第にあたりに迫つて來た。(中略)今は奥の院に到達するといふより他に、他の事を思つてゐる暇はなかつた。思ふに、人間はかうした艱難に際した時に、初めて掌を佛の前に合せるのであらう。彼等の苦しい愛も亦それに似てはゐるまいか。(中略)かうして心を合せて聖者の行をした山の御堂に、ゆくりなく詣で行くやうになつたといふことも、彼等の愛に或る深い神祕

をもたらし來てはゐるまいか。(後略)

これは、主人公の男と女が身延山に參詣する途中、途中で道が餘り險阻なために、二人が不機嫌になつて、ここへ來たことを後悔した。といふやうな事があつた後の一節である。

『新しい芽』は、『残雪』より二年後、その前の年、『再び草の野に』といふ『残雪』と比べると抒情的な散文詩のやうな名作の後に書かれたもので、褒めて云ふと、『残雪』の長所と『再び草の野に』の長所とを合せたやうな小説である。深刻な愛慾が扱はれてゐるところは『残雪』に似てゐるが、『残雪』よりは小説らしい筋のあるところ、主人公の男が、作者の半面を現してゐるが、他の半面が、或ひは他の一面が、作者の創造になるところが『残雪』と違ふ。

又、この小説の別の特徴は、作者の好みである「廢墟」或ひはruinを背景にしてゐることである。例へば「沼も今日のやうに淺露なものではなかつた。夏の頃には、全く蘆荻や藪や水草に埋められてしまつたやうに見え、めづらしい不思議な水鳥の聲が、時には氣味わるく思はるるほど夥しくあたりを群り集つて聞かれた。」といふところなどである。而も、この小説はこの沼の場面で始まり沼の場面で終つてゐる。が、私がこの『新しい芽』の中で打たれるのは矢張り次ぎのやうな一節である。それを、『残雪』の場合に引いたやうな意味で、引いてみよう。



「かれの頭には、いろいろなことが往つたり來たりした。あの時から比べては、何んなに浮世のあら浪を凌いで泳いで來たか知れなかつた。また何んなに人間の魂の啜り泣くやうな光景に逢つて來たか知れなかつた。男女の歡樂が單に男女の歡樂である中は好い。又それが互に泣いたり笑つたり喧嘩をしたりして濟んでゐる中は好い。しかし、一度それが魂と魂との問題になつて來ると、最後は何うしても死にまで到達せずには置かないのが男女の戀の行詰りではなかつたか。死に到達することに由つて、初めて戀はその満足な贅を贏ち得て、そして妖しい得意な笑をその唇邊にたたへ、元の寂々とした位置に戻つて行くのではなかつたか。かう思ふと、これまでに身の周圍に絡み着き、纏ひ着いて來てゐるさまざまの羈絆が、更に新に深い暗い影をもつてかれに迫つて來るのを感じた。」

以上、少し長く引いたが、『新しい芽』は右の文章のやうな結果になるのである。

一般に、『残雪』が、新聞に出た時センセーションを起したので、勝れた作とされてゐるが、二年後に同じ新聞に出た『新しい芽』が『残雪』ほど知られてゐないのは、同じ作家の小説でも運不運といふものがあるであらうか。

何れにしても、このやうな高級な小説が、一つは十九年程前、他は十七年程前に、朝日新聞に連載されて好評を博したといふことを考へると、私は時代が逆に流れてゐるやうな氣がするのである。これは

私ばかりであらうか。

『鈴子の戀』は、題だけ見ると甘い小説のやうに思へるが、これも花袋でなければ書けない小説で、この小説では、主人公の男女も巧に書かれてはゐるが、作者を思はせる「旦那」といふ人物が出て來て、その「旦那」がこの小説を或る甘さから救つてゐるところは凡手ではない。私は、この小説では此の「旦那」に最も引かれた。

最後に、これは私だけの想像であるが、『鈴子の戀』の鈴子と『新しい芽』の小萬とが同じモデルのやうに思はれ、鈴子が後に小萬になるのではないかと思はれるのである。小説を読んで、かういふ事を考へるのは非常によくない事ではあるが、解説の文章が少し堅苦し過ぎたので、右のやうな冗談を附け加へた。(終)



昭和十一年九月十日印刷  
昭和十一年九月十四日發行



不許複製

著作者

田山錄彌

發行者

東京市小石川區竹早町三十二番地  
川俣馨一

印刷者

東京市本所區鹿橋一丁目二十七番地ノ二  
井上源之丞

東京市小石川區竹早町三十二番地

(内外書籍株式會社内)

發行所

花袋全集刊行會

電話小石川(85)一〇五四番  
振替東京二八七九〇番

花袋全集第十卷  
預約價金壹圓八拾錢

(刷印場工分所本社會式株刷印版凸)











